

を振つて仕舞つた、併し、どういふ譯でこんなに迷ひ易い作家の論文が「露西亞時報」見たいな眞面目な雑誌に現れるかと段々と深い疑惑に捉れて來た。けれど、急に一つの喜劇的な出來事が起つた——私は始めてアフセンコ氏が解つた……彼は冬の初め「銀河」といふ小説を上梓く始めた。(何故この小説は上梓を中止したのであらう!)この小説は私にアフセンコといふ作家の型を説明して呉れた。一體私が小説を云々するのは應しくない、私自身が小説家であるから、仲間を批評するのは私の爲にならない。だから、私は毫しも小説を批評しやうとは思はない、まして、その小説は私に眞に愉快な數分を與へて呉れたものを。例へば、その若い主人公たる公爵がオペラのボックスで音楽に感動して、人目も憚らずに泣きじやくつてると、一人の貴婦人が「あなたは泣いてゐらつしやるの?あなたは泣いてゐらつしやるの?」と、痛はしさうに彼の側に寄つて來る。がそんなことはどうでもよい。肝心なことは、私が作者の實質を解したことである。即ちアフセンコ氏は作家として、上流社會の渴仰に囚れて仕舞つたことを表明してゐる。約めて言へば、彼は地に墮ちたのである、そして、手袋や馬車や香水やボマアドや絹の着物を渴仰してゐるのである。(殊に貴婦人がソファアに腰掛けて、彼女の足やからだのところで衣摺れの音がする瞬間)それから、彼女が伊太利の歌劇から歸つて來る時、謹んで迎へる従者を渴仰してゐるのである。彼は絶えず、恭敬の念を以て、御祈りでもするやうな心持で書いてゐる、要するに、かういふ社會に神仕へをしてゐるのである。私はこの小説は、「アンナ・カレニナ」で、もつと敬ひ謹んで對さなくてはならない上流社會は餘りに公平な態度を取つたレフ・トルストイを矯正する爲に書かれたものであるといふことを聞いた(或は、愚弄の意味であらう)ことがある、が、眞に新しい文明人の型が闡明されなかつたものなら、こんなことを言ふ

には及ぶまいに。即ち批評家たるアフセンコ氏は馬車やボマアドや、特に従僕が婦人を迎へるところに文化の目的との貫徹と我が醜惡と苦痛の二百年期の完成を見てゐるのである、而も毫しも笑はずに、これに見とれながら、見てゐるのである。この恍惚の眞面目と誠實とが最も興味ある現象の一つを造つてゐるのである。茲に注意すべきはアフセンユ氏のやうな作家はアフセンコ氏が一人に限つてゐなかつたことである。それまでも『金巾の胸衣の容赦ないユウエナル(羅馬の諷刺家)』はあつたが、嘗てこんなに恭敬な程度ではなかつた。縱令彼等の皆が皆かういふ風でなくとも、かやうな文明の代表者は文壇にも、實社會にも、(こんなに純粹な型となつて現れないとしても)非常に多いことが段々と解つて來た。そこに私の悲しみがある。それが解つて見ると、オストロフスキイに對する罵倒も『佛蘭西式の舞臺でやると、時に人心を擡にするやうな、温かみのある、愉快な、ブルジュアの趣味』が何を意味するかと明瞭になつた。何たることだ?そこにはオストロフスキイでもなく、ゴゴリでもなく、四十年代でもなく(彼等は大いに必要なのだ!)單に上流社會の人たちが出入し、馬車を驅つて乗つけるミハイロフ劇場が凡てである。これが容赦ない力を以て作家を捉へ、作家を迷はし、作家の頭を永久に眩まし、攪き廻して仕舞つたのである。繰返して言ふが、單にこれを喜劇の見地から見るとは出來ない、もつと眞面目な注意を拂ふべきことである。畢竟、これは渾べて特種の狂熱から、即ち看過しなければならぬやうな、殆ど病的の薄志から生ずるものであらう。華美を極めた馬車は見せつけるやうに劇場に乗り着ける、あなたがたは、如何にそれが乗り着けるか、如何に燈火の光が馬車の小窓に射し込んで、その中に乗つてゐる婦人を浮き立たせるかを見てゐるのみである。これは文章を通り越して、祈りである、同情すべき祈りである。勿論、彼

等の多くは何か上等の手袋のやうな物で民衆の前に虚榮を誇つてゐるのである。彼等のうちには非常に自由主義な、殆ど共和主義者すらも混つてゐるが、いや／＼、俄かに手袋者流に變がへつて仕舞ふのである。この薄志と舞踏會で貴重な牡蠣と百留の西瓜を喰つてゐる上流社會の華美に對するとの渴仰はどんなにそれが無邪氣であつても——嘗て自分の魂といふものを持つたことのない、かういふ人物の間に特種の農奴論者を生んだのである。けれど、一度馬車やミハイロフ劇場を露西亞帝國の文化時代の完成と認めた彼等は主義に於て全く農奴論者となつたのである。そして、再び奴隸制度にしようとは毫しも考へてゐないにしても、少くも、文化の權利でもあるやうな態度を以て、明らさまに民衆を唾棄してゐるのである。彼等は民衆に驚くべき暴言を浴びせ掛けてゐる。自分たちが貢物を搾り取つてゐた、そして二百年の間縛られてゐた貧しい者を被動的だといつて馬鹿にし、その不様を責め、何にも教育されない者の無教育を責め、笞で打たれてゐた者の荒んだ心を責め、甚だしきはポリシヤ・モルスカヤ街仕込の理髮師のところでボマアドを塗らず、理髮をしないことさへも責めやうとしてゐるのである。

これは決して誇張ではない、文字通りにさうである。これが誇張でないところが肝心なのである。彼等の民衆に對する嫌疑は凄しい勢ひになつてゐる。若し民衆を讀めでもしやうものなら、自分には一字も解らない様な、物々しい文句を拾ひ集めて、禮容を飾らうとする政策から、それを囁し立てるのである。その文句は二三行置きに矛盾してゐる。私は、偶と、二年半前に私に起つた一つの出來事を思ひ出した。私は汽車に乗つて莫斯科へ行く途中、或る晩、自分の側に腰掛けてゐた一人の地主と話した始めた。暗くてよくは分らなかつたが、年の頃五十許りで、幾らか腫れ氣味の赤い鼻と、病氣らしい足を持つた男であつ

た。極めて謹嚴な型で、物腰と言ひ、話し工合と言ひ、意見と言ひ、非常に分別がありさうに思はれた。彼は貴族の苦しい、定めぬ状態や露西亞の經濟が著るしく頽廢したことなどを話した、その口吻には悪意の蔭は見えなかつたが、事物に對する見方は嚴肅で、太く私を興がらせた。ところが、どうでせう、急に何かの序でに、毫しもそれに氣が付かずに、彼は、肉體上に於て、自分が百姓とは較べにならない程の高さにあると思つてゐること、又それは無論のことであるといふことを口走つた。——それなら、あなたは精神上に發達した、教養のある人間の型を話したいのですね？——と私は問ひ詰めた。

——さうぢやない、全くさうぢやない、精神上許りではない、私の肉體上の素質が百姓の素質よりも高いのである、私は肉體が百姓よりも高くて麗はしいのである、これは幾代かの間、我々が自分を高尚にしやうと努めて來たことから生じたのである。——

そこには争ふべきことはなかつた、この瘰癧症の赤い鼻と病氣の足とを持つた弱い人間は（通風症は、恐らく貴族病であらう）自分が肉體上に百姓よりも高く、立派であることを正直に考へてゐたのである。繰返して言ふが、彼には何の悪意もなかつた、併し、この悪意のない人間が、その悪意のない所でも、その民衆に對する侮蔑的の見方から——彼から獨立した無意識な見方から、無邪氣が靜かに、正直に、民衆の前の恐ろしい不正を働くかも知れない。

さは言へ、私も自分の落ち度は改めなければならぬ。私は民衆の理想に就て書いた、それから、『放蕩息子として、家に歸つて來た我々は、民衆の正義の前に跪き、彼等から思想と姿のみを期待しなければならぬ』ことに就て書いた。又『他の側より、民衆も我々が賣したものから何ものかを取らなければなら

ないこと、この何ものかは實際に存在してゐること、決して唇氣樓ではなくて、姿と形と重さを持つてゐること、又さうでなくて、若し我々と民衆とが一致しないならば、彼等と別れて、個々に滅亡した方がいゝ』ことを述べた。この事が、今見る通り、皆に曖昧だつたのである。第一に、跪くべき理想とはどんなものであるかといふ質問が起つた。第二に、民衆が *Silberhorn* (拉典語、必須條件として) 我々から探らなければならぬと言ふ、我々が齎した貴重物なるものを私は如何に解してゐるかといふ質問が起つた。最後に、我々は歐羅巴であり、文明人であるが、民衆は露西亞であり、被動的であるといふ一事を以て、民衆が我々の前に跪く方が簡単ではないか?と質ねた。

アフセンコ氏は是等の意味に於ける問題を肯定的に解決してゐる、併し、我はアフセンコ氏に限らず、私の言ふことが解らなかつた『文明人』には、『金巾の胸衣の容赦なきユウエナルを始め、露西亞には何ものも保存すべきものがないと言明した諸君に答へたい。右の次第だから、若しも私があの方に簡略を追はないで、もつと詳しく説明したならば、勿論、私の言ふことに賛成は出来なくとも、私を誹謗し、曖昧を責めるやうなことはなかつたらうに。

三、論點の動搖と不確實。

多くの人は民衆には少しも正義がない、正義は文明に、文明人の上層に依つて保存されるものであると公言してゐる。完く善意からものを見る爲に、私は馬車や従僕のみの意味でなく、最高の意味で、即ち、

我々は精神的にも道德的にも、民衆と比例して發達し、眞の人間となり、それが、我々の名譽なことには我々が民衆と異るところであるといふ意味でこの貴重な歐羅巴の文明を解しやう。かやうに公平な言明をして置いて、私は眞つ直ぐに、『我々は民衆の文明を斥けて、自分たちの文明を讚美する程に、確かに善良であるか、又誤りない文化を受けてゐるか?又我々は何を歐羅巴から民衆に齎したか?』といふ問題を自分の前に提出する。

かやうな問題に答へる前に、順序として、一切の議論、例へば、科學とか、産業とか、何を以て歐羅巴は正當に我が國に誇ることが出来るかといふやうなことは斥けやう、今はそんなことを話してゐるのではないから。さういふ議論を斥けたとて悪いこととは思ふ、まして、科學などは歐羅巴のことで、我々即ち露西亞に於ける文明人の上層、二百年の學校を経たにも拘らず、化學に於てはそんなに陸離たる光彩を放つてゐない、又科學に對して我々に頭を下けるのは早過ぎる。それ故に、科學は露西亞の兩階級即ち民衆と上流の文明階級との間の重要な、劃然たる區別にはならない、又科學を我々と民衆との重要な區別として持出すのは全く正しくないのみか、誤りであるかも知れない、だからこの區別は全く他のものに求めなくてはならない。加之、科學は世界的の事であつて、歐羅巴の一國民がこれを發明したのではない、凡ての國民が昔からの努力を以て發明したのである。且これは繼承的の事である。固より、露西亞人は嘗て科學の敵となつたことはなかつた。それどころか、科學は既に彼得の前に我々に浸入して來た。イワン・ワシリエウイチ皇帝は彼得より百三十年も前に婆羅的沿岸を征服する爲に全力を傾注した。若しもこれを征服してその港灣を占領したならば、彼得のやうに、船舶を造らうとしたに違ひない、併し、科學がなく

ては造りやうがないから、彼得の時代と同じやうに、歐羅巴から科學を輸入したに違ひない。我が崇歐者流は、露西亞人は一個のサモワアルを發明した許りだといふ嘲笑を以て我が民衆を侮辱してゐる。けれど、歐羅巴人は彼等の合唱に加はるやうなことはない、凡ては自然と歴史の定まつた法則で造られるのである、我々が科學と産業とに造り出したものが妙い理由は智力の貧弱でもなく、露西亞人の能力が低いからでもなく、我々の恥辱としてゐる怠惰でもないことは餘りに明白である、この樹はこれこれの事に成育するが、他の樹は二倍遅いがある。凡ては民衆が自然や事情の爲にどんな工合に置かれてゐたか、彼等が第一に爲すべきことは何であつたかといふ事に懸つてゐる。こゝには地理上、人種上、政治上の理由がある、數千の理由があるが、何れも明瞭で確實である。智腦の健全な者なら一人として三十歳の人間が二十五歳でないと言つて、彼を責めたり恥かしめたりする者はなからう。『歐羅巴は被動的露西亞人よりも活動的で伶俐である、それだから科學を發明したのである、が露西亞人は發明しない』と言ふ。けれど、被動的な露西亞人は歐羅巴で科學を發明してゐる時に、それに劣らない活動力を發揮した、即ち王國を建設し、意識的にその統一を建設した。露西亞人は千年の間に、露西亞人がなければ歐羅巴に侵入したに違ひないであらうと思はれる頸敵を撃退してゐた。露西亞人は際涯のない祖國の果てに殖民し、その邊境を護り固めた、然るに今や我々文明人はこれを固めないで、却つて崩壊してゐるのである。遂に千年の後には、世界に比類なき王國と政治的統一が現れた、今日政治的統一の鞏固と獨特とを誇つてゐる英吉利と合衆國の二國も恐らくこの黙では遠く我々に及ばないであらう。その代り、歐羅巴には、政治上や地理上の事情が異つてゐる爲に科學が成長した。けれど、科學の發達と共に歐羅巴の精神的と政治的狀態は到る處に崩壊した。誰

のとこにも自分のものがある、従つて誰が羨むやうになるか、今では分らない。我々はどうにもして科學を擧得するであらうが、歐羅巴の政治的統一はどうなるか、まだ分らない。多分、獨逸人は十五六年前に自分の科學的名譽の半分を、露西亞には疾うからあつた政治上の力と交換することに賛成したであらう。獨逸人も今でこそ、少くも自分たちの見解では、鞏固な政治的統一に達したが、その當時はまだ獨逸帝國がなかつたので、常に我々を侮辱してゐるにも拘らず、内心では我々を羨んでゐたのである。かういふ譯で、持ち出すべき問題は科學や産業のことではなくて、我々文明人が歐羅巴から歸るに及んで、どうして精神的、物質的に民衆よりも高くなつたか、如何なる貴重物を歐羅巴文明の形を以て民衆に齎したか、といふ問題である。何故に我々は純潔な人間で民衆は醜惡であるか？何故に我々に凡てで、民衆は零であるか？私は我々文明人の中にはこの點に極度の曖昧があつて、『文明人』の中でこれに正しい解答を與へ得るものは少いことを是認する。却つて、夫々が自分勝手に何故に、松は七年の間に成長し切らなかつたのに、七倍多くの年を成育の爲に要求するかといふことを嘲笑してゐるのである——これは極めてありふれたことで、崇歐者流ばかりでなく、もつと教養のある人たちからも聞くことであるアフセンコ氏は言はずもがなである。

それからこの篇の始めに提出した『我々は民衆の文明を斥けて、自分たちの文明を讚美する程に、確かに善良であるか、又誤らない文化を受けてゐるか？』といふ問題に移らう。又『我々が何ものかを齎したとすれば、それは何であるか？』——といふ問題に。これに對して私は、我々は殆ど凡ての點に於て民衆よりも遙かに悪いと眞つ直ぐに答へる。

民衆の中に活動家が現れたかと思ふと、直ぐに業つく張りか騙りになると言ふ。(これを口にするのはア
フセンコ氏許りではない、それにアフセンコ氏は毫しも新しいことは言ひやうがない)第一に、これは嘘で
ある、第二に、果して細工の製造(これは細工物を拵へては賣つてゐる人たち即ち教化を受けた人たちに
騙したものであらう)をやつてゐる露西亞人が間にはかやうな業つくばりや騙りはないだらうか?且さう
いふものが多かつたら、それ丈け恥づべきことである、何故ならば、彼等は文化を受けてゐるが、民衆は
受けてゐないから。けれど、肝必なことは、民衆の中に活動家が現れるや否や、その多くが業つくばりや
騙りになると、民衆のことを言ふことは断じて出来ないところにある。私はどこにこれを是認する人たちが
成長したか知らない、私は子供の時から今日に至るまで、全く異つたことを見て来た。私が僅かに九才
の時であつた。或る時、降誕祭の三日目であつた、晩の六時に、我々の一家族、父、母、兄弟、姉妹が揃
つて茶を飲みながら、圓い卓子に着いてゐた。話は田舎のこと、夏にはみんなでそこへ行かうといふこ
とに花が咲いてゐるところへ、急に扉が開いたかと思ふと、實際にたつた今田舎から歸つて来た許りの、
うちの屋敷番のグリゴリイ・ワシリエフが現れた。主人の不在中は彼に田舎の支配をも頼んであつた、とこ
ろがいつても獨逸風のフロックコートを着、がつしりした様子をしてゐる『支配人』の代りに、舊いジブ
ンを着、(百姓の着る上着)草鞋を穿いた人間が現れたのである。田舎から徒歩で来たのである、部屋の中
に入ると、一言も言はないで、突つ立つてゐる。

——どうしたのだ?——と父は驚いて叫んだ。——どうしたといふのだ!
——ウオツチナ(世襲の農業地)が焼けました!——とグリゴリイ・ワシリエフは銅鑼聲で言つた。

それからの事は述べないが、父母は富裕ではなかつた、自分で働いて暮してゐたのである——それを降
誕祭にかやうな贈り物を持て来たのである!段々と聞いて見ると、凡てが丸焼けになつたのである、小屋
も穀庫も家畜屋敷も、春蒔きの種子も、家畜の一部分も、アルヒツプといふ百姓さへも焼けて仕舞つたの
である。最初の恐怖から、皆は全く灰燼となつて仕舞つたと想像した。皆は跪いて、祈り始めた、母は泣
いた。すると乳母のアレナ・フロロウナ(莫斯科の者で、雇ひで使はれてゐた)母の側へ寄つて行つた。彼
女は我々を——どの子をも——手に懸けて、育て上げた。彼女はその時分四十五六で、はきくした愉快
な氣質の女で、いつも我々に面白い事を聞かせて呉れた。彼女は『私は要らない』といつて給金は幾年も取
らなかつた、その給金は五百留許りあつたが、『年が寄つたら役に立つ』といつて、質屋に預けてあつた。

——そこで、彼女は母に囁いた……

——お金がお入用でしたら、私を取つて下さい、私は何にしませう、少しも要りやせんから……

彼女の金は取らないでも、事は濟んだ、けれど、茲に今はもう疾うの昔に、非常に金の要つた養育院で
亡くなつたこの淑かな女はどういふ型に屬してゐたであらう?——といふ問題が起る。かういふ人間は業
つく張りや騙りと同列に見ることは出来ない、私は思ふ。若し出来ないとすれば、彼女の行ひは何と決
めたらよからう、彼女は『本然的生存と韜晦的、田園詩的生活と被動的な生活の程度に於て』かういふ行ひを
したのであらうか——或は『被動』よりも少しは精力のあることを現したであらうか?アフセンコ氏がこれ
を如何に解決するであらうかは、非常に興味ある聴きものである。それは例外の出来事であると、侮蔑を
以て私に答へるであらう、けれど、私が一人でも、生れ落ちてから今日までには我が民衆の中にかやうな

出来事は幾百も見かけることが出来たが又、ほかにも唾棄せず民衆を眺めることの出来る観察者のあることを慥かに知つてゐる。あなたはアクサコフの『家庭録』の中で母親が、春の薄水の上を——彼等が渡つてから僅かに數時間経つと碎けて、流れて仕舞つたやうな氷の上に踏み出さうとする者はこの數日來、絶えてなかつた時に、廣いウォルガを横ぎつてカザンの病兒のもとへ渡して呉れと涙ながらに百姓たちに哀願したことを思ひ出せませんか？それから、この渡りの美しい描寫とそれから、渡つてしまつた時、百姓たちが母親の涙に引かされて、我が神たる基督の爲にしたことであると思つて、金を取らうとしなかつたことを思ひ出せませんか？これは奴隸制度の最も暗黒な時にあつたことである。どうしてこれが例外の事實であらう！若しこれが賞讃すべきことならば、『本然的生存と韜晦的、田園詩的生活と被動的程に於て』に過ぎないだらうか？これは例外な、偶然の事實に過ぎないであらうか？母親の悲しみに對する同情の念から進んで自分の生命を賭したことが——被動的に過ぎないと言ふことが出来るだらうか？否、民衆の正美からでなく、民衆の慈愛と慈悲と寛仁からでなくて、奴隸制度の最も野蠻な時代に於て何からかういふ事が起るであらう？あなたがたは言ふであらう——民衆は信仰を知らない、彼等は經文を讀むことが出来ない、彼等は板を拜んで、聖なる金曜日（バスハ前の金曜日）やフロルやラウルに就て譯の分らないことを囁つてゐると。

私はこれに答へる——かういふ思想は露西亞の民衆と、露西亞の文明人の中に頑くんに保存されてゐることに對するあなたがたの間斷なき侮蔑から現れたのであると。

我々は民衆の信仰や正教に就て二十位の立派な出来事や猥らな話を持つてゐる。そして、どうして坊主

が娘さんを説教してゐるか、どうして百姓が金曜日を祈つてゐるかといふやうな愚弄的な物語を喜んでゐる。若しもアフセンコ氏が、彼が書いたことは露西亞を救つた民衆の信仰に就てあることを眞個に諒解して、スラヴ主義者の言説を剽窃しなかつたらば、みんながみんな『業つく張りか穀潰し』でもあるかのやうなことを言つて、あんなに容易く、民衆を侮辱することは出来なかつたであらう。けれど、是等の人々は正教のことが何にも解らないのである。だからいつになつても我が民衆のことは解りつがない。民衆は學校で教はらなくとも、自分の神である基督のことは我々よりもよく知つてゐるのである。知つてゐればこそ、幾百年の間、幾多の苦痛を味へて來たのである。そして、自分たちの悲しみの中にその上から今日に至るまで常に民衆の爲に衆働き、身命を棄て、露西亞を護つた聖人たちが——彼等がその名を諳んじ、その墓前に祈つて、今日まで崇敬してゐる聖人たちから自分たちの神たる基督のことを聽いてゐたのである。この意味に於ては我が民衆の最も無智な者でさへも、あなたがたがあなたがたの文化的無識に於て彼等のことを想像するよりも遙かに教養が深いのである。あなたがたは教義問答を學んでゐる。あなたがた自身よりも、恐らく、もつと教養が深いかも知れない。

四、露西亞の百姓を解放する奇特な瑞典人。

アフセンコ氏は三月號の論文の中に次のやうなことを書いてゐる。私は完全に公平を保ちたいから、私が文句の掻き集めをして許りゐると言はれないやうに、敢てこの大きな拔萃をするのである。それにアフ

センコ氏のこの言葉は露西亞の民衆に關する西歐流の意見一般を表したものだと思へるから、それに答へる機會に遭遇したのを喜んでゐる……

……我々に取つては、我が教養ある少數者は最初如何なる條件に於て彼等を民衆から離隔する牆壁を注視したかといふことが重要である。彼等の眼に映じたものは彼等を愕かし、多くの點に於て彼等の中に現れた内面的要求を満足させなければならなかつたことは無論である。西歐文明の養子の役目に慊らない人たちはそこに歐羅巴の理想と全く異つた、而も立派な理想を見出した。失望した人たちが、當時の言ひ廻しに依れば、移入文明に掻き廻された人たちはそこに單純にして完全な原態と基督教の草分け時代を思ひ起させる信仰の力と教長時代の素朴な清新を見出した。既に陳べたる如く、二個の生活の對稱は斥くべからざる、異常の効果を齎すべき筈であつた。この本然的生存の靜かな波の中に身心を清め、山野の新鮮な空氣を呼吸しやうと欲した。優秀な人たちはこの教養のみならずして單なる讀み書きにも縁のない佇立生活の中に教育ある少數が跪かなくてはならない精神の偉大があるのに愕かされた。凡てからいふ印象は民衆との接近に對する巨大な需要を創り出した。

けれど、この民衆との接近なるものは如何に解釋されたか？民衆の理想は、民衆の生活が教養ある人士の生活から無限に遠く流れ、この二箇の生活の條件と内容とが全く異つてゐたからこそ明瞭なのである。民衆に近接して生活し、既に疾くより實際上物質上、この接近の需要を満たしてゐた教養の淺い人たちが、少しも民衆の立派な理想を認めないで、百姓は犬であり、無賴漢であると固く信じてゐたことを想ひ出す

であらう。これは非常に重要なことである。何故ならば、民衆の理想の教育的意義が實際には如何なる程度までに弱いか、この理想から救ひを豫期することが如何に困難であるかを證明してゐるから。是等の理想を諒解し、これを創造の極美に向上させるには、文化の水準を一定の高さにする必要がある。それ故に、吾々は、民衆の理想に對する崇拜なるものは同化された歐羅巴文明の産物にして、これがなければ百姓は今日まで我々の眼に犬か無賴漢として映つたであらうと斷言する權利があると自信する。従つて、我々と民衆とに取つて共通の惡は「文明」ではなくて、文明の主義が薄弱なると、我が「文明」の不充分なところに潜んでゐるのである。

如何に驚くべき、意外の結論であらう！この狡い言葉の取捕への中で最も重要なことは民衆の主義と（正教……何故ならば、實際に於て民衆の主義は悉く正教から出たものであるから）は如何なる文化力も、些かの教育的意義も有つてゐないといふ結論である。それ故に我々はこれを得る爲には歐羅巴へ出掛けなくてはならなかつたのである。「民衆に近接して生活してゐた教養の淺い人たちが」未だに「民衆の立派な理想」を認めないで、百姓は「犬であり無賴漢である」ことを固く信じ續けてゐたのは彼等が既に、自分の教養が淺いのに拘らず、爪の先までも文明に蝨毒され、民衆に近接して生活したと雖も、これと分離したが爲ではなくて、まだ文明が不充分であつたからではないか。民衆の主義の教育的意義の薄弱なことに對する辛辣な皮肉と、従つて、民衆の主義は何者にも導かないが、文明は凡てに導くといふ結論とが主要な問題である。私は疾くに、我々は我々の歐羅巴文明を墮落から始めたことを指摘してゐる。けれど、これに

就て特に注意すべきことは、是等の教養の淺い人たちが——併し、縦令微弱で、淺薄でも、色々の習癖や新しい偏見や新しい服装に於ても、既に已れを教化し得た人たちが即ち自分の舊い仲間や自分の國民やその信仰を、時には嫌惡するまでに侮蔑するのであるといふことである。かういふことは高貴な「伯爵の從僕」や貴族に成り上つた小官吏などによくあることである。彼等は彼等より遙かに正しく教化されてゐる「大旦那たちよりも手酷く民衆を侮蔑するものである。これは、アフセンコ氏がやつてゐる通りで、何にも驚くべきことではない。この「日記」の一月號で、私は私の子供の時分の印象である、百姓を打つた傳令使のことを書いたが、この傳令使は疑ひもなく民衆に近接してゐた、彼は一生涯を大きな街道に送つたのであるが、常に民衆を侮蔑して、これを打つてゐたのである——何故だらう？何故ならば、縦令近接して、生活してゐたとは言へ、民衆から恐ろしく遠ざかつてゐたからである。彼が些かも高い文化を受けなかつたことは、微塵の疑ひもないが、その代りモオルのついた傳令使の制限を貰つたのである。その制服が「打擲御免」の權利を彼に與へてゐたのである。彼は自分の制服を鼻に掛けて、百姓よりは途徹もなく高等だと自任してゐたのである。地主の位置もその通りで、その館は百姓の小屋から百歩位のところにあつたのである。併し、百歩は肝心でない、只人間が文明の醜惡を味はつたことが肝心なことである。彼は民衆に近い、その距りは僅かに百歩である。併し、この百歩の空間には大きな深淵が場を占めて仕舞つたのである。この地主が教化されたところとは眞個に露程である、がこの露程で腹の底まで墮落して仕舞つたのである。改革の初めに多くの者がさうなるべきものであつた。確言するが、アフセンコ氏は子供のやうに、こゝの道理が解らないのである、教養の淺い人たちがみんながみんな墮落し、みんながみんな民衆を

侮蔑した譯ではない、却つて、民衆の主義から異常な教育的意義を受けることの出來た者が彼等のうちにあつたのである。かういふ階級は彼得の改革當時から今日まで壞れずに續いた。又文明を味はつて、自分の文化を失はずに、再び民衆と民衆の理想に戻つて來た者が澤山にあつた。後になつて、この「忠實な人たち」の群から歐羅巴文明に高い教化を受けたスラヴ主義者の群が分れ出たのである。けれど、スラヴ主義者が民衆や民衆の理想に忠實だつた理由は、彼等の高い歐羅巴文明ではない、決してさうではない、却つて、民衆の主義の智識に及ぼす不休不盡の作用と、おのが天性の力に依つて、改革當時から、人格の零敗を來さずに、文明の力に抵抗することが出來た眞の露西亞人の階級の發達とが與つて力あるものである。思ふに、多くの人に取つて、我がスラヴ主義者なるものは——天から降つたもので、彼得の改革時代から、その改革の中にあつた不正なこと、空想的に突飛なことの凡てに對する反抗者として、自分の種族を導いてゐるとは思はれないであらう。再び繰返して言ふが、嘗て民衆を犬や無頼漢と思はなかつた、教化の少い人たちがあつたのである。彼等は自分たちの基督教を失はなかつた、そして、民衆を犬として眺めずに、弟として眺めてゐた。けれど、我が文明人はこれを知らない。知つてゐるとしても、是等の事實を蔑視して、少しも念頭に置かない、何故ならば、是等の、おのが基督教を失はない、文化の淺い人たちは、民衆の主義は教育力が微弱であるといふ彼等の根本的な、揚々たる題目に撞着するであらうから。さうだとすれば、彼等は、民衆の主義がそんなに弱くて、非教育的なものではなくて、文明が、たつた今始まつた許りなものにも拘らず、餘りに醜惡であつたから、薄志な人たちをこんなに多く滅ぼしたのであることを背せざるを得ないであらう。(薄志な人間は常に多いではないか)それ故に、アフセンコ氏は、「我々と民衆とに取

つて、共通の悪は文明ではなくて、文明の主義が薄弱なところに潜んでゐた」と連断し、それが爲に、早く
歐羅巴に趨つて、百姓を犬や無頼漢と思はなくなるまでに修業を積まなければならなかつたのである。
かうして我々は自ら歐羅巴に赴き、又向ふから教師を招いたのである。佛蘭西革命の前、ルツソオの時
代や女皇とウオルテルとの交通した時代に露西亞では瑞典人の教師を招くことが流行であつた……。

……皆に文化を持って行く瑞典人

これはフウオストフ伯の、だと憶えてゐる。私はこの詩人が歐羅巴の國民を數へ上げてゐる四行詩を憶
えてゐる……即

『土耳其に波斯、普魯西に佛蘭西、仇を忘れぬ西班牙人、』

伊太利の息子や、化學の息子は獨逸人、

わが品守る、商賣主義の息子は英吉利人、

皆に文化を持って行く瑞典人……』

『來てお呉れ、金は出すから、人間にしてお呉れ』——實際にその當時はかういふ流行があつた。ツル
ゲニエフの「貴族の巢」には歐羅巴で修業して、父の地領に歸つて來た當時の若い貴族の肖顔が閃いてゐる。
彼は自分のヒウマニテイと教養を誇つてゐた。父は彼が屋敷の生娘を唆かして、これを辱めたことを責め

た。ところが、彼は『詮ない事です、私は結婚します』と言つた。その時の光景を憶えてゐるでせう。父は
杖を取つて息子の後を追ふ、息子は英吉利風の紺の燕尾服を着、馴鹿のゾボンを捲き付けて、房のついた
長靴を穿き——鬪を抜け、雜穀場を抜けて一目散！家出をして、數日の後、娘を引取つて、當時の大氣に
磅礴してゐたルツソオの思想に仕へ——烈しく言へば、自分の愚昧から、理解と意志と感情の動搖から、
『みんな見ろ、俺はかういふ人間だ！』といふ激越した自尊心から結婚して仕舞つた。その後、彼は少し
も自分の妻を敬はなかつた。棄てたり、離別して苦しみたりして心底から侮蔑した。そして老年に達し、
臨終の際までも『グラシカ、グラシカ、馬鹿、肉湯を、肉湯を！』と、女兄弟を怒鳴りつけながら、意地の
悪い、性根の腐つた、耻知らずの爺となつて死んで仕舞つた。この小説は何といふ美と眞實とを有つてゐ
るであらう！而も、これは非常に教化を受けた人間である。けれど、アフセンコ氏はそれを語つてゐるの
ではない、彼は現在の文化を、即現代の文化を要求してゐるのである。即ち我が彼得堡の貴族をして、『ア
ントン・ゴレムイカ(グリゴロウイチの作。奴隸制度の缺點を指摘したもの)』を讀むに及んで、彼等を嗚咽
させ、土地ぐるみに農民を解放させ、もとの犬と無頼漢とにあなたと言はせるまでに教化した文化を要求
してゐるのである。實に何といふ進歩であらう！ところが、その後、あれまでにアントン・ゴレムイカに涙
を濺いだ地主は民衆をも、民衆の生活をも、民衆の主義をも諒解しない事が分つた。そして、露西亞の百
姓を佛蘭西の農民が茶碗焼き位に思つてゐたのである。ところが、政府が農民の解放に關する永い、困難
な仕事に着手して見ると、貴族や地主の意見なるものが田舎や、民衆の生活や、民衆の主義などに就て殆
ど笑ひ話にでもなる程の無識を暴露した。然るに、アフセンコ氏は、歐羅巴文明が民衆の理想の捕捉を促

したので、民衆の主義なるものは一切の教育的意義を失つたと主張してゐるのである。民衆の理想を捕捉するには、歐羅巴へ赴くか、少くとも、貴族が馬車を乗りつけるミハイロフ劇場の茶番を見に行かなければならかつたと思はなければならぬ。けれど、進歩と露西亞人の主義の理解とは一に歐羅巴から得たものであらしめよ、文化祝福あれ！現在の文化はこれまでに人間を導いたではないかと、アフセンコ氏の徒は絶叫してゐる。その前にあつては、正教を初めとして、民衆の理想などが何であらう！何等の教育力も有つてはゐない、そんなものは葬つて仕衆へ……と。

それでもいい。けれど、諸君、只一つ、次の問題に答へて下さい。この我々に土地と共に農民を解放するやうに教へて呉れた、是等の教師は、歐羅巴人は、是等の奇つた瑞典人は、何故に自國の歐羅巴では土地ぐるみ（茲では、泥の意で、前と對照させた皮肉であらう）許りでなく、母親が生んで呉れた（裸かにして）儘にして置いて、何人をも解放しなかつたか？而も、これは到る處である。何故に歐羅巴に於ける解放は富豪や男爵や地主から行はれずに、叛逆と暴動と火と劍と血の河を以て行はれたか？若し血を流さずに解放したところがあるとするれば、それはプロレタリアの主義に基いて、完全な奴隸の體裁に依つてである。然るに、我々は歐羅巴人に解放することを學んだと叫んでゐる。『教化を受けて、百姓を犬や無賴漢と見做すことを止めた』と、言つてゐる。然らば、何故に佛蘭西では、いや歐羅巴の到る處では、あらゆるプロレタリアを、何にも持つてゐない労働者を——未だに犬や無賴漢と見做してゐるのであらう——あなたがたもこれには異論がないでせう。勿論、法律では、プロレタリアが犬や無賴漢であると明らかに言ふことは出来ないが、その代り、犬や無賴漢を扱ふ通りのことが、プロレタリアに對しても出来るのであ

る。狡猾な法律はその際に所定の禮儀を守るべきことを要求してゐるのみである。『禮儀は保たう、だが、犬のやうに、今に飢ゑ死にしようとも、麵麩は與へない』——これが今の歐羅巴である。どうしてかうだらう？何といふ矛盾であらう？どうして彼等是我々にまるで反對なことを教へたのだらう？いや、諸君、これには仔細がある、何か露西亞では、あなたがたの言つてゐることは全く異つたことが起つたのである。よく考へ、御覽なさい、若しも我々が文化を通じて始めて百姓を犬や無賴漢と見做すことを止めたものとするれば、これを文化的根柢に於て、即ち歐羅巴に於て『さあ、可愛い兄弟、母親が生んで呉れたまま（裸かの儘）の自由になれ、尙名譽と心得ろ』といふ我々の教師のやうに、プロレタリアの主義に基いて解放したであらう。オストゼイスク地方で（婆羅的の諸縣）はこの通りの筆法で民衆を解放したではありませんか——それは何故であるか？何故ならば、オストゼイスク人は歐羅巴人で、我々は露西亞人に過ぎない。従つて、我々は歐羅巴人としてではなくて、露西亞人としてこの事業をやつたのである。そして、我々が土地ぐるみに民衆を解放したことは我々の教師や奇つた瑞典人に驚愕と恐怖を齎したのである。眞個に恐怖であつた。彼地には恐怖の聲が起つたではありませんか。共產主義だとさへ叫び出した。今では逝くなつたギゾオの我が民衆の解放に關する言葉を憶えてゐるでせう。『かういふことをして置きながら、どうして卿等は、我々が卿等を恐れないやうにと望むのであるか』——と彼は一人の露西亞人に言つた。否、我々が土地と民衆とを解放したのは文化のある歐羅巴人となつたからではない、恰も四十年前、その當時、自分の歐羅巴教育を呪つて、民衆の主義に歸つた。地主のプウシキンのやうに、ツアルを頂く露西亞人を自分の中に認めたからである。この民衆の主義の爲に露西亞の民衆と土地は解放されたのであつて、歐羅巴が

教へたからではない。却つて、我々が初めて民衆の正義の前に跪かうと決心したからである。これは露西亞の文明人が初めて独自の行動を取ることに決した、露西亞の生活に取つて偉大な機軸であつた許りでなく露西亞の生活の豫言的機軸であつた。恐らく、この豫言は速かに實現されるやうになるであらう。

けれど……けれど、私は茲で一と先づ筆を止めやう。この論文は「日記」の全部を占めるやうになりさうだから、次の五月の「日記」まで預ることにする。勿論、五月號に残すところは私の説明の最も肝心な部分である。念の爲に、その部分に入るべき事柄を擧げて置かう。即ち私は、或る人たちが、却つて、我々の光であり、唯一の救ひであり、民衆に對する我々の譽れであると見做して、さういふ高みから民衆に唾をかける権利があると自任してゐるやうな、方面の文明は全く無意義であることを指摘したのである。何故ならば、『民衆の主義』を賞讀し、これに狂喜しながら、これに何等の力も、何等の教育的意義がなく、單なる「被動」に過ぎないと力説やるのは、民衆の主義を唾棄するのと同じことであるから。アフセンコ氏のやうに、民衆は、『いまだ自分の行くべき道を選び出さない旅人に過ぎない』と主張し、『この謎から、このまだ自分自身の爲に思想も姿も見出さないスフィンクスから思想と姿とを豫期するのは皮肉である』と、考へるのは自分の論じてゐる對象を、即ち民衆を毫も知らないことを表明してゐるものである。私は、我が民衆は是等の諸君が最も貴重な、露西亞が二百年を費した得た獲物でもあるかのやうに誇つてゐる文明階級が陥つてゐる迷蒙と無定見には毫も陥つてゐないことと、民衆は爾く望みのないものでないことを指摘したのである。最後に私は、我が民衆の中には我が文化の過食や毛嫌ひから彼等

を救ひ、露西亞人たる相貌と容姿とを失ふことなく、彼等に來るべき教養を耐え得る所の固い心が完全に保存されてゐることを指摘したのである。

私が「民衆は謎」であると言つたとしても、それは是等の諸君が解したとは全く別の意味である。

私はかういふ論の末に自然に起つて來る問題——私自身が二月の「日記」に言つたやうに『若し我々教化を受けた露西亞人の階級が民衆の前にこんなに脆弱であるとされば、民衆が跪いて、*sin qua non*(拉典語、必須條件として)に我々から採らなければならない貴重物として、何を民衆に齎すことが出来るかといふぐらつき易い問題を自分は如何に解釋してゐるかといふことを闡明しないのである。この我が文明の貴重物と認むべき、又是等の諸君は、反對に、これまで毫しの注意も拂はなかつた方面を指示し、闡明したいのである。以上を五月號までに述べて置く。是等の問題よりも興味あり、緊要であるものを私は思ひ浮べることが出来ない、讀者してもさうであらうと思ふ。けれど、出来る丈け簡略に書くことを期して、アフセンコ氏のことはこれ以上に語らないやうに努めやう。

二 章

一、政治問題に就て。

みんなが日々の政治問題を語つてゐる、みんなが非常に興味を有つてゐる——どうして興味を有たずに

るられやう？或る非常に眞面目な人が、偶然が私と會つた時、恐ろしく眞面目に『どうでせう戦争はあるでせうかないでせうか』と、私に訊ねた。私は非常に驚いた。といふのは、私も皆と等しく、現下の時局に熱烈な注意を拂つてゐるが、戦争の免るべからざることには就ては考へもしなかつた。私の考へは正しかつたやうである。新聞にも近く伯林に三人の宰相が會見すると書いてゐる、さうすれば、さしもの永いヘルツェゴヴィナ事件も屹度露西亞人の感情に満足が行くやうに解決されるに違ひない。自由するが、まだ一ヶ月前には、このロヂツチ男の言葉も私の心をそんなに私に亂しはしなかつた。眞個に、始めてそれを讀んだ時は面白い慰みだ位に思つてゐた。ところが、その後この言葉から騒ぎが起つた。併し、私にはロヂツチ男は人を傷けやうとは思はなかつた許りでなく、彼の言葉には毫しの「政治」もなかつた、單に彼は露西亞の無力なことに就て愚にもつかぬことを口走つたに過ぎないやうに思はれる。否彼は露西亞の無力を語る前に、自分の膽の中で考へたのである——『若し我々が露西亞よりも強いとすれば、露西亞は全く無力である。我々は眞個に強いのだ、何故ならば、伯林は決して我々を露西亞に渡すやうなことはないから。お、或は伯林は我々が露西亞と闘ふやうにするかも知れない、けれど、それは一ツに自己の満足の爲であり、どつちがどつちを負かすか、双方には如何なる資力があるかをよく視届ける爲である。けれど、若し露西亞が我々を敗つて、窮地に陥れるやうなことがあれば、伯林は露西亞に『待て、露西亞！』と、言ふであらう——そして、そんなに大きな侮辱を蒙つても、我々を渡すやうなことは絶対にないであらう……勿論、小さな侮辱にも……。だが露西亞は我々や伯林と一緒に攻めるやうなことはしないから、事件は我々に取つて大した損害もなく済むだらう、否我々には、若し我々が露西亞を敗れば、

露西亞を敗れば、大いに利することが出来るといふ機會がある。かくて、一方に大いに利すると共に、若し露西亞が我々を敗るやうな場合があつても、損するところは非常に少いといふ機會がある。これは大いに良い、大いに政略的である！しかも伯林は我々の親友である、我々を非常に愛してゐる。何故ならば、伯林は我々から獨逸の領地を取りたいと思つてゐる、或は近々にこれを取るに違ひない。けれど、獨逸はそれをあてに我々を愛してゐるから、我々から取る我が獨逸の領地に對して、我々に酬ひる所があるであらう、——必ずやこれに對して土耳其スラヴたるの權利を我々に與へるであらう。これは伯林に取つて非常に有利なことであるから、——即ち、若し國民がスラヴたるの褒賞に預つても、我々は伯林に對して少しも強くなりはしないが、若し露西亞國がスラヴたるの褒賞に預れば、露西亞は伯林に對して強くなるに違ひないから——伯林はさうするにきまつてゐる。茲にスラヴ人は我々のものとなつて、露西亞のものとならない理由があるのだ、それ故に私は構はずに、私のスラヴの首領に對する演説中にこれを述べたのである。徐々に彼等を良い思想に達するやうに洗練しなければならぬ。……』

かういふ思想はロヂツチに限らず、一般の奧太利人にあり勝ちなものである。これには多くの渾沌があることは勿論である。スラヴ人が奧太利の政權に下れば、奧太利は第一着にその獨逸領を失ふとも、彼等を獨逸化するに違ひない。併し、歐羅巴に於ては露西亞の無力と露西亞が一時も早く、スラヴ人を自分の治下に大れやうと渴望してゐることを信じてゐるのは奧太利一國ではない。露西亞の政界に於ける最も著しい變動は、歐羅巴が露西亞は何ものをも侵略しやうと欲してゐないことを會得した時に到來するであらう。その時は我々に取り又全歐羅巴に取つて新紀元が到來するであらう。露西亞が無慾であることを悟れ

ば、若しそれがいつかは来るとすれば、歐羅巴の相貌は忽ちに一新し、一變するであらう。この信念は必ず勢を占めるに違ひない、けれど、我々の説得に因つてではない、歐羅巴は最終まで我々の説得などを信じやうとはしないで、始終我々を敵視してゐるであらう。歐羅巴が如何なる程度まで我々を恐れてゐるかは想像することが出来ない程である。既に恐れてゐるとすれば、憎んでゐるに違ひない。歐羅巴は明かに我々を好んでゐない、又嘗て好んだことがない、嘗て我々を自分たちと同じ歐羅巴人と視ないで、忌々しい闖入者だと言つてゐた。それだからこそ、歐羅巴は、露西亞は「當分は無力である」といふやうな考へを以て、好んで自分を慰めてゐるのである。

歐羅巴がさういふ風に考へる傾きのあるのもいゝ。私は、若しも我々がクリミア戦争に勝ち、一般にその時同盟國に勝つて制するやうなことがあつたらば、最も恐るべき災禍が露西亞を惱したであらうと信じてゐる。我々がそれ程に強いことを見て、歐羅巴の諸國は直ぐに異常な憎惡を以て我々に向つて起つたであらう。若し敗れたとすれば、——實際には平和などは成立するものではないが、——自分等を取つて不利な平和に調印するやうなことはなかつたであらう。彼等は直ぐに露西亞の勦滅を目的とする新しい戦争の支度に掛るであらう、そして、全世界が彼等の味方に立つてであらう。六十三年の如きも、單に辛辣な外交文書の交換位で濟みはしなかつたであらう、却つて、露國に對して世界を網羅する十字軍が組織されたであらう。且、その十字軍を以て歐羅巴の或る政府は自國の内政を改良したに違ひない、何故ならば、凡ての點に於て十字軍は彼等に有利であらうから。佛蘭西の革命黨や、當時の政府に嫌らない人たちも、露西亞を歐羅巴より放逐するといふ——「神聖な目的」の爲に早速政府に加擔したであらう。そして、戦争は國民

の戦争となつたであらう。けれど、その時運命は同盟國に捷利を與へ、それと同時に我が武名を保ち、これを増しさへもして、我々を護つて呉れた。だから敗北も未だ忍ぶ事が出来た。要するに、我々は敗北を堪へ忍んだ、けれど、歐羅巴に勝つた時の負擔は、我々にどれだけの活氣と力があるにせよ、堪へ忍ぶとは出来なかつたであらう。恰度かういふ風に、この世紀の初め、我々が歐羅巴からナポレオン一世の羈絆を攘ひ退けた時にも、運命は我々を救つた——普魯西と墺太利を我々の仲間（露西亞が一國でナポレオンに勝つたのでなく、普魯西と墺太利とが共力して呉れたやうになつての意。）にして呉れて我々を救つて呉れた。若しもあの時我々が獨りで勝つたとすれば、歐羅巴はナポレオン一世から受けた創痕が直り次第、再び我々に飛び掛つて來たに違ひない。けれど、有難いことに、さういふ風にならなかつた——我々が解放してやつた普魯西と墺太利は即座に捷利の名譽を悉く自分に歸した。後になつては、即ち今では、彼等が獨りで勝つたのである、露西亞は邪魔をした許りでであると直言してゐる。

總じて我々は歐羅巴ではどうしても勝つてはならないやうな運命に置かれてゐるのである。我々が勝てるやうなことがあつたにしても、非常に不利で危険である。只個人の、謂はゞ、家の中の捷利、例へばカフカの略取などは彼等も「許す」ことが出来るのである。故帝の在世中に於ける土耳其との最初の戦争と、それから間もなく起つた波蘭土との紛擾はもう少しで歐羅巴中に爆裂を起すところであつた。彼等は、見たところ、中央亞細亞に於ける我々の獲得物を「許した」やうであるが、國內では未だにガア／＼言つて、安心することが出来ないではないか。

さりながら、時局の推移は近い將來に於て歐羅巴諸國民の露西亞に對する態度を變更させずには置かな

いであらう。去る三月の「日記」に於て、私は歐羅巴の近い將來に就て少し許り自分の空想を陳べて置いた。けれど、もう空想でなく、確信を以て、最も近い將來に於て、露西亞は歐羅巴の中で最も強い國となるに相違ないと斷言することが出来る。これは歐羅巴に於ては凡ての強國が極めて簡單な理由から減じて仕舞ふからである。即ち、それ等の強國はそのプロレタリアと貧民の大部分の満足されない民主主義に依つて嬰弱し、疲弊するであらう。露西亞にはさういふことが起りつゝがない。我がデモスは満足してゐる、先へ行けば行く程、餘計に満足するやうになる。何故ならば、凡てが一般の氣分を以て——或は一致を以てと言つた方がいゝかも知れない——それに進んでゐるから。それ故に、歐羅巴の大陸にはたつた一つの巨人——露西亞が残るであらう。これは思つたよりも早く来るに違ひない。歐羅巴の將來は露西亞に屬してゐる。けれど、その時露西亞は歐羅巴で何をするであらうか？如何なる役目を演ずるか？露西亞はこの役目に應ずる用意が出来るか？是が問題である。

二 僻論家

序でに、戦争と戦争の噂とに就て一言する。私の知人に一人の僻論家がある。私は疾うからその男を知つてゐる。これは誰にも知れてゐない人間で、不思議な性格を有つてゐる空想家である。彼の事に就ては後になつて詳しく述べる。けれど、今鳥渡思ひ出したのは、もう數年前になるが、或る時、彼が私と戦争なるものに就て議論したことである。彼は、恐らく、バラドツタスの遊戯からに過ぎないだらうが、概し

て戦争を擁護した。斷つて置くが、彼は『文官』である、そして、世間で——この彼得堡でよく見受けるやうな、最もおとなしい、惡氣のない人間である。

——戦争が人類に取つて災厄であるとは——と就中、彼は言つた——亂暴な思想である。却つて、最も有益なものである。戦争の中では只一つ厭はしくて、眞個に有害なものがある、それは内争である、兄弟が殺し合ふ戦争である。この戦争は國家を殺し、國家を分解する、いつも切りもなく永く續いて、國家を永久に黙化して仕舞ふ。けれど、政治的の國際戦争はあらゆる點に於て利益許りを齎すものである、だから、全く必要である。

——失禮だが、國民が國民を攻め、人間が互に殺し合ひをしに行く、そこに何の必要がありますか？

——いつでも又非常に必要である。第一、人間が互に殺し合ひに行くといふのが間違ひである、そんなことは最初の計畫には決してないことである、却つて、最初の計畫では自分の命を犠牲にしに行くのである——これが首位に立たなければならぬことである。それは全く別の事である。

おのが同胞と祖國を守り、或は單におのが祖國の利益を守つて、自分の命を犠牲にするといふことよりも高い思想はない。寛大な思想がなければ、人類は生存が出来ない、私は、人類は寛大な思想に參じたいが爲にこそ、戦争を好むのだとさへ疑つてゐる。そこには要求があるのだ。

——果して人類は戦争を好みますか？

——どうして？誰が戦争の時に銷沈するか？却つて、衆人が俄かに元氣つき、衆人の魂が昂騰し、平時のやうな、普通の情氣と怠屈は聞きたくも聞かれない。それから戦争が終へてからは、それに就て想ひ出

すのを——敗北の場合でさへも——どんなに好むであらう！戦争の時に、みんなが會ふと、頭を振りながら、『不幸だ、長生はするもんぢやない！』と、言ひ合つてゐるのを眞に受けない。却つて、どの人も腹の中はお祭りなのだ。人の心中を見ることは六ヶ敷いことである。黙だ、保守だと言つて非難する。みんなはそれを恐れてゐるのだ。それで誰も戦争を讚美しやうとするものがないのである。

——けれど、君は寛大な思想に就て、即ち人間性の完成に就て話してゐるが、戦争がなければ寛大な思想はないだらうか？却つて、平和の時にはその發達に都合がいゝではないか。

——全くあべこべだ、全く反對だ。永く平和が續く時には寛大な心は減じて、その代りに破廉恥と冷淡と怠屈と悪意のある嘲笑とが現れる、而もそれがお祭りの慰みの爲で、仕事の爲ではない。永い平和は人間を残忍にすると思言することが出来る。平和が永く續く時は、社會の重心は人類の中にある悪いこと、亂暴なことに——就中、富と資本とに傾くものである。破廉恥、人愛、自己犠牲などの精神は戦争が終へたし當座こそ貴ばれ、敬はれるが、平和が永續するに従つて、是等の寛大な美德は蒼褪め、干乾びて死滅して仕舞つて、富と争奪とが凡てを捉へて仕舞ふ。最後に残るものは似而非物許りである——破廉恥の似而非物、自己犠牲の似而非物、義務の似而非物、だから、それが破廉恥極まるものであるにも拘らず、依然としてそれを敬つてゐるが、それは形式の爲の體裁の好い言葉の上に過ぎないのである。

眞の破廉恥はなくなつて、定式が残る。破廉恥の定式——それは破廉恥の死である。永い平和は情氣を醸り、思想の墮落を造り、醜惡を造り、感情を鈍らせる。享樂は洗練されずに、亂暴になる。亂暴な富豪は寛大な心を享樂することは出来ないで、もつと肉的な、もつと實際な、もつと直接的な肉慾の満足に近い享

樂を要求する。享樂が肉적인になる。安逸は色情を挑發し、色情は常に残忍性を伴ふものである。君はどうしてもこれを否定することは出来ない、何故ならば、平和の永續する時は、社會の重心は遂に亂暴富豪に移るものであるといふ、重要な事實を否定することは出来ないから。

——けれど、科學や藝術は——果して是等は、戦時に發達することが出来るか、これは偉大にして寛大な思想ではないか。

——そこが君を抑へるとこなのだ。科學と藝術は常に戦後の初期に於て發達するものである。戦争はこれを革新し、新鮮にし、思想を喚起し、鞏固にし、發動を與へるものである。然るに、平和の長引く時は、科學も衰微する。疑ひもなく、科學の研究には寛大な心と自己犠牲の精神とを要する。けれど、學者の中で平和の病ひに心を任せないものは澤山にあるか？虚偽の破廉恥と己惚と安逸とが彼等を捉へて仕舞ふ。例へば、嫉みのやうな煩惱を如何に始末するか。嫉みは粗惡で、醜劣である。而も、高潔を誇る學者の心にも浸入する。彼も世間の華美と光彩とに參じたくなる。富の儀式に較べたら、科學上の發見の儀式は、それが海王星の發見の如く、人心を動かすものでない限り、どんなに貧弱なものであらう。君の思つてゐるやうに、眞の勤勉家が澤山にあるであらうか？否、何れも名譽が欲しい、そこで科學にも香具師が現れ、評判の競り合ひが始まり、富が欲しいので、功利主義が跋扈して来る。藝術に於ても同様である。人氣の奪ひ合ひ、精巧の競争が始まる。單純な、明瞭な、寛大な、健全な思想は影を潜めて、もつと肉的なものが必要となり、熱精の技巧が必要となる。適度と調和との感情は段々に消滅して、感情の洗練と名づくる、實は感情の粗惡になつたものに過ぎないものが現れて、喜怒哀樂を曲けることを以て得意とするやうになる。

永い平和の末には、藝術は常にかういふ事に屈服するやうになるものである。若しも世の中に戦争といふものがないならば、藝術は根こそぎに滅びて仕舞ふであらう。藝術の傑れた思想は悉く戦争に依り、闘ひに依つて與へられたものである。悲劇を見給へ、立像を見給へ、コルネリのゴラツィイ（羅馬の詩人の立像）がある、怪物をも駭かすアポロンのペリエデルスキイ（希臘の神の立像）がある……

——それなら、マドンナや基督教は？

——基督教も戦争の事實を認めて、剣は世界の終るまで失くならないと豫言してゐる。これは驚異に値ひすることである。おお、勿論、最高の道徳的意味に於ては、戦争を排斥して、博愛を要求してゐる。剣を鎌に鍛へ直すやうな時が来れば、私自身が眞つ先に歡喜する。けれど、いつそんな事になるかが問題である。そして、今剣を鎌に鍛へ直す必要があるか！現在の平和はいつでも、又どこでも戦争よりもいい、これを擁護するのは不道徳だと言つてもいい。毫しの取柄もない、保存すべきとがない、否、これを保存するのは慚愧に堪へない。富と享樂の粗悪は怠情を生む、怠情は奴隷を生む。奴隷を奴隷の状態に保たうとするには、奴隷から自由意志と啓蒙の可能とを奪はなければならぬ。君がどんな人間でも、どんなにヒウマンな人間であつても、奴隷がなくては濟まないであらう。尙一言することは、平和の時は、怯懦と破廉恥とが膏肓に入るものである。人間はその天性として怯懦と破廉恥の傾向を多分に具へてゐるものである、彼はこれを立派に辨へてゐる。それだからこそ、人間はこんなに戦争を渴望し、これを好むのであらう。即ち彼は戦争に樂を感じてゐるのである。戦争は博愛心を發達させ、國民と國民とを結合させる。

——どうして國民と國民とを結合させる？

——お互を尊敬するやうにさせてさ。戦争は人間を新鮮にする。人愛は戰場に於て最も發達する。戦争は平和よりも人間に悪心を起させないといふことは、不思議な事實である。實際平時に於ける政治的屈辱や、醜劣な條約や、政治的壓迫や、不當な要求は——六十三年に歐羅巴が我々にしたやうな——公然の戦争よりも、遙かに悪心を起させるところが多いのである。想ひ出して見給へ、クリミア戦争の時、我々は佛蘭西人や英吉利人を憎んだか？却つて、一層近く彼等と親交を交へ、親身のやうにさへもなつたではないか。我々は彼等が我々の勇敢を語るのに興味を感じ、その捕虜を撫愛した。我が士卒は休戦の度毎に前哨に出て、殆ど敵と抱き合つて、ウエツカを酌み交さなかつた許りではないか。露西亞中の人たちは悦しがつてかういふ記事を読んだが、毫し華々しい戦意を挫きはしなかつた。却つて騎士魂が發達した。戦争の物質的困窮に就ては、私は語らない。戦後、凡てに異常な力を以て復活する所の法則を知らない者はないであらう。國家の經濟力は、凄まじい黒雲が乾き初つた地上に沛然たる雨を濺いで行つたやうに、十層倍も振興して来る。戦禍を蒙つた者は、平時なら、澁々して、三留も出さないうちに、方々の縣が飢饉で全滅して仕舞ふのに、衆人が擧つて救濟する。

——けれど、果して民衆は戦時に他の者よりも多く苦しみはしないか、社會の上流の人たちとは比較にならない、免るべからざる惨害と負擔とを擔はないか？

——それはあり得る、併し、一時だ、而も、損をするよりも、得をする方が多い。戦争は民衆の爲に最も良い、最も高尚な結果を残すものである。如何に君がヒウマンな人間であらうとも、矢張り君は自分を

細民よりは高尚だと思つてゐるのだ。誰が今日基督教の物指しを以て人間の心を計つてゐるか？みんな、財布と権力と力で計つてゐるのだ——細民も立派にこれを知つてゐる。それは嫉みではない——そこには何等かの、細民に取つて餘りに痛酷な、精神的不平等の感情が現れるのである。如何に解放し、如何なる法律を草したところで、現在の社會に於て人間の不平等は消滅するものではない。唯一の藥は戦争である。瞬間の、而も民衆には苦にならない藥である。戦争は民衆の意氣を昂め、自己の權威を自覺させる。戦争は戰闘の際に衆人を平等にし、人間たる權威の最も高い發現の中に——公事の爲に、衆人の爲に、祖國の爲に命を捧げることに於て主人と奴隸とを和合させる。果して君は、民衆が、最も無智な百姓や物乞ひが寛大な感情の動的發現の必要を感じてゐないと思ふか？然らば、平時には、是等の民衆は何を以て自分の寛大な心と人間たる權威を發揮することが出来るか？我々は細民中にも寛大な心の個々の發現は見るが、それを見とめる値打があると思ふことは疑はしい、時には疑惑の微笑を以て、或は頭から信じないで眺めてゐる。或る個人のヒロイズムを信じてもすると、直ぐに何か異常なことに打つつかつたやうに、騒ぎ立てる。そして、どうなるか、我々の驚きと賞讃とは侮蔑と選ぶ所がないではないか。戦時に於ては、かういふことは跡を絶つて、ヒロイズムの遺漏ない平等がやつて来る。流された血は大切なものである。寛大から生ずる協力の偉勳は平等と階級との最も強い連鎖を造るものである。地主と百姓とは（ナポレオン一世の侵入せる時の戦争）十二年に共に戦つた時は、故郷の平和な館にある時よりも、お互の心も近づいてゐた。戦争は民衆が自分を敬ふやうにする手綱である、さればこそ、民衆は戦争を好むのである。彼等は戦争の歌を作り、永くその物語を聴き傳へる……流された血は大切なものである！今や、戦争は現代

には必要である。戦争がなければ、世界は崩壊して仕舞ふか、少くも、何かどろ／＼したものが、腐つた疵から流れた汚水のやうなものになつて仕舞ふだらう……

私は、勿論、議論を止めた。空想家とは議論は出来ない。けれど、面妖な事實がある——疾うの昔に解決されて、古文書の倉庫へでも納めて仕舞つたやうに思はる事柄が今になつて論議に上り、衆人の考察する所となり始めた。今やかういふ事が再び掘り出されて来た。而も、到る處であるから驚かざるを得ない。

三 再び交霊術に就て一言

復たしても交霊術に關する『論文』を書く餘地がなくなつた、復たしても次號に延ばさなければならぬ。だが私は二月のうちに交霊術の會議に行つて見た。『眞個の』靈媒者もるたりして、可なりに強い印象を受けた。この會議に就ては、既に他の列席者が書いてゐるから、私には、この自分の印象より外に、傳ふべきものは何にも残つてゐない。けれど、今日まで、丸二ヶ月の間、私はこの事に就て何にも書きたくなかつた、それで、讀者に自分の印象を隠してゐたのである。前以て言つて置くが、それは全く特權の印象で、殆ど交霊術に關したことではない。それは交霊術が動機となつて現れた許りで、全く別なことの印象であつた。私は今までは何となく嫌惡を感じてゐたのに、今ではこの事に就て話して見たいといふ意氣が湧いて来たから、再び延ばさなければならぬ破目に陥つたのが、残念である。嫌惡は疑心から生じたのである。その時、私はこの會議に就て友達の或る者には話して置いた。私が常にその意見を尊重してゐる

る一人の友達は、私の話を聴いて、これを私が『日記』に書く積りであるかと訊ねた。私はまだ解らないと答へた。すると彼は『書かない方がいゝ』と、言つた。彼は何にも附け加へなかつた、私も強いて訊ねもしなかつたが、その譯は解つた。彼には、私が何ででも、交霊術の傳播を助けることがあつては、快くないのである。私はこの二月の會議を傳へるに及んで、熱心な所信を以て交霊術を否定したから、この忠告は私を駭かした。従つて、この交霊術を嫌つてゐる人たちが頭から否定してゐるにも拘らず、何か交霊術に都合の好いことを私の話の中に見とめたのである。それだから、私は今まで疑念と、自分自身に對する不信とからこれを書くことを控へてゐたのである。けれど、今ではもう全く自分を信頼して、この疑念を明かにすることが出来たやうに思はれる。且、私はどんな論文を書いても、交霊術の擁護にも、根柢にも貢献することは出来ないことを悟つた。私が今これを書いてゐる時に、ソリヤノイ・ゴロドツクで講演をやつてゐるメンデレエフ氏はほかの眼を以てこの事柄を眺めて、屹度『交霊術を押潰さうとする』立派な目的を以て講演をしてゐるであらう。かやうな、美しい方針を有つてゐる講演を聴くのは愉快なものであるけれども、交霊術を確信しやうと欲したものは、いくら講演をやらうが、委員會が躍起とならうが、到底思ひ止まらせることは出来ないと思ふ。だが、信じないものは、全く信じまいと思つてゐるさへすれば、どんなことをしても誘惑することは出来ない。これが即ちア・エヌ・アクサコフの宅の二月の會議で、少くも、その時は最初の強い印象として、私が贏ち得た所信である。その時までは、私は單に交霊術を否定してゐたのである。いや、實はその教義の不可思議な意味丈けに困惑してゐたのである。(私が靈媒者の臨席した會議の時までも多少は知つてゐた交霊術の現象は全く否定することが出来なかつた、今でさへも、

いや、交霊術の爲に設けられた學者會の報告を読んだ後の今では殊にその感がする。けれど、この目覺ましい會議があつた後、私は毫しも交霊術を信じないのみか、絶対に信する氣がないから、如何なる證明も決して私を迷はせることのないのに氣がついた——氣がついたといふよりは知り盡した。これがその會議から私が齎して、自分に闡明した所のものである。この印象は、會議に赴く際に、幾らかの懼れをなした自分を願れば、殆ど愉快なものであつた。附け加へて言ふが、それは私の一個の事許りでなくこの私の觀察の中には何か一般の事が潜んでゐると思ふ。何か人間の天性に關した、衆人に共通な、即ち信仰と不信仰とに關する特別の法則があるやうに思はれる。その時、即ちこの會議といふ經驗を経て——不信仰といふものは、——かういふ場合、全くあなたの意志を餘所にして、あなたの祕密な希望と一致してでも、——それ自身の中に如何なる力を見出し、發達させるものであらうかといふことが分明したやうな氣がする……信仰も、或は同じであらう。この事に就て私は語りたのである。

然し、それは次號まで預つて置く。が今は三月號で述べた今ではあんなに有名になつてゐる『委員會』の『報告』の補足として數言を加へることにする。

私は『報告』の不満足なことを、どういふことが報告の事業に取つて有害となつてゐるかといふことに就いて數言して置いた。けれど、私は主要なことを言はなかつた。併し、非常に單純なことでもあるし、それから、簡単に濟ますやうに努める。委員會はこの事業の主要な要求までに、即ち委員會の決定を期待してゐる社會の要求までに、氣位を下げることを欲しなかつた。委員會は社會の要求にはあまり心配しないで、

(然らざれば、委員會はてんでこの要求を理解することが出来なかつたと想像したかも知れない。)(交靈術を行ふのに使つた道具であらう。『闇に閃めく旋條』位で一旦損はれた人間の迷ひを解けるものではないことや、何事をも證明することの出来るものでないことさへも考へなかつた。

『報告』を読んで見ると、是等の學者たちは、交靈術は彼得堡のアー・エヌ・アクサコフの宅に許り存在するものだと思像して、社會に漲つて來た魂寄せに對する渴望に就てや、又如何なる根柢に於て魂寄せなるものが我が露西亞人の間に弘まり始めたのかに就ては殆ど知る所がなかつたやうに思はれて來る。けれど、彼等はこれを承知し切つてゐたのである、只無視してゐたのである。一切から推量するに、彼等は、我が社會が交靈術に溺惑してゐるといふ演説を聞きながら、この溺惑を愚弄したり、時には烏渡、これを洞察する値打があると思つてゐる個人たちと全く同じやうな態度を取つてゐるのである。けれど、委員會を組織した以上、彼等は社會の活動家になつた譯で、もう單なる個人ではない。即ち彼等は使命を擔つたのである。それを彼等は念頭に置くことを望まないで、全く以前の通りに個人たることを續け、笑ひ嘲りながら、彼等がかやうな愚舉を眞面目に研究するやうになつたことを只管に怒りながら、交靈術の机に着席したのである。

併し、アー・エヌ・アクサコフの家は旋條と針金とが引つ張り廻してあり、その上、靈媒者には足の間にガタ／＼する器械のやうなものがあるではないか(この狡猾なあてものに就てはエヌ・ベー・ワグネルが委員會に公開状を送つてゐる)けれど、一切の『眞面目』な交靈術の遵奉者は(おお、この言葉を嗤はないで下さい。これは、眞個に眞面目なのだから)報告を読んで、訊ねるだらう……『どうして、自分の宅で、

自分の妻でも子供でも、身内でも、知人でも、指を見れば解るやうな自分の宅で、どうして同一の現象が起るだらう、机は揺れ、持ち上つて、音がし、理に叶つた答が得られのだらう。私の家には器械もなく針金もない、私の妻や子供は私を欺しつこはないと信じてゐる。』かういふことを言つたり、考へたりする人が彼得堡、莫斯科を初め、露西亞には可なりに多くなつた、いや、非常に多くなつた。これは學者の威嚴を棄て、考へなくてはならないことである。これは傳染病ではないか、是等の人たちは救はなければならぬ。けれど、委員會は氣位が高くてそんなことは考へもしない。『只輕卒で、教養が足りない人間たちだから、信するのだ。』と、言つてゐる。『考へて見ても——と眞面目な交靈術の遵奉者は憂はしげに主張し續ける(彼等はまだ最初の杞憂である、最初の驚駭である——かやうに新しい、異常なことである)——私が輕卒で、教養が足りないにしても、私の宅にはガタ／＼する器械がないではないか、又こんなに面白い道具はどこからも取寄せない、誰がそんなものを賣つてゐるか、私には眞個に解らない。それならば、私のところではどうしてガタ／＼するのだらう、どうしてこの音は起るのだらう?あなたは、我々がどうかして無意識に机を押へるからだと言ふが、我々はそれ程までに子供ではない、だから自分で押へるのではないか位はちやんと氣をつけてゐる——好奇心と公平とを以て試験をしてゐるのですよ。』……

——お前たちには答へやうがない——すると委員會は氣色ばんで結論する——矢つ張りお前たちは欺されてゐるのだ、みんな鈍問だから、それが當り前だ、科學はさう言つてゐるのだ、我々は科學なのだ。——これは毫も説明にはならない。

『いや、これには何かほかの仔細があるのだ——と『眞面目』な遵奉者は結論する——奇術に過ぎない

なんてことは有りつこがない。あすこにはクレイル夫人があるにしても、私は自分の家族は知つてゐる。私のところでは誰も奇術をやるものはない。』かうして交霊術はもつてゐるのである。

私は今『ノオウオエ・ウレミヤ』でメンデレエフ氏がソリヤノイ・ゴロドツクでやつた講演の記事を読んだ。メンデレエフ氏は確固たる事實として、次のやうな結論を下してゐる……

……交霊術の會議に於て机は、手をそれに載せても、載せないでも、動いて、音を出してゐる。この音から、一定のアルファベットに依つて、交霊術を行つてゐる靈媒者の智識程度を常に反映してゐる、完全な言語や、文句や、文章が造られる。これは事實である。今や誰が叩いてゐるか、何を叩いてゐるかを明かにしなければならぬ。これを明かにするには次の如き六ツの假説がある……云々……

『誰が叩いてゐるか、何を叩いてゐるか？』——これが大切なことである。それから、これに關して、既に歐羅巴に行はれてゐる六ツの假説が提出されてゐる——これで最も『眞面目な』遵奉者の信念をも顧へさせることが出来るであらう。けれど、交霊術の歸依者のことを明かにしやうと望んでゐる、善良な人にとつて最も興味あることは六ツの假説があるといふことではなくて、メンデレエフ氏自身が如何なる假説を奉じてゐるか、又我が委員會は一體何を語り、何を證據としてゐるかといふことである。我々には自國の説が最も近くて、權威がある、歐羅巴や亞米利加には何があるか、それは不明なことである。講演

の先を見ると、委員會は又しても、奇術の假説を證據としてゐることが解る、而も單純な奇術ではなくて、彼等一流の誦欺と、足の間でガタ／＼する器械とを持つた奇術である。(これも、エヌ・ペー・ワグネルの證言に依つたものである。)けれど、若しも委員會のいふことが正しい場合には、そんなことでは足りない。——我が交霊術の遵奉者にとつては學者の『傲岸』位では濟まない、そこに禍ひがある。且、交霊術は愚なことであるにしても、そこには酷い誦詐許りではなくて、もつと優しい、言はゞ、もつとデリケートな心を以て接すべき、何かほかのものがあるに相違ない、何故ならば、自分の『妻も子供も知人も、自分を欺くやうなことはない』云々と結論してゐる『眞面目な』歸依者も正しいかも知らない。彼は自分の場所に立つたのである。彼をそこから叩き落すことは出来ない。彼は、そこには『常に誦詐許りではない』ことを知つてゐる。そこを彼は信じて仕舞つたのである。

實際、委員會の他の議論はいづれも、傲岸な性質を持つてゐる。——『輕卒なのだ、自分たちが無意識に机を押へるものだから、机が揺れるのだ。自分を欺いて机が音を立てると思ひたいのだ、神經が錯亂して、闇の中に座つてゐると同じことだ、調和がぐらついて、襦袢の袖に鉤が造られてゐる。(これはラチンスキイ氏の想像である)足の先で机を持ち上げてゐるのだ。』云々云々。だが、こんなことでは、自分を欺さうと思つてゐる者には馬の耳に念佛である。『失禮ながら、私の机は(一布度は四貫三百六十目餘)二布度あります、私はいつかなことでも足の先で動かすことは出来ません、どんなことをしても宙に持ち上げることは出来ません、そんなことは出来るものではありません、婆羅門の行者か奇術師か、或はあすこのクレイル夫人のやうに旋條仕掛の器械でやつたら持ち上るでせうが、私の家族にはさういふ奇術師や輕業師

が居りません。』

要するに交霊術は疑ひもなく、途徹もなく馬鹿けた迷誤である、まどわしの教へである、無智なものである。併し、机の蔭で行はれることは、委員会が信するやうに勸めてゐる程に單純ではない、又凡ての歸依者を一概に馬鹿である、間抜けであるといふ譯には行かない、そこが禍である。これでは彼等の人格に侮辱を加へるのみで、如何なる望みも達することは出来ない。この迷誤には、目下の社會事情を念頭に置いて、當るべきであると思はれるから、その調子と態度とを變更しなくてはならない。特に交霊術の不可思議な意義を——この極めて有害な事柄を注意に容れなければならぬ。然るに、委員会はこの意義を考慮しなかつた。勿論、委員会はこの惡を押し潰すことはどうしても出来なかつたらうが、少くとも、あんなに素朴でない、傲慢でないほかの態度を採つたならば、歸依者の心に委員會の歸結に對して尊敬を植ゑつけ、まだ迷つてゐる遵奉者に強い影響を及ぼすことが出来たであらうと思ふ。けれど、委員会は譎許を含んでゐる、單純でない奇術より外に、事の真相に近寄るのは學者の權威を穢すものだと思へたのである。交霊術は何かである、單なる欺瞞や奇術ではないといふ想像は委員會に取つて考へられないことであつた。我が學者たちのこの有様に就て歐羅巴では何と言ふであらう？かくて、只譎許を挿へなければならぬ丈で、外に用はないといふ所信に終始し、以て學者たちは自らその決定を偏見としか見られないものにして仕舞つたのである。或る賢い歸依者は（交霊術に考慮を費してゐる者の中にも賢い人があることを切言する。）新聞に出てゐるメンデレエフ氏の講演の中で……

この叩く音から、一定の文字に依つて、交霊術を行つてゐる、靈媒者の知識程度を常に反映してゐる、完全な言語や、文句や、文章が造られる、これは事實である。

といふ文句を読んで、『この靈媒者の知識程度の反映』といふのが恐らく交霊術の研究の中で最も重大なことであらう、そして、最も慎重な經驗に基いて結論を爲すべきであるのに、我が委員會は仕事に着手するや否や（彼等の研究は久しいといへやうか！）直ぐに、これは事實であると定めて仕舞つた。既に事實となつた譯である！……と思ふであらう。或は、又その場合、委員會は獨逸か佛蘭西の意見に即してゐたかも知れない、さうだとすれば、どこに彼等の獨特な經驗といふものがあらう？そこには單なる意見があるのみで、自分の經驗から出た結論はない。クレイル夫人許りに依つて、彼等は、一般の事實に就てとして『靈媒者の知識程度に相當した』机の答へに就ての結論を下すことが出来なかつた。それに、彼等はクレイル夫人を彼女の知識的、頭腦的高い方面から研究したかどうか疑はしい。單にガタ／＼する器械を——而も全く別の場所——見出したのみであらう。メンデレエフ氏は委員會の會員であつた、そして、講演をするに當つて、委員會を代表して演説したのである。いや、委員會が、かやうに重要な研究點を、かやうに輕々しい經驗を以て、かやうに急速な決定を下すのは餘りに傲岸で、殆ど科學的とは言へない。……と思ふ者があるに違ひない。

眞個に、かう思ふのは尨もである。事物の結論を下すのかやうに傲岸な手輕を以てするのは社會に、殊に交霊術の歸依者に一層熱烈におのが迷誤を固執させる動機を固執させる動機を與へるものである。『傲

岸だ、暴慢だ、揣摩だ、臆測だ。あんまり癩に觸る！」と、彼等は呷く。かうして交霊術は壽命を保つてゐるのである。

追白。今メンデレエフ氏の交霊術に關する二回目講演の記事を読んだ。メンデレエフ氏は委員會の『報告』が作家に醫藥のやうなききめがあると言つてゐる。『スウオリンはもうそんなに交霊術を信じてゐない、ボボルイキンも癒つたやうだ、少くも、癒りかけてゐる。それから、ドストイェフスキイも、その日記を見ると、癒つてゐる……一月には交霊術に傾倒してゐたが、三月にはもうこれを罵倒してゐる。』茲に『報告』の報告たる以所がある。従つて、名譽あるメンデレエフ氏は、私が一月には交霊術を讚美してゐたと思つたのであるか？惡魔の事からでもあるか？

メンデレエフ氏は、屹度、並勝れて心の善良な人であらう。二回の講演で交霊術を押し潰してゐながら、彼は二回目の講演の結論でこれを賞讃したではありませんか。『交霊術の歸依者に榮譽あれ。……』とは何が故だと思ひますか？（榮譽までに及んでゐる、何が故に急にこんなことを？）榮譽があるとは、歸依者たちが自分たちに眞理と思はれることの爲には、その偏見たるも恐れずに、正直にして勇敢な戰士となつたからだ、彼は言つた。これは屹度憐憫の心から、言はゞ、自分の成功に飽満した故に生じたデリカッシーから言つたことであらうが、デリケエトな結果が現れたか私は知らない。これは恰度立派な學校の職員が父兄の前で、『この生徒は學力では、その兄のやうに、賞讃することは出来ない。これは出来ぬし、又將來も知れたものだが、その代り、心は潔白で、品行は方正である。』と言つて自分の生徒に賞狀を與へると同じことで

ある。……これを聴く弟の心はどんなであらう？同様に交霊術の歸依者を賞讃して、彼等は今日の物質時代に於て精神のことに興味を有つてゐる、科學の上でなくとも、信仰の上では鞏固である、そして、神を信仰してゐるのだと言ふ。名譽なる教授は、屹度、大きな皮肉屋であらう。若し彼がこれを皮肉でなく、素訥に言つたとすれば、全く反對で、大きな皮肉屋ではない……

四 故人の爲に

『ウレミヤ』誌と『エボハ』誌の創立者であり、發行者であつた、十二年前に亡くなつた私の兄のミハイル・ミハイロウイチの記憶に泥を塗るやうな逸事が『ヂエロ』誌から『ノオウオエ・ウレミヤ』に轉載されたのを讀んだ時、私は非常に痛ましい感じがした。この逸事を文字通りに掲載すれば……

千八百六十二年、シチャボフが當時の『祖國の記録』と手を切りたと思つた時、ほかの雑誌は一時廢刊になつてゐたので、『ウレミヤ』誌に自作の『疾走者』を寄せた。秋頃彼は非常に窮してゐた。ところが、今では故人の『ウレミヤ』の主筆ミハイル・ドストイェフスキイは彼に拂ふべき金の支拂ひをいつまでも延引した。寒氣は迫つて來たのに、シチャボフには冬着さへもなかつた。遂に彼は我慢が出来なくなつて、ドストイェフスキイを自分のところに誘つた。その時、彼等の間には次の會話が行はれた。——「待つて呉れ給へ、アファナシイ・プロコピエウイチ、一週間の後には、君に全額を持つて來るから」とドス

トイエフスキイは言った。「今僕は金が要るのだ、そこを察して貰いたい！」——「今何にするのだね？」——
「僕には冬着がないのだ、着物が無いのだ」——「それなら、僕には馴染の仕立屋がある、彼のとこなら何でもかけて買へるから、僕が後で君の金の中から拂つてやらう」——そして、ドストイエフスキイはシチャボフを猶太人の仕立屋のところへ連れて行つた。猶太人はこの歴史家に外套や、上着や、チョツキやズボンを造つてやつたが、その品質は極めて怪しいもので、請求書には非常に高く書いてあつた、それに對して、世間馴れないシチャボフでさへも不平を滾してゐた。

これはシチャボフの生前録から『デエロ』に轉載したものである。私は誰が書いたのか知らない、まだ『デエロ』にも訊ねて見ないし、生前録も讀まない。上にも言つた通り、『ノオウオエ・ウレミヤ』から轉載するのである。

私の兄は疾づくに死んだ、従つて、事柄が不明だから、辯護は六ヶ敷い、——上に述べた出来事には一人の證人もない。従つて、證據のない批難である。けれど、私はこの逸事は根も葉もないことであることを確言する、その中にある多少の事情は虚構でないとしても、少くとも、凡ての事情が曲解されて、眞實は酷い目に遭つたのである。出来るだけ……これを證明しやう。

第一に言つて置くが、私は兄の雜誌に關する金銭の事や、彼の以前の商賣の事には嘗て携つたことはなかつた。『ウレミヤ』の編輯には兄を助けたが、金の勘定には毫も關らなかつた。けれど、『ウレミヤ』誌は、當時で言へば、赫灼たる成切を納めてゐたことは私にも解つてゐる。又寄稿者との勘定はかけて行

はれなかつた許りか、却つていつも大金を先拂ひで出してゐた。この事に就ては幾度も證人になつたのでよく知つてゐる。又寄稿者も窮してはゐなかつた、彼等の創刊の初年から、多くは自分で論文を持つて來たり、送つて來たりした。『ウレミヤ』の二ヶ年間に互る諸號を見れば、當時の文壇に於ける代表者の大部分がそれに關係してゐたといふことが分る。若しも兄が寄稿者に拂はかつたとすれば、いや、寄稿者に對して卑劣なことをしてゐたとすれば、かういふことは有り得ない。且、前拂ひで大金を拂つてゐたことに就ては今でも多くの證明者がある。これは皆蔭で行はれたことではない。當時の寄稿者は今でも澤山に生きてゐる、勿論、兄の經營振が彼等の見方と記憶にどういふ風に映つたかを證明するのを拒むやうなことはあるまい。要するに、兄はシチャボフに『支拂ひを延期』するやうなことは——況して彼が冬着を持つてゐないといふやうな時に——出来なかつたのである。若しシチャボフが兄を自分のところへ誘つたとすれば、それは支拂ひをしないのに『我慢が出来なくなつた』爲ではなくて、ほかの人たちと同じやうに金の先拂ひを頼んだのである。兄が死んだ後に寄稿者から發行所へ宛てた手紙や書きつけが澤山に残つてゐた、その中にはシチャボフの書きつけも見當るであらうと思ふ。さうすれば、彼等の關係も分明するであらう。けれど、そのほかに、シチャボフが恐らく先拂ひを請求したといふ事情は屹度眞實と、一切の思ひ出と、如何に『ウレミヤ』が經營され、發行されてゐたかといふ一切の證明と——十四年も前の事ではあるが、今でも集めることの出来る證明と符合するものである。兄は『實務家』であつたにも拘らず、人の無心に對しては可なりに弱い方で、斷り切れない性分だつた、彼は時として作家から原稿の取れるあてがなくとも前金を出したことがある。私は證人として誰彼と皆示すとが出来る。けれど、彼とはかういふ

關係はなかつた。或る定連の寄稿家は兄から六百留を前以て要求して、豊くる朝は、當時官吏を驅り集めて西の地方へ仕官する爲に發つて仕舞つた。そして、その地に止まつて仕舞つたから、兄は原稿も金も取れずに仕舞つた。然るに、最も驚くべきことには、兄は手許に書類を持つてゐたにも拘らず、嘗て金の催告をしたことがなかつた。彼の死後、久しく経つて、彼の遺族はこの寄稿家から（資産を有つてゐた）裁判をして金を催促した。裁判は公開であつた。この事に就ては最も正確な材料を得ることが出来る。只私は、兄が如何に手軽に金を前以て出してゐたかといふことを。かういふ人間は窮してゐる文士に支拂ひ延期することなどが出来るものでないといふことを述べたのである。シチャポフの生前録を書いた人は兄とシチャポフの對話のことを聞いた時、元來どういふ金の事であるか、兄の借金になつてゐる金が、或は前以て無心した金であるか——氣につかないでゐたのかも知れない。兄がシチャポフに馴染の仕立屋のところ、掛けて洋服を拵へるやうに申込んだといふことは大いに有り得べきことである。それは極めて簡単なことである——即ちシチャポフに助けを断るのを望まないで、彼は或る商量からぢかに金を手渡しする助けよりも、かうした方がいと思つたのかも知れない。

最後に、上に掲げた逸事では、兄の話し工合が分らない。兄はこんな調子で話しをしたことは決してなかつた。これではあの人物ではない。あの人間ではない。彼は誰のところででも決してお世辭を言つたことになかつた。彼は自分の話に蜜のやうな言葉許り掛けながら、甘い言葉を以て人の周りを廻つてあるくことは出来なかつた。『今僕は金が要るのだ、そこを察して貰いたい』などとはどんなことがあつても言ひ得なかつた。凡て是等の文句は、十二年の間に、この逸事の筆者が追憶の中で、或る見方を以て改作したもの

である。兄を憶えてゐる人たちに（かういふ人は澤山にある）——兄がこんな調子でものを言つたことがあるか訊いて見るがよい。私の兄は非常に嚴格なたちで、ジェントルマンとして、何事にも己れをゆるがせにしなかつた。非常に教養のある人間で、天稟のある文學者であつた。又歐羅巴の文學に精通した詩人で、シルレルやゲエテの有名な翻譯者であつた。私はかういふ人間が『逸事』の中に傳へられてあるやうに、シチャポフの前で追従することが出来たとは、思ひ泛べることが出来ない。

死んだ兄に就て、もう一つ誰にも知れてゐないやうな事情を挙げやう。四十九年、彼はベトラシエフスキの事件で拘引された、そして、二ヶ月間を監獄に暮した。二ヶ月経過すると、彼等の（その事件の關係者は可なりに多かつた）或る者は無罪として、事件に關係のない者として放免された。實際、兄はベトラシエフスキの夜の會にはよく行つた、そして、ベトラシエフスキの家にあつた秘密の共同圖書室から幾冊かの書物を借り出した。その時分彼はフリエリストであつた、そして、熱心に（佛蘭西の社會學者（千七百七十二年——千八百三十七年。共生主義者。）フリエを研究してゐた。かくて、獄中の二ヶ月、彼は自分が危険人物でないとは思はなかつたから、彼を釋放するだらうといふ確信は持てなかつた。彼がフリエリストであり、圖書を利用してゐたといふことは、勿論、暴露したから、嫌疑者として、西伯利でなければ、どこか遠くへ追放されることは覺悟してゐたかも知れない。二ヶ月後に釋放された者の多くは、若しも故帝の意志に依つて皆が放免されなかつたならば、必ず追放を蒙つたに違ひない、その事はベトラシエフスキの事件に關する詮議をしたガガリン公から聞いたことである。少くも、その時、私の兄の放免に關する

ことを聞いたり、その事に就てガガリン公は、私を喜ばず爲に、事件が取扱はれた、獄長の邸宅に態々私を呼び出して、私に告げた。けれど、私は獨身で、子供がなかつたが、兄は監獄に這入るに及んで、喪神したやうになつてゐる妻と三人の子供とを宿に残した、その中の一番上が僅かに七ツでその上に一哥コベックの金もなかつた。私の兄は自分の子供を非常に可愛がつてゐたから、どうしてこの二ヶ月を怵へてゐるかを察することが出来る。然るに、彼は、自分が何事にも參與した譯ではないが、いろ／＼のことを知つてゐたから、何かしら言ふことは出来たのに、自分の災難を軽くする爲に、他人を陥し入れるやうな、申立は微塵もしなかつた。彼の立場にあつたら、多くの人がかういふ風に振舞ふであらうが？私は自分が何の事を言つてゐるか知つてゐるから、強硬にかういふ問題を提出するのである。かやうな不幸に遭遇した時、人間がどういふ風になるか、私は見て、知つてゐる、私は好い加減な推量をしてゐるのではない。皆は好きなやうに兄のかうした行ひを眺めるがいい、けれども、彼は、自分を救ふ爲にさへも、自分の信念に乖くと思つたことはすることが出来なかつたのである。以上は證據のない、私の開陳であるが、今直ぐにでも確實な材料を以てこれを立證することが出来る。然るに、兄はその二ヶ月の間、毎日毎時、自分が家族を滅ぼしたことを考へては悶え、三人の大切な、小さな子供の身の上を案じては苦しんだ。今やかういふ人間を猶太人と仕立屋などの揉め事に引き出して、シチャボフを欺き、仕立屋と儲けを分配し、幾留キリウかを懐ろに入れやうとしてゐるのである！何ていふ淺ましい事であらう！

五月

一章

一、私人の手紙から

私がカイロワの事件に就て何か書くかと訊ねる者がある。私は既にかういふ質問の手紙を幾通も受取つた。その中の一通は殊に特質である、多分、印刷に附する爲に書いたのではなからうが、私は、勿論、絶對に匿名を守つてその中の數行を引用させて貰ふことにする。通信を下さつた方は私を恨まないやうにして頂きたい。且、私は通信者の誠意を確信して引用するのである。その誠意は心から尊重することが出来る。

……『我々は深甚なる嫌悪を以てカイロワの事件を読んだ。この事件はレンズの焦點のやうに、胎内的本能の縮圖を表明してゐる、その縮圖の爲に主要な登場人物（カイロワ）は文化的準備の方法を以て形造られてゐる。母は妊娠中飲酒に溺れ、父は酒呑みで、血を分けた兄弟は飲酒の爲に分別を失ひ、遂に自殺を遂げ、従兄弟は自分の妻を斬り、父の母は狂人であつた——この文化から暴虐な、自分の胎内的慾望を鎮めることの出来ない人格で出たのである。裁判所もこの人格の前に立つては當惑して、彼女は狂人ではないかといふ疑問を起したのである。鑑定人も一部はこれを否定し、一部は狂氣の可能を認容した。併しそれも彼女の人格の中に認めただけではなく、その振舞から推察したに過ぎない。けれど、この全體の出来事を通して顔を出してゐるのは狂女ではなくて、一切の神聖なものを極端に否定するやうになつた女である。彼女に取つては、家庭も、他の女の夫に對し、生命に對する權利も存在してゐないのである——一切は彼女一人の爲に、彼女の胎内的慾望の爲に存在してゐるのである。

『彼女を無罪としたのは、恐らく、狂人としてであらう』これはまだしも有難い！少くとも、精神的放逸は知識の進歩に關係のあるものでなく、精神病の類目に屬するものである。

『併し、婦人に許り夢中になつてゐる下の傍聴席には拍手が聞えた。』

『何を拍手したのか？狂女が無罪になつたのをおか、或は自制を失つた情熱の本體が捷利を得たのをおか、又女の顔に現れた破廉恥をおか？』

『婦人たちも拍手する、妻女たちも、母たちも拍手する！』

『かやうに女の理想を罵られては、彼女等は拍手するどころでなく、泣くのが當り前だ……』

（備考、私は茲に餘りに激烈な數行を省いた。）

『果してあなたがたは黙つてこれを濟ませますか？』

二、地方の新しい言葉

カイロワの事件を持ち出すのは（既に周知の）遅過ぎるし、又現代生活のかやうに特質のある現象に於て衆人の氣分が湧き立つてる中であつて、私は自分の言葉に勿體をつける譯ではない。けれど、この事件の動機に就ては、たとひ遅れ走せでも、尙一言する必要があるかも知れない。何故ならば、何事も終熄した譯ではないし、何事も遅いことはない、一切のことは、却つて、常に繼續して、その最初の階程に於ては過ぎ去つたとしても、常に更新されるものである、そして、主要なことは……再び私の通信者は私が手紙の抜き書きをしたことを許して貰ひたい。私が一人で受取る手紙許りで察するも、私が曩に暗示した通り『皆が不安を感じ、凡ての事に參與し、皆が意見を披瀝し、自己を表明しやうと望んでゐるが、各々が自分の意見に孤立すると、各々は世間の合唱に加はると、どつちを餘計に望んでゐるかといふ一事は決め兼ねる。』といふことが露西亞の生活に目立つてゐる一つの現象であるといふ結論を齎すことが出来ると思ふ。これは地方から來た私人の手紙である。けれど、序でに言つて置くが、我が地方は斷乎として獨特な生活を始め、又殆ど都會から解放されやうと欲してゐるのである。これは私一人が認めたことではない、私よりも遙かに早く新聞に出てゐることである。私の机の上には既に二ヶ月も、カザンで發行された、第一

一步」といふ浩漭な文集が載つてゐる。それに就ては疾うに一言すべきであつた。即ちこの本は都會的でない、地方的の「實際に必要な」新しい言論を發表する積りで、斷乎として現れたのである。ところが、これは舊い露西亞の合唱にある新しい聲に過ぎない、それ故に兎も角も面白いのである。この新しい傾向は何かから取つたのである。成る程、是等の立案された新しい言葉からは、實際まだ一つも新しいことは言はれてゐないが、恐らく、眞個に我が地方や邊境からこれまで聞いたことのないやうな事が聽かれるかも知れない。抽象的に、學理的に察すれば、凡てがさうなくてはならないであらう、彼得の當時から、露西亞を導いてゐたのは彼得堡と莫斯科とである、今や、彼得堡の役目と歐羅巴に向つて打ち抜かれた窓の文化時代が終りを告げた——今……彼得堡と莫斯科との役目は果して終つたであらうかといふ問題が起る。私の考へでは、その役目は變つたとしても極めて尠しきと思ふ、且、以前に於ても、百五十年の間、露西亞を導いてゐたのは、一體彼得堡であらうか或は莫斯科であらうか？又實際にこれはさうであつたが？そして、百五十年を通じ、彼得堡と莫斯科に流れ集つたのは露西亞の全體で自分を導いてゐたのである——莫斯科でも、彼得堡でも、リガでもカフカズでも、或はどこでも凡ての露西亞人には全く同一の目的であつたのである——だから常に地方や邊境すら新しい力が流れ込んで露西亞を更新してゐたのである。彼得堡は莫斯科と莫斯科の全體の思想とに反對して創設されたものであるといふ主義に於て、理論上から察すれば、彼得堡と莫斯科位、相反したものはほかにないであらう。然るに、この露西亞の生活の二中心地は實際に於て一つの中心地を構成したではないか、これは最初からの、改革の最初からのことであり、又も關係しなかつたではないか。彼得堡に生れて發達したと全く同じものか、直ぐに、而もその通

に獨立的に、莫斯科にも生れて發達したではないか、又その反對に莫斯科に生れたものが彼得堡に。さはれこの二都市許りでなく、この二都市と露西亞の隅々でも、全く同一であつた。それだから、露西亞中でどこへ行つても、それ／＼の所に全體の露西亞があつたのである。おゝ、我々は、露西亞の各地が自分の地方的特徴を有する権利とそれを發達させる権利を有つことが出来、又有たなければならぬことは諒解する、併し、その特徴とは精神の分裂や、或は單に困惑を以て我々を脅すやうなもの事であるか？概して、我々の將來は「暗い水」である、併し、これは何よりも明かなことであると思ふ。兎も角、發達することの出来さへするものは悉く發達させたいものである。良いものからは勿論である、それは第一のことであり、第二のことであり、主要なことである。如何なる幸福、如何なる好餌、如何なる寶物を嗜しても、團結を失はせないやうにしたいものである。離散よりも一緒がいい。どんなことがあつても、それが大切である。屹度、新しい言葉が言はれるに違ひない。けれど、私は、我が地方の人士が、少くも、今直ぐに、餘りに新しい、餘りに特殊な、餘りに聞いたことのない、堪へ難いやうなことを言はうとは思はない。大露西亞人はたつた今生き始めたところである、たつた今、恐らく、世界中に向つて自分の言葉を言ふ爲に起ち上つた許りである。それ故に、この大露西亞の中心たる莫斯科はもつと永く生かしたいものである。莫斯科はまだ第三の羅馬とはならなかつた。併し、預言は實現されるに違ひない。何故ならば、『第四の羅馬はなからう。』が、世界は羅馬がなくては濟まないだらうから。だが、今彼得堡は何時の時代よりも、莫斯科と同一になつてゐる。私は莫斯科なるものを何かの譬喩としての都と解して、語つてゐるのではない。だから、カザンもアストラハンも、毫しも腹を立てるには及ばない。我々はそれ等の地で發行された文集

を喜んでゐる、若し「第二步」が出たら、尙更いと思ふ。

三、裁判所とカイロワ女史

併し、カイロワの事件からは横途に外れすぎて仕舞つた。私は私の通信者に、縦令私は『本能の放逸と慾望の暴虐な跋扈』とに對する見方には異義はないけれども、併し、名譽ある通信者の意見には目的のない(何故ならば、彼は殆ど自ら犯罪者に狂女を認めてゐる傾きがある)嚴格と、それと闘ふことが出来ないまでに、影響を及ぼした仲間を自ら認めてゐるところを見れば、餘りに多くの誇張があるといふことを注意したかつたのである。私の考へは、カイロワを釋放したのは嬉しい。が彼女を無罪にしたこと許りは嬉しくない。私は一部の鑑定人の意見とは違つて、犯罪に狂氣のあることを信じないが、彼女をしたのは依然として嬉しい。これは私の一個人の意見として、自分の肚の中に仕舞つて置かう。その上、狂氣がないとすればこの不幸な女がどうしてか一層氣毒である。狂氣があるとすれば——『何をしたか知らなかつた』……狂氣がないとすれば——見て下さい、自分にこれだけの苦勞を怵へて見て下さい！若し「ハートのジャック(悪極まる人間)』でない者が殺すのでなければ、殺人は——悲痛な、複雑な事柄である。情人のもとへ情人の正妻が歸つて來た後のカイロワの懊惱、益々沸き立つ無念、一刻毎に募る腹立たしさ、おお、彼女は、カイロワは凌辱者である、私はまだ氣が狂つてはゐない、けれど、彼女が墮落の中にあつて、彼女は凌辱者であるといふことの解することが出來ずに、全く反對なことを感じてゐたのは、それだけ不憫

が勝るではないか)……そして、遂に前の晩に買つて置いた剃刀を手に持つて、階段に立つた、「義舉」の前の最後の瞬間——いや、かういふ事はカイロワのやうに、秩序を失ひ、鼎座の崩れた心に取つては、特に苦痛なことである。その負擔は力に除る、そこには、物に壓しつけられた女の呻き聲が聞える。それから——忍苦と癡狂院と鑑定人の十ヶ月——そんなに彼女は引つ張り廻されたのである。その折、この哀れな、重い犯罪者は、全くの罪人は、實際に、何か眞面目な、放埒な、何にも解らない、しまりのない、空虚な、身を投げだしてゐるやうな、自分を統御することの出來ないやうな、煮え切らないやうな梯子を現してゐた。それが宣告の間際まで續いた、それで、彼女を全く釋放した時には、どうしてか心が樂になつたやうであつた。只無罪の判決を下さないうちに、こんなことをしてはいけなかつたことは残念である、それではないと、どうしても、不味いことが起るであらう。法定辯護人のウチン氏は、多分、無罪の判決を豫感することが出來たであらうから、單に事實の陳述に止まつて、犯罪を賞讃しなくてもよかつたらうに。然るに、彼は殆ど犯罪を賞讃したではないか……それが、我々には何事にも物指がしない證據である。西歐巴ではデアウインの學説は傑れた假説となつてゐるが、露西亞では疾うに公理となつてゐる。西洋では犯罪は病氣に過ぎないことが屢々あるといふ思想が深い意味を持つてゐる。何故ならば、そこに明瞭に區別がついてゐるから。露西亞ではこの思想は何等の意味も持つてゐない。何故ならば毫し、區別がついてゐないから。そして、ハートのジャックが行つた醜惡それさへも殆ど病氣と認められてゐるかの憾みがある！否、その中に何かリベラルなことを見てゐるのである。勿論、私は眞面目な人たちに就て言つてゐるのではない。(併し、露西亞にはこの意味に於て眞面目な人たちが澤山にあるだらうか?)私は坊間のこと

を言つてゐるのである。一方からは無能な凡俗を、他の方からは自由主義を賣物にしてゐる香具師のことを語つてゐるのである。——その自由主義も、只自由主義のやうに見えさへすればいゝのである。法定辯護人のウチンはどうか？彼は多分法定辯護人として、ほかにやりやうがないと考へて、「犯罪を賞讃した」のであらう——非難のないやうな賢い人たちがかういふ事に溺れてゐる。而も、その結果は毫しも賢く行かないのである。若しも陪審員がほかの立場にあつたならば、即ちほかの宣告を與へる可能があつたならば、恐らく、ウチン氏のかやうな誇張に憤慨するであらうから、ウチン氏は自ら自分の依頼人を害するやうな事になつたであらう。併し、一切の問題は、彼等が別の宣告を下すことが出来なかつたことにあつた。新聞ではこの宣告に對して或る者は賞讃し、他の者は非難したが、私は、これは賞讃する所も、非難する所もないと思ふ、單に何かはかの宣告を下す可能がなかつたので、かういふ宣告を下したのである。次のやうな新聞記事があるから、自分で判斷して御覽なさい。

『告訴の要求に従つて、裁判所が持出した、「カイロワは、アレクサンドラ・ウエリカノワに、その生命を奪ふ目的を以て、豫め自分の行爲を熟慮して、頸や頭や腕に剃刀で數箇所を傷を負はせたのであるか？併し、ウエリカノワを殺害しやうとする意圖の遂行はウエリカノワ自身とその夫とに依つて止められて仕舞つた」と、言ふ問題に對して陪審員は否定的の答へをした。』

茲を考察しやう。これは最初の問題に對する答へである。さて、こんな風に持出された問題に答へるこ

とが出来らるであらうか？誰の良心がかやうな問題に對して是認するやうな答へを與へやうと決することが出来るか？（實際、否定的な答へも出来ないが、我々は陪審員の肯定的判決に就てのみ語つてゐるのである。）こんな風に持出された問題に肯定的な答へを得る者は、超自然的な、神のやうな全智を備へてゐなければならぬ。且つカイロワ自身も、『斬り了せるかどうか？』全く知ることが出来なかつたのである。然るに、『若しも彼女を止めたとすれば、彼女は斬り了せるかどうか？』と、陪審員に訊ねてゐる。前の日に剃刀を買ふ時、何の爲に買ふのだから、彼女も知つてゐたらうが、『斬り了せるだらうかどうか？』といふことは勿論、斬るだらうかどうか？といふことさへも、知らなかつたかも知分らない。否、彼女は、既に剃刀を手を持つて、階段に腰掛け、その後ろには、彼女の寢床に自分の情人が戀仇と一緒に寢てゐた時でさへも、この事に就ては氣が付かなかつたといふのが最も正しい判斷であらう。誰も、世界中で誰もこの事に就ては毫しも知ることが出来なかつたのだ。それ許りではない、縱令馬鹿らしく思はれても、私は、既に彼女が斬つてゐる時も、彼女は斬りたいのであるかどうか、その目的で斬つてゐるのかどうか、まだ知らなかつたかも知れないといふことを是認する。かう言つたからとて、私は、彼女が無意識の状態にあつたと言ふのではない、否、私は微塵の錯亂を容してはゐない。却つて、恐らく、斬つてゐる瞬間に於いて、斬つてゐることは知つてゐたであらう、けれど、意識的にこれを自分の目的として、自分の戀仇の命を奪はうと欲してゐたか——彼女はまるで知らなかつたかも知れない、後生だから、これを馬鹿けたことと思はないで下さい、彼女は嘔吐と憎惡の中に、毫しも結果に就ては考へないで、斬つたのかも知れない。この秩序のない、疲れ果てた女の性格から察すると——これは、多分、かうあつたであらうと思はれる。

陪審官の間違ひなく、斬殺そうとする目的で斬つたのであらうといふ肯定的の答へに不幸な女の運命が懸つてゐたのであらうといふことに氣をつけて下さい。そこに破滅がある。そこに苦役がある。どうして陪審員は自分の良心にかういふ責任を持ってないのであらう？彼等は、自分の答へを改めることが出来なかつたので、否定的に答へたのである。貴方がたは言ふであらう——カイロワの犯罪は考慮の上ではない、頭から出たのではない、書物から出たのではない、單に自分の戀仇が自分の寢床に同衾してゐたといふ極めて單純な「女の淺墓」があつた許りであると。爾く單純なことであらうか？若しも彼女が剃刀でウヰリカノワの咽喉を刺した時、叫び、顫えて、駈け出したらば、どうだらう？貴方がたは、どうしてそんなことは起りつことがないといふことが解るか？いや、屹度起つて、何事も裁判までにはならないやうなことがあつたかも知れないやうなことがあつたかも知れない。それを今、貴方がたを壁に押し着けて、貴方がたから、「彼女は斬り了せたかどうか？」と、知らうと努めてゐるのである。それは、勿論、貴方がたの答へに據つて——彼女を追放すべきかどうかといふ爲である。されば貴方がたの答へに出て来る些細の變改が幾年かの禁錮が懲役に相當する譯である。若しも彼女が剃刀を刺し、恐怖して、我と自らを斬らうとすれば——恐らく、自害して仕舞つたかも知れない——どうであらう？最後に、若しも、彼女が然悟しない許りか、却つて、熱い血の最初の迸りを感じ、狂亂の中に躍り上り、ウヰリカノワを斬つて仕舞つた許りか尙死屍を罵つて、首を斬り離し、鼻や唇を切り取り、そして、この首を奪はれた時に始めて、何といふことをしたのだらうと氣がついたのであつたらば、どうであらう？それ故に、私はかういふ事は同一の女から、同一の心から、同一の氣分と同一の事情にあつて起り得たことであると訊ねてゐるのである。かう言

ふのは、自分の言ふ事が間違つてゐないやうな氣がするからである。以上の事を考へて見れば、どうしてあのやうな、六ヶ敷い裁判所の問題に答へることが出来やう？これは家の中の茶話ではない、運命の解決である。かういふ風に問題を持出すのは、それに對して何等の答へも得られないといふ危険がある。

けれど、そんな事を言へば、若し犯罪が未遂であつたり、犠牲者が恢復しさえすれば、殺人も、殺人の意圖を裁判したり、問罪したりすることは出来やしないと云ふであらう。否、そんなことは毫しも心配することはないと思ふ。何故ならば、縱令犯罪は未遂でも（犯罪者の故意から未遂に終つたものでさへも）依然としてそれが一ツに殺人の目的から企てられたもので、ほかに何等の目的も有り得ないことが極めて明白な殺人の場合がある。繰返して言ふが、それには陪審員の良心が要る。これが肝心な、大きな事である。茲に新しい裁判の美德がある、この良心が陪審員に新しい判決を囁くのである。若しこのやうな大切な時に人間が、自分の心中に、「さうだ、罪がある。」と、確答する可能を感じるならば、恐らく犯罪者の有罪を見損ふことはないであらう。少くも、誤りの起るのは極めて罕であらう。只一つ、この陪審員の良心が眞に曇りなく、眞に鞏固で、紳士的な義務の感情で固められ、残忍に傾かず、或は却つて破滅を齎すやうな感傷に傾かないことが望ましい。この感傷を避けるといふことは、主要な希望ではないまでも、可なりに行はれ難いことである。感傷は誰の肩にも及ぶものである。感傷は軽いものである。感傷に毫しの努力も要らないものである。感傷は有利なものである。方針のある感傷は、今でも、愚物にも仕込の好い人間のやうな風キル與へるものである……

陪審裁判所が持出した。「彼女は同一の目的を以て、憤怒の焰の中に、傷を負はせたのであるか？」とい

ふ、第二の問題にも、陪審員は否定的に、即ち『否、負はせたのではない。』と、答へるよりほかの術を知らなかつた。何故ならば、茲に『同一の目的を以て。』と、いふ句は『兼て企んだ、ウエリカノワの命を奪ふ意圖を以て。』といふ意味であつたのだから。これに答へるのは、『憤怒に燃える』時は極めて多くの場合、『兼て企んだ意圖』を除外するものであるから、殊に六ヶ敷くなつて来る。それ故に、この裁判所の第二の問題には或る種の莫測した考へさへも潜んでゐたのである。その代り、『カイロワは確實に證明されてゐる通りの、喪神の發作に於てやつたのであるか?』と、いふ第三の問題には既に随分と確實に出鱈目が出つてゐる。何故ならば、最初の二問題が存在するに於て、その二問題と第三の問題とは積極的に反撥し合つてゐるから。陪審員が最初の二問題に否定的の答へを與へ、或は單にこれに答へを與へず置き場合には、何事を訊ねてゐるのか、『やつた。』と、いふ言葉は何を意味するか、即ち、如何なる行爲に就て訊ねてゐるのか、如何にその行爲を決定すべきかが不明になつて来る。

陪審員は、變改せずに、只さうか否か丈けを答へなければならぬ義務があるので、自分の答へを改めることは出来なかつたのである。

最後に、第四の、『若し喪神の影響を蒙らずにやつたとしたならば、第一若しくは第二の問題に擧げてある犯罪には有罪であるか?』と、いふ裁判所の問題は、陪審員は、勿論、この問題が最初の二問題の反覆に過ぎないのを故を以て、黙殺した。

かういふ工合に裁判所はカイロワを釋放した。『いや、負はせなかつた。』と、いふ陪審員の答へには、勿論、出鱈目があつた。何故ならば、傷を負はせたといふ事實が——何人にも辯解の出来ない、何人にも明

かな事實が否認されてゐるから。併し、彼等は、こんな風に問題が置かれてあつては、何かほかの事を言ふことは困難であつたのである。けれど、裁判所は、カイロワを釋放しながらも、或は、言はゞ、赦してやりながらも、被告を無罪としたのであるとは、少くとも、言ふ譯には行かない、それをウチン氏は犯罪者の罪とし、殆どこれを正しい、善いものと認めたのである。勿論、そんなことは有り得ないことである。然るにさういふ風になつて仕舞つたのである。

四、辯護人とカイロワ

私はウチン氏の辯論を吟味するのは止めにする。且、それは傑れたものではない。高潮な言辭や、種々の感情や、今の演説や文學で、自分の作物に見事な體裁——そのお蔭で自分の作物が「通る」やうになるかも知れない——を附ける爲に、猫も杓子も、時にはまるで無能な者でさへも（だからウチン氏には毫し順序でのことはない。）採用する曰く附のリベラルなヒウマにテイが筆棒に多い。この曰く附のリベラルなヒウマニテイを我と自らに裏切てゐる。誰でも、これは手輕な參考に過ぎないといふことを知つてゐる。今、はもう十年前とは違つて、これが氣に入るものは尠いと私は思ふ——それを、人たちの心に、殊に彼得堡の人たちの心にまだその時分のやうな素朴があると思つてゐる。我々の素朴は「活動家」にはどうでもいのである。活動家には「仕事」に従事したり、仕事に没頭する暇はないのである。加之、彼等の殆ど凡ては輪を重ねるに従ひ、成功するに従つて惡魔の性根が出て來たのである。且、もうヒウマニテイには充分に

端して来たのである。言はば、ヒウマニティの控子を卒業したのである。だから、自分が引受けた、氣の狂った依頼人の苦しんでゐる、亂れた心の不幸などに拘はつてゐることは出来ないのである。彼等の胸には、心臓の代りに投所じみた物の塊りが鼓動してゐるのである。そして、その塊りは、永久に、曰く附きの言葉や文句や感情や思想や舉動や見識のストックを、勿論、最新のリベラルな流行に依つて、轉賣したり、將來の臨機に備へたりする爲に掻き集めてゐるのである。それから、一生の間、安樂と幸福とに沈溺するのである。殆ど常にさうなつて行くのである。私はこの新しい活動家の定義をウチン氏に當て嵌めやうとするのではない。彼は傑れた才能がある。彼には感情も慥かに自然である。併し、彼は法外に多くの激烈な言句を自分の辯論に填め込んだ。それが——味ひの不足ではない——この場合、事件に對する態度が慎重であらうか、眞個にヒウマンだらうかいふ疑ひを起させるのである。我々の辯護士たちは、才能が多ければ多い程忙しく、従つて、暇がないといふことを認めなくてはならない。ウチン氏にももつと暇があつたであらう、『子供を奮はれやうとして、戦つた牝獅子』なんていふ高調な文句を使はなかつたであらう、又あのやうに幼稚な暮言を吐いて犯罪の犠牲たるウエリカノワ女史を攻撃しなかつたであらう、彼女を斬つて了はなかつたことに對して、彼女を罵倒するやうなことはなかつたであらう、(殆どさうではないか!)最後に、福音書から罪ある女のことを言つた基督の言葉を籍りて、突飛な語呂合などはしなかつたであらう。併し、實際の事件はこんな工合に行はれたのではないかも知れない、そして、ウチン氏が眞面

目腐つた様子をして、辯論をしたのであるかも知れない。私は裁判所に行かなかつたが、新聞の記事で見ると、そこには、言はば、傲慢な放逸といつたやうなものがあつたやうに思はれる——要するに、毫しも考慮を費さない、寧ろ滑稽な事が多分に含まれてゐたやうである。

私は辯論の劈頭から困惑に陥つた。そして、ウチン氏は、検事のカイロワに對する問罪の辯論が「赫灼たるものであり、傑れたものであり、雄辯なものであり、ヒウマンである。』が上に、問罪といふよりは寧ろ辯護であつたことに對して検事に感謝しながら、笑つてゐるのではないかと怪しまざるを得なかつた。検事の論告が雄辯であり、ヒウマンであつたことには疑ひがなかつたらう。それが極めてリベラルであり、一般に是等の諸君は互ひに賞め合つてゐることや陪審員がそれを傾聴してゐることに疑ひがなかつたらう。けれど、ウチン氏は、問罪者たる検事の擁護辯論に感謝して、終りまで獨自の立場を保ち、擁護の代りに、おのが依頼人たるカイロワ女史を有罪にすることは欲しなかつた。これは残念である。何故ならば、非常に慰みになることで、恐らく、實際に適合するやうになるかも知れないから。我々の陪審員を驚かす事は困難であるから、彼等はそんなに驚かなかつたかも知れないと思ふ。この私の無邪氣な注意は、勿論、自分の申談に過ぎない、ウチン氏は罪に問ひはしない、擁護したのである、若し彼の辯論に缺點があつたとすれば、それは熱心過ぎる程に擁護した所に、言はば、鹽を利かせ過ぎた所にあるのである、それは、上にも陳べた通り、只「事件」に對する態度に慎重を缺いてゐることに歸因すると思ふ。『時が來れば、高潮な言辭で仕上げて見せる……この「會場(辯護士社會のこと)」には充分である。』……と、多分、今日ではもつと忙しい辯護士の或る者は思つてゐるのであらう。ウチン氏は、自分の依頼人に出來る丈け理想的な、

浪漫的な、空想的な風韻を備せやうとしてゐるのである。併し、これは全く要らないものであつた。カイロワ女史の本體は落がない方が明瞭である、けれど、辯護人さんは、勿論、陪審員に悪い影響を齎したのである。彼女の中に於ては一切が理想的である、彼女の行爲は悉く非凡で、寛大で、優美である、彼女の戀は——沸つてゐる。これは詩である！カイロワは一度も舞臺に出たことはなかつたが、急に女優になる契約を結んで、露西亞の果てのオレンブルグに去らうとする。ウチン氏は彼女のかうした行爲には「彼女の日頃の親切氣と自己犠牲の精神とが現れてゐる。」とは主張してはゐないが、『そこには一種の理想郷と狂氣と、主として、獻身とがある。彼女は母を助ける爲に、職を求めする必要があつた、そこで彼女は、自分には全く適しない職を探つて、彼得堡を捨て、獨りでオレンブルグへ赴くのである。』と、言つてゐる。それがどうしたか、そこには變つたことや、驚くべきことは毫しも起らなかつたやうに思はれるではないか。そんなところへ行くやうなものは珍らしいか。貧しい、美しい、不幸な、才能のある娘で、かういふ旅立を承諾し、カイロワ女史に與へられた條件よりも、遙かに悪い條件の仕事でも喜んで探るやうな者は珍しいか？然るに、辯護人の口吻に依ると、それが獻身の犠牲となり、女優になる契約が殆ど美譽であるかのやうになつてゐる。この先の事も凡て此調子である。カイロワは間もなく一座の座長たるウエリカフ（ウエリカフは女の性、ウエリカフは男の性。これはウエリカフの夫。）と交りをつ結んだ。彼の事は甘くない。『彼女は彼を氣遣つて、補助金を無心し、解放して呉れるやうに運動してゐる。』それがどうしたのだ、これにも變つたこととは何にもない。且、カイロワのやうに、殊に元氣のいい、眠としてゐられない性分の女は、この場合、既に密通を結んだ、可愛い人の爲に「氣遣ふ」のは當り前ではないか。ウエリ

カノフの妻との場面が始まつた、ウチン氏はそれ等の場面の一つを描いて、この後から彼の依頼人はウエリカフを「自分のもの」と、思ひ込み、彼を自分の創つたものと、「自分の可愛い子供」と見た。序でだが、この「可愛い子供は莫迦に背の高い、がつしりした體格で、後頭に縮れた髪を有つた男ださうである。ウチン氏は自分の辯論の中で、彼女は彼を「自分の子供」と見、「自分の創造物」と、見て、彼を「出世させ立派にしやう。」と、欲したと主張してゐる。ウチン氏は、カイロワ女史がこの特別な目的がなくてもウエリカフに執着することが出来たであらうといふことを明かに排斥してゐる。然るに、この「可愛い子供」は、「創造物」は毫しも立派にならないで、益々悪くなつたではないか。

要するに、ウチン氏には是等の人物や事柄に適合しない、餘りに高い氣概が隨所に顔を出して、時々驚かされることがある。事件が始まつて来る、「可愛い子供」と、カイロワは彼得堡に着いて、それから彼は莫斯科に職を求めに出掛ける。カイロワは彼に意中を籠めた手紙を書いてやる、彼女は情熱に充ちてゐる、ところが、彼はどうしても手紙を書き得ない、彼はこの點から恐ろしく『立派でない。』『その手紙には、後に一面の空を蔽つて、嵐を起すやうになつた雲片が覗き始めてゐる。』と、ウチン氏は言つてゐる。けれど、ウチン氏はもつと簡単に説明することが出来ない、彼はどこでも、かやうな言句を弄してゐる。遂に、ウエリカフは再び戻つて来る、そして、彼等は再び彼得堡で暮すやうになる（Marriage. 勿論）——ここに小説の中の最も大切な挿話が始まる——ウエリカフの妻がやつて来る、そして、カイロワが「子供を取られやうとする牝獅子のやうに戦ふ」のである。こゝで、眞個に、澤山の雄辯が始まる。若しもとの雄辯がなかつたならば、この、夫と妻との間をうろたへ廻る、どういふ手段を取つていゝか解らない、哀れな、

氣のふれた女性がもつと氣の毒になつたらうに。ウエリカノフは「不實な人間」——單に薄い人間であることが解つた。彼は——愛してゐることを説き立て、妻を欺いたり、別宅から彼得堡のカイロワのところへ行つて、妻は直きに外國へ行くといつて、彼女を安心させたりする。ウチン氏は依頼人の愛を單に美しい許りでなく、感化的の、言はず、高德な體裁を以て紹介してゐる。彼女はウエリカノフに夫を譲り渡して呉れといふ申込を出さうとしたではないか（何故か彼を領有する權利を有つてゐると思つてゐたのである）。『取りたければ、お取んなさい、一緒に暮したければ、お暮しなさい、けれど、茲を去つて呉れるか、さもなければ妾が去りませう。どつちかに決めて下さい。』彼女はかう言ひたかつたのである、言つたかどうか、私は知らない。けれど、誰もどうとも決めなかつた。カイロワは、何にも質問などをせず、途方もない決定などを待たずに、自分が去るべきであるのに（若し何とかして片をつけたと思つた以上）只うろたへ廻つて、逆上せ上つてゐた。『鬨はないで彼を渡したとすれば、それは女ではない。』——と、ウチン氏は俄かに叫んでゐる。何の爲に色々の慾望や、質問や、「申込」などの事をそんなに語るのであるか？『情熱は彼女の胸を掻き撈つた。』——と、ウチン氏は裁判官に説明してゐる——『嫉妬は彼女の理性を勦滅して、恐るべき演戲を演ぜしめた。』『嫉妬は彼女の分別を粉碎した、その分別からは何にも残らなかつた。』どうして彼女は自分を處理することが出来たであらう。『こんな工合に十日も續いた。』彼女は疲れた、彼女は熱病に襲はれたやうになつた。彼女は食ひもせず、眠りもせず、彼得堡へ走つたり、オラニエンバウムへ走つたりした。かうして疲れ果てた時、七月七日の不吉な月曜日がやつて來たのである。『この不吉な月曜日に疲れ果てた女は自分の別宅へ來て見ると、ウエリカノフの妻がゐると聞いて、寢室に近寄り、そ

して……

『陪審員諸君、果して女は落ちてゐるだらうか？これが爲には石になることを要する。彼女に心がないことを要する。彼女が情熱を以て愛する男が——彼女の寢室にゐる、彼の寢床にほかの女とゐる！これは彼女の力に及ばないことであつた。彼女の感情はあらしの奔流となつた、その奔流は途中で打つゝかつて來るものは悉く粉碎する。彼女は躍起となつた、彼女は周圍の凡てを粉碎することが出来た（！）若し我々がこの奔流に向つて、何をするか、何故に悪事を齎すかと訊ねたならば、果して我々に答へることが出来るであらうか？否、奔流は黙然として一言も發しないであらう。』何といふえらい文句であらう、何といふ凄ましい「感情」であらう！『熱してゐるさへすれば、どんなかの効果が出る。』けれど、是等の文句を調べて見やう、これは非常によくない文句である、而も、それがウチン氏の辯論の中で最も主要な箇所となつてゐるので、尙悪い。

辯護人さん、私は、カイロワが、貴方の描寫してゐる場面に於て、平靜を保つことが出来なかつたといふ貴方の意見には少しも異議はない。けれど、それは彼女が——カイロワが弱いのと、或は貴方の言ふ通り、非常に善良で、思ひやりがあつて、情に脆い女であると同時に（彼女がかういふ性質を持つてゐることに就ては、私はこれまで貴方の辯論から知る許りである。）不貞な女であるからではなからうか？私は茲で天性が不貞であると言ふのではない——この女は不幸である。まして、この點で判断するのではないから、彼女を侮辱するやうな事はしない積りである。私は、私には議論がないと思はれる、彼女の智情が不貞であるといふ事を言ひたいのである。この不貞に依つて彼女は危機一髪の瞬間に彼女が決心したより他

には事を決することが出来なかつたので、決して、ほかの行動を取るやうに決するには、辯護人さんが言つたやうに、『石になることを要し、心のないことを要した。』からではない。考へて御覽なさい、辯護人さん、貴方はこれを主張しながら、もつと明かな、もつと立派な、もつと寛大な、他の血路は全く考へに入れてゐないではありませんか。若しもかういふ瞬間に剃刀を投げ棄て、事件に他の血路を與へることの出来る女があつたならば、貴方は、従つて、その女は女ではなくて、石と名づけ、心のない女と名づけるであらう。かうして、貴方は上に私が陳べたやうに、殆ど「犯罪を賞讃した」のである。これは、勿論、貴方の側から言へば、無論立派な感激であつた、併し、残念な事には、かういふ輕率な言論が我々の社會の若い論壇から叫ばれるやうになつた。辯護人さん、貴方は、私が貴方の言葉に眞面目の注意を拂つてゐることを許して下さるでせう。それから、女にも高尚な型と高尚な理想のあることを考へて下さい。その理想は世に現れて來た、それは争はれない事實である。若しもカイロワ女史が最後の瞬間に、剪刀を手にしながら、偶と自分の運命を明かに見て取り、心配しないで下さい、時として有り得ることです、即ち最後の瞬間にはよくあることです。自分の不幸を覺り、何故ならば、かういふ人間を戀するのは不幸であるから。自分の耻辱と墮落とを覺り、何故ならば、實際にはかういふ「罪障の女」には「寛大や自己犠牲の精神」許りでなく、辯護人さん、多くの虚偽と無恥と邪惡と墮落とがあるものであるから。——そして、自分の中に新しい生活に蘇つた、自分は「凌辱者」であるが上に、この人間を許せば、もつと多く、もつと正しく彼を立派にすることが出来るといふことを覺つた女を感得したならば、俄に起つて、『どこまで、妾は墮落したのだらう!』と、涙に濡れて立去るであらう。それで、若しもかういふ事がカイロワの身に起つたならば、

どうであらう!——それでも貴方は彼女を憐れと思ひませんか。果して貴方の善良な心の中に同情の念を見出さないでせうか。果して俄かに魂と心とに蘇つたこの女を石と呼び、心のない存在と呼ぶでせうか。そして、まだ衆人が渴えたやうに傾聴してゐる若い論壇から、果して侮蔑を以て彼女の非を公言するでせうか?

けれど又、『一切を要求してはいけない、それは人情に乖く。』といふ聲が聞える。知つてゐる、私は要求してゐるのではない。私は彼女が寢床の側で耳を欬てゐるといふ所を讀んだ時、思はず身顛ひがした。私はこの最後の瞬間に、剃刀を手にしながら、彼女が何を體驗したかを明かに諒解し、想像することが出来る。カイロワ女史を釋放したと聞いた時、私はどんなに嬉しかつたらう。そして、『運ぶに難き、重荷を擔はすものなり。』といふ偉大な言葉を獨りごちた。けれど、この言葉を言つた人は、罪を犯せる女を赦した時、『行きて再び罪を犯す勿れ(約翰傳第八章十一節)。』と言ひ足した。従つて、罪はどこまでも罪と名づけたのである。そしてそれを赦したけれども、無罪としたのではない。それを、ウチン氏は、『彼女は女ではなくて、石であるか心のない存在であつたらう。』だからどうしたらほかの途を取ることが出来たか解らないと言つてゐる。私はおづ／＼しながら言ふ——どんなヒウマニテイがあつても、惡はどこまでも惡として、殆ど義舉とまで讀へ上げてはいけないと。

既にヒウマニタイを宣揚した上は、ウエリカノワをも憐れと思つてよからう。併し、餘りに凌辱者を憐む者は、恐らく、凌辱された者を憐まないであらう。ウチン氏はウエリカノワ女史から「犯罪の犠牲」といふ性質をも取り上げてゐる。ウチン氏は、その辯論の中で、ウエリカノワに就て何か悪いことを言ひたかつたことは間違ひのないことだと思はれる。打ち開けて言へば、このやりかたは餘りに素朴で、餘りに不味いと思ふ。餘りに原始的で、餘りに性急なやりかたである。辯護人さん、貴方は自分の依頼者に丈け……即ち職務上でヒウマンであるが、それは正義であらうか？と人たちは貴方に言ふであらう。貴方は、ウエリカノワが『こんな夫から彼女を極つて呉れる者には、感謝して手や足を接吻する。』と、憤怒の中に、聞えるやうに言つた時、そこにゐたカイロワはこれに對して、『妾は彼を取るのです。』と、直ぐに言ひ返すと、ウエリカノワが『そんならお取んなさい。』……といふやうな「野蠻な、恐ろしい場面」を捉へて持つて來た。貴方はこの事實を傳へて、この瞬間からカイロワはこの紳士を自分のものと思ふやうになり、彼の中に『自分の創つたものを、自分の子供』を見るやうになつたと言つてゐる。それは餘りに素朴なことである。第一、そこに何の野蠻な、恐ろしいこと。』があるか？場面も科白も無論に醜い、けれど、若し貴方がカイロワの手にある剃刀を許し、カイロワが平靜を保つことが出来なかつた——それは私も信じ切つてゐる——といふことを認める可能を容れるならば、どうして不幸な妻の袂へ切れない、愚かな叫びを許せないか！貴方は自分から、ウエリカノワはカイロワの彼に對する愛の事實が彼女の正氣を脱してゐることを充分に證據立てることが出来る程に始末に終へない男であることを認めてゐるではありませんか。それならば貴方はどうしてウエリカノワの「手や足を」といふ言葉に驚いてゐるのですか？始末に終へない男との關係は

時として始末に終へない性質を帯びるもので、時々始末に終へない言辭が飛び出すものである。併し、これは時々過ぎない、そして言辭に過ぎない、眞個に、若しカイロワが、妻が實際に彼女に夫を渡し、その時から彼女は彼を自分のものとする權利を有つのだと眞面目に考へたとすれば、彼女は餘つ程のおどけ者である。多分、これには別に仔細があつたのであらう。哀れな、虐けられた人間のいふことを、こんな風に高いところから見下すものではない。かういふ家庭では（かういふ家庭に限らず、ほかの家庭でもさうであらうが。）こんな言葉遣ひをすることはない。生活の窮乏と重荷がある、そして家族の間柄はその壓迫の下に荒まざるを得なくなる、それ故に、例へば、バイロン卿がその夫人のバイロンに、最後の離別の際にすらも言はないやうな、或はレルモントフの「假面劇」に於てアルベニンがニイナに言はないやうな言葉が發せられると見て差支へない。勿論、假令それが不しだらに過ぎず、又淺ましい言ひ草に過ぎなくとも、その不しだらは許されぬ、併し、心は……恐らく、我々の心よりも良い心が残つてゐるであらう。それ故に、もつと單純に見れば、眞個に、もつとヒウマンであらう。貴方々はどう思ふか知らないが、私から見ればカイロワ女史の振舞は——「私は彼を取ります。——遙かに淺ましいと思ふ、そこには妻に對する恐ろしい侮辱がある。そこには折檻がある。妻から夫を奪ひ取つた、勝ち誇つてゐる情婦の面と向つた嘲笑がある。貴方には、辯護人さん、との妻の就て烈しい毒舌を吐いてゐる。例へば、貴方は彼女が法廷へ出頭せずに、病氣の診斷書を届けたのを遺憾に思つて、若しも彼女が出頭すれば、この診斷書は何の意義もなくなるであらう、何故ならば、陪審員は健かな、強い、美しい女を見るであらうからと言はれた。けれど、この場合、彼女の美や強さや、健康が貴方に何の用があるか？それから貴方は言つてゐる——「陪

審員諸君、他の女と住んでゐる夫のところへやつて来たり、カイロワがそこに住んでゐることを知つてゐながら、自分の夫の情婦のところへ来たりして、彼女の寢室に、寢床に泊り込まうとするなど、何て女であらう……私は諒解に苦しむ」と。辯護人さん、貴方の依頼人はウエリカノワ女史が法廷に出頭しなかつたので、恐らく、大いに利する所があつたことに気がつきませんか。ウエリカノワは法廷で散々に悪いことを並べられたではないか——殊にその性格に就て。私は彼女の性格を知らない、けれど、何故か彼女が法廷に出頭しないことは私に氣に入る。彼女が出頭しなかつたのは、多分、夫を憐むと同時に、侮辱された女の誇りからであらう。何故に彼女が出頭しなかつたか、これに答へ得るものは一人もない……けれど、彼女が衆人の前で自分の煩惱を語り、女性の感情を陳べたりすることを好む女でないことは、兎も角も解るではないか。假に彼が出頭したとしても、貴方があのやうに驚いて居り、彼女をあのやうな慚愧に陥れてゐるところの『何故に彼女は自分の夫の情婦の宿に泊つたか。』といふことは少しも説明するに及ばなかつたかも知れない。私には、彼女はカイロワのところへ泊つたのではなくて、彼女を呼び寄せて、前非を悔いてゐる夫のところへ泊つたのであるやうに思はれる。そしてウエリカノワ女史は、カイロワ女史がこの宿の宿料を拂つて行くだらうと期待してゐるとはどこからも推量することが出来ない。彼女には到着匂々誰がその拂ひをしてゐるのか、誰が主人であるかといふことを知ることは困難であつたらう。夫は彼女を呼寄せやうとしてゐた、即ち、夫は下宿を自分が借りたことにしたのである。彼は恐らく彼女にさう言つたのであらう。彼はその時分兩方を欺してゐたのではないか。貴方の寢室や寢床に關する繊細な觀察もその通りである。髪の毛があつたとかいふやうな微細を極めた詳述は、恐らく、一切を立ちどころに説明した

かも知れない。概して、この哀れな女に對してはみんなが正しくないと私には思はれる。そして、若しウエリカノワが自分の夫と寢室にゐるカイロワに出つ會し、これに剃刀を以て斬りつけたとしたならば、正妻であるといふ恐しい性質上、見苦しさや懲役との外には何にも得る所はなかつたらうと私には思はれる。例へば、辯護人さん、貴方が言つたやうに、この「事件」に於てウエリカノワは少しも痛痒を感じなかつたそれは、事件の發生から數日後には、もう舞臺に立つたり、カイロワは十ヶ月を監獄に暮してゐるといふのに、一と冬を演じ通したりしたのを見ても解ると言ふことが出来るでせうか。我々が貴方の哀れな依頼人を氣の毒に思ふことは貴方に劣らない、けれど、ウエリカノワ女史が少なからず苦しんだことにも同意して下さい。彼女が妻として、自己を尊ぶ女として（私は彼女からこの事を奪ふ権利は絶対にない。）どれ程苦しんだかに就ては言はずもがな——貴方は、辯護人さん、そんなに微妙な法律家であり、その辯論の中であんなに自分のヒウマンであることを宣言した貴方は、彼女がその恐しい一夜にどれだけの苦しい目に會つたか、想ひ出して御覽なさい。彼女は數分の間死の恐怖を體驗した。死の恐怖とはどんなものであるか知つてゐますか？死の近くにゐたことのないものは、これを理解する事は六ヶしい。彼女は夜なかに自分の咽喉を刺した自分の殺害者の剃刀に起されて、眼を覺した。自分の上に物凄い顔を見た。彼女は逃げた殺害者は續けて刺しに來た。彼女は、勿論、この殘虐な最初の瞬間に、もう斬られた。死は免れないと信じて仕舞つた——これは堪へられないことである、これは焦熱の悪夢である。而も現の悪夢であるから、従つて、百倍も恐ろしい。これは銃殺に處する爲に柱に縛りつけられ、既に袋を被せられた者に對する死刑の宣告と同じことである……失禮ですが、貴方はかやうな折檻をも下らないと思ひますか！果して一人の

陪審員も、之を聞きながら、微笑もしなかつたであらうか。然らば、ウエリカノワが二週間の後に舞臺に出演したといふ事が何であらう。之は二週間前に彼女が體驗した恐怖と貴方の依頼人の罪を軽減するでせうか？先頃の事である、或る繼母が四階から六ツになる繼娘を投げ出した、だがその子は何にも怪我をしないで立つてゐた。果して之は幾らかでも犯罪の残忍さを變ずるか、果して娘は何の苦痛も感じなかつたか？序でに、私はこの繼母を辯護人がどんな風に辯護するか知らず識らずに想像してゐる……事態の進退谷まされることと嫁の若い妻は暴力で彼に嫁がせられたか、誤つて嫁いだかといふことが出るに違ひない。そこには貧しい人たちの貧しい境遇の光景が……絶えざる仕事が出て来るであらう。眞卒な、無邪氣な彼女は嫁ぎながら、經驗のない娘らしく（現在の教育では殊に）嫁に行けば嬉しいこと許りだと思つた。ところが嬉しいことどころではなくて、汚れた肌着の洗濯や、食事拵へや、子供を洗つてやることやに追はれ通してである。——陪審員諸君、彼女がこの子供を憎まざるを得なかつたのは尤もである——（子供を悪者にして、六つの娘に淺ましい、憎むべき性質を探し出さうとするやうな「辯護人」があるかも知れない。）——自暴の極、狂亂の衝動に驅られて、殆んど我を辨へずに、彼女はこの娘を捉へて……陪審員諸君、貴方がたの中の誰がこれと同じことをしないであらう？貴方がたの中の誰が子供を窓から投げ出さないであらう？

私の言葉は、勿論、漫畫である。併し、若しこの話を作物にしやうとするならば、實際、この漫畫に類似したことが言へると思ふ。この漫畫に類似してゐるといふことが即ち惱ましいのである。然るに、この人非人な繼母の振舞は餘りに奇怪である。そして、恐らく、犯罪者の罪を軽くするやうになるやうな、織

細な、深刻な詮議も必要になるのである。それ故に、我傑れた辯護士たちが色々の理由で用うる方法が目出たいのときまり切つてゐるのに腹が立つであらう。他の側から、現在の新しい裁判所の議壇は我が民衆と社會とに取つて道徳上の學校であると思つてゐる者がある。民衆はこの學校で正義と道徳とを學んでゐるではないか。時々この議壇から響いて來ることを、どうして我々は冷淡に迎へることが出來やう？ところが、この議壇からは時として無邪氣極まる、愉快な申談が音いて來ることがある。辯護人さんは自分の辯論の終りに於て福音書（路加傳第七章四十七節）から『この女の愛は多かりき、されば、その多くの罪は赦さるべし。』と、いふ引證を自分の依頼人に適用してゐる。これは、勿論、極めて殊勝なことである。況して辯護人さんは、基督が罪障の女を赦したのがかやうな愛に對してでないことを明瞭に辨へてゐるのだから。私は福音書の、この偉大な、感銘を與へ易いところを茲に引用するのは冒瀆であると思ふ。私にはずつと舊い、非常に些細なことではあるが、可なりに特質のある觀察がある。その代りに、この觀察を引用しないではゐられなくなつた。それは、勿論、ウチン氏に關したことはない。私は子供の時、士官學校時代に、多くの少年や、中學生や、（或る）士官學校の生徒には（もとの幼年學校の生徒には最も多く）基督はこの愛に對して、即ち嬌態に對して、もつとよく言へば、嬌態の熾烈に對して罪障の女を赦したのである、言はゞ、この妖艶な弱き者を憐んだのであるといふ見解が、何故か存學當時から、眞個に根を張つてゐるといふことを觀察した。かういふ信念は今でも多くの人が抱いてゐる。私は何故に是等の少年が福音書のこの箇所をかういふ風に解釋する由があつたかといふ問題を、幾度となく自分にも眞面目に課したことを憶えてゐる。或はぞんざいに神の掟を教へるのかしら？けれど、福音書の中でもほかの箇所は彼等

も可なりに正しく解してゐるではないか。結局、私は、そこには、多分、もつと生理學的ともいふべき理由が働いてゐるのだと判断した、即ち露西亞の少年の善良な心に於て、多分、士官學校に特有な力の特別な過剰が働いて、それがあらゆる女を見る時に湧き出して來るのである。併し、これは愚論であることを感ずるから、引用すべきではなかつたかも知れない。繰返して言ふが、ウチン氏は、勿論、如何にこのテクストを解釋すべきかを熟知してゐる。そして、彼が單に辯論の終りに座座戯て見たのであるといふことは、私にとつて疑ひがない。併し、何の爲にか？——私は知らない。

二 章

一 建物に就て應しい思想

虚偽と欺瞞、それが八方から取捲いてゐる、それが堪へられなくなる時がある！

恰度カイロワの事件が裁判になつてゐた時、私は疾うから見に行かうと心掛けてゐたが、ついぞ行つたことのない「養育院」に行つた。知合の醫師のお蔭で、一切を參觀することが出來た。併し、私の詳しい印象に就ては後に陳べることにする。私は何にも書きとめなかつた、年齢も數字も控へて置かなかつた。一度許りで視察が出来るものでないこと、尙幾度も行つて見る値打のあるところであることが初手から明かになつた。私は私の指導者である、お醫者様と、さうすることに相談した。私は田舎の、少年たちが養

育の爲に配られてゐる芬蘭の女たちのところへ行つて見る積りである。従つて、私の書く事は將來のことである。今はほんの追憶がちら／＼する許りである——ベッキイ(富豪の慈善家)の記念碑、少年たちが分宿してゐる澤山の立派な廣間、驚くべき清潔(何の妨げにもならない)炊事場、種痘川の轅を「製造してゐる」苗床、食堂、食卓についてゐる小さな子供たちの群、馬の遊戯をやつてゐる五ツか六ツになる少女たちの群、多分、もとの院生で、自分の教育を應用する爲に、乳母になる稽古をしてゐる、十七八になる娘たちの群——彼女たちはもう何か知つてゐる、ツルゲニエフなどは讀んでゐる。明瞭な見解を有つてゐて、誰とでも大變に優しく話をする。けれど、私には監督の婦人たちが最も氣に入つた。彼女等はそれは親切な様子を有つてゐる(我々が訪問したので粧つてゐたのではない)誠な善良な、もの靜かな、聰明な顔をしてゐる。或るものは、いかにも教育があるらしい。私が非常に興味を感じたことは、この家屋に(否、この建物に)育つてゐる兒童の死亡率が家庭で、氣儘に育つてゐる兒童の死亡率よりも遙かに少い、併し、それは田舎に配置されてゐる兒童に就ては言へないといふ報告であつた。仕舞ひに、永久にこゝへ預ける爲に、母親が子供を連れて來るといふ、下の部屋も見た……併し、そんなことは残らず後にする。只私は、特殊な、恐らく、異様な眼つきをしてそれ等の乳呑兒を凝視したことを憶えてゐる。如何にそれが莫迦げなことであつても、私にはそれ等の乳呑兒が恐ろしく不躰けに見えた。だから、私は腹の中で、我ながら自分の考へに笑微んだことを憶えてゐる。眞個に、その嬰兒はどこかそこらで生れたのだ、すると茲へ連れて來られたのだ。彼がどんなに泣いてゐるか、御覽なさい、大聲を揚げて、自分の胸が丈夫なこと、自分が生きてゐたいことを宣言し、赤い手や足をばた／＼させて、泣き叫ぶ、恰もさういふ風に貴方がた

を煩す権利を持つてゐるかのやうに、泣き叫ぶ。恰ら女親の胸を所有し、介抱を受ける権利を持つてゐるかのやうに、胸を索める、全く家庭にある子供の通りの権利があるやうに、介抱を要求すると皆が飛び出して、彼のそこへ駆け出す、——何といふ不躰なことであらう！私は、眞個に更に諧謔を交へずと言つてゐるのである、眞個に、周りを見廻すと、『どうして、何でこの子は一體人を侮辱するのだらう？』と、いふ考へがどうしても湧いて来る。いきなり誰かが彼を捉へて、『酷い目に會はせるぞ、丸さん、お前は殿さんの子か、一體？』と、いためたらどうだらう。又たいためずにもられやうか？これは空想ではない。窓からでも投げるやうになる。十年ばかり前のこと、矢つ張り、繼母だつたと思ふ（もう忘れて仕舞つた、繼母であつたらしいが）先妻が残して行つた子が、どこか痛いところがあつていつも泣いて許りゐるのを抱へてゐるのが煩はしくなつて、シラ／＼と煮立つてゐる自沸罐のそこへ寄つて行つて、癢にさわつてゐる子供の手を捻り口の下へ押しやつて、捻り口を揜ぢり開けた。これは當時どの新聞にも出た。こんな風にいたした、慈愛のある繼母が！併し、どういふ風に裁判したつたか覚えてゐない……それに眞個に裁判したか？かういふ子供は、時として、恐ろしく泣き叫んで、ひとの神経を破壊する、而も貧乏と洗濯ばかりだから、『彼女は赦罪を受ける資格がある。』ではないか？併し、親身の母親は、たとひ泣蟲をいたしめるとしても、余つ程ヒウマンにやる。愛嬌のある、人好きのする娘が人のゐない部屋に飛び込んだ。そこで彼女は俄かに氣絶（産氣づいて氣づいて氣が遠くなる）と解せば全體の光景が明瞭になるべし）する、それからの事は何にも覚えてゐない。すると、不意に、どこから現れたか、不躰な泣蟲の赤兒が、矢庭に水氣の中に落ちて、噓をする。然し、噓をするのは捻り口よりも樂ではなからうか、かういふのは裁き

をすることが出来ない、哀れな、欺された綺麗な娘。彼女は菓子でも喰べて喜んでほしいのに。ところが急に氣絶する、更にファウスト（ゲエテのファウスト参照）のマルガリタを如何に思ひ出すか陪審員の中には、時として、非常に文學的な人がある。どういふ風に裁きをするか——裁きをすることは出来ない、却つて金でも集めてやらなければならぬ位である。それ故に、是等の子供たちの爲に、彼等がこの建物に這入るやうになつたことを喜ぶであらう。實を言へば、その時私の胸には莫迦に暢氣な考へと可笑しい問題が生れてゐた。例へば、私は、是等の子供がいつになつたら、自分たちが誰よりも見窄らしいこと、即ち彼等は「ほかの子供たち」のやうな子供ではなくて、遙かに見窄らしく、毫も權利に依つて生きてゐるのではなく、言はゞ、人の慈悲に依つて生きてゐるのであることを知り始めるであらうかと自分に訊ねた、そしてこれが根本を究めたくて堪らなかつた。併し、多くの経験がなく、子供に對する觀察がなくてはこれが根本を究めることは出来ない、併し、私は *Praxis*（拉典語、經驗に依らずに、智的判斷を基として）に考察して、彼等がこの「慈悲」に就て知るのは極めて早いことを——恐らく、信ずることも出来ない程早いことを信じた。眞個に、若しも、等が科學的教材と科學的遊戯との媒介を以てのみ發達し「鴨（理科學の説明）」を通じて宇宙の知識を知つたとすれば、その理解力が思ひも及ばない、恐ろしいやうな深さに達することはあるまい——その深さを以てすれば、全く彼には及ばないと思はれるやうな思想を、如何なる方法でも解らずに、會得することが出来るやうな……五六歳の子供が、時として、神や善惡などの驚くべき事柄に就て、この子には我々に解らないのみか、我々が教育學に基いて、殆ど否認するに相違ないやうな、何か異つた知識の取得機關が自然に依つて授けられてゐるのだと斷定しなくてはゐられなくなる程

の意外な深さを以て知得してゐることがある。お、疑ひもなく、彼は神に就ての事實は知らない、そして、若しデリケートな法律家が善悪に就て六歳の子供を試験したとしても、只吹き出して仕舞ふだらう。けれど、もう少し焦らすに、もう少し注意深く下つて下さい(何故ならば、これはその値打があるから)例へば、事實の點は大目に見てやつて下さい、そして、無稽と思はれることを棄てずに、理解力の實相丈けを擱へて下さい、——さうすれば、貴方は、彼が神に就て、恐らく、貴方と同じ程度に知つてゐることを知るでせう、善悪に就てや、何が愧つべきで、何が賞むべきであるかに就てはあなたよりも——最もデリケートではあるが、時として、言はば、性急な判断を下す辯護士よりも、恐らく、遙かに多く知つてゐるといふことに氣がつくでせう。如何にも意外な、どうしてとも解らずに子供が體得する、かやうな、恐ろしく六ヶしい思想の數に、私が先に言つたなうな、この子供たちが持つてゐる思想をも加へる。それは、彼等が「誰よりも見窄らしい。」といふ、最初の、併し生涯を通じて動かない、堅固な理解である。子供がこのことを知るのには乳母からでもなく、母からでもない、且、彼はかうして、「ほかの子供」を見ないで暮してゐるから、比較をすることは出来ない。それにも拘らず、貴方は、彼が既にいろ／＼のことを知つてゐることや、毫しも要らないませかたを以て餘りに多くのことを嘯み分けてゐることを知るであらう。私は、勿論、哲學じみたことを言ひ過ぎた、けれど、その時はどうしても思想の流れを停めることが出来なかつたのである。私の頭には、ふとかういふ警句が湧いて來た——若し運命が是等の子供から家庭や、両親のそばで成人する幸福を奪つたならば、(何故ならば、この両親も子供を窓から放り出したり、煮、湯を浴びせたりするとは限らない。)何かほかの方法で彼等に酬はることは出来なからうか、例へば、この立

派な建物で育て上げ、名を與へ、皆に教育を——最高の教育を與へ、大學を卒業させ、それから勤め口を探してやり、世に出してやるやうに、つまり、彼等を出來る丈け永く、彼等を放り出さないやうにすることである、これは、國家で、彼等を社會の子供と見做し、國家の子供と見做して、これに當るべきことである。眞個に、若し赦すならば、併し、全く赦して仕舞はなければ駄目である。併し、私はその時心中で考へた——或る者に、多分、これは墮落を獎勵することであると云つて、憤慨するであらうと。けれど、是等の親切な娘たちは、子供を大學にやつて呉れると聞いたならば、故らに努めて子供を産み出すだらうと想像するのは、どんなに美事な考へであらう!

「いや、彼等を赦すなら、全く赦して仕舞はなければならない、若し赦すなら、全く!」と、私は思つたのである。眞個に、多くの人たちは、最も正直な、勤勉な人たちは羨ましくなるであらう……『俺は生涯牛のやうに働いた……と、或る人は思ふだらう——一度も不正直なことはしなかつた、子供たちを可愛がつて、どうして彼等を教育しやうか、どうして一人前の人間にしてやらうかと、生涯心を砕いたが、どうしても出来なかつた、中學にやることも出来なかつた。もう今ではこの通りに咳が出る、喘息だ、週は死んで仕舞ふのだ、——許せよ、俺の子供たち、可愛い子供たち、みんなで八人か!みんなが直ぐに學問を止めて、街を彷徨つたり、煙草會社に勤めたりするのだ、それでもまだ有難い……棄て子にした女子どもは大學を卒業して、勤め口にあつくだらう、それでも俺はあいつらの學資には蔭になり、日向になつてなければなしの一哥を拂つてやつたのだ!』

かういふ獨白を言ふ者があるに違ひない……が、實際、何といふ矛盾であらう?眞個に、どうしてかう

いふことは何にも賛成の出来ないやうに出来あがつたのであらう？さらばといつて、何がこの獨白よりも合理的であり、正當であり得るだらうか考へて御覽なさい。とは言へ、この獨白は不合理であり、不當である。従つて、合理的である、従つて不合理である、何といふ滅茶苦茶であらう！

けれど、その時私の頭にちらついたことよりほかには何にも證明することが出来ない。例へば、『若し彼等を赦すなら、彼等はさういふ風に赦すだらうか？』これも亦問題である。或る者は崇高な型を具へてゐる——それらの人は赦すであらう、他の者は、恐らく、自分の爲に復讐するであらう——誰に、何に復讐するか——それはいつになつても解決しないだらう、諒解しないだらう。併し、復讐はするであらう。けれど、是等の「棄子にされた女子たち」の「社會に對する復讐」に就ては——若しもさういふ事が行はれるとすれば——この復讐は直接でなく、積極的でなくて、寧ろ消極的であらう。誰も直接に、且意識的に復讐することはしない、否、自ら復讐したいと思つてゐることに氣が付くまい、却つて、教育を與へさへすれば、この「建物」から出た者の多くは尊敬と族長の渴望と家庭の渴望とを以て出て行くのである、彼等の理想は自分の巢を營み、立身して、世間の信用を得、子供を愛し、その教育に當つては決して、決して「建物」や官費の助けを藉りやうとはしないであらう。概して、この建物に行く道を忘れ、この建物の名前を忘れることが第一の規則になるであらう。却つて、若し自分の子供を自分の費用で大學を卒業させることが出来れば、この新しい族長は幸福になるだらう。併し、彼の生涯を追求する、ブルジュア的な、與へられた状態の渴望はどんなものだらう——召使根性が最高の獨立か……どつちになるだらう？私の考へでは、寧ろ後者であらう。けれど、精神は生涯眞個に獨立したものはならないであらう、全く主人た

る氣持にはなり切れないであらう、されば、多くの事が、たとひ極度に正直でも、眞に麗はしくはなり切らないであらう。精神の完全な獨立を與へるものは全く別のものである……けれど、それに就ては後に陳べる、それも亦手間のかゝる話である。

二、一つのふさはしからぬ思想

私は、今、『獨立か？』と、言つた。けれど一體露西亞では獨立なるものを好むか？——それが問題である。これを同一の意味に解するやうな二人の人間があるだらうか、そればかりではない、誰でもいゝから眞面目に信じてゐる思想が一つでもあらうか？我が盲従者流は、富めるも貧しきも、何事も考へずに、氣力があつて、怠屈を感じないうちは、考へ事などはせずに、身を持ち崩すやうなこと許りしてゐる。盲従者流よりも少しはいゝ人間たちは唯我獨尊を極め込んで、何か信じてゐるやうな風をしてゐる。併し、それは我と自らを慰めやうとして、強ひてやつてゐるのである。『悪ければ悪いほど良い。』と、いふ定義を捉へて、この定義をいろ／＼に改作してゐる人がある。最後に、僻論家がある、その中には非常に正直なものがあつて、大抵は無能である、彼等は——特に正直なのは——それからそれへと自殺して世を果てる。眞個に、近頃は自殺が激しくなつて、もうそれを口に出すものもなくなつた位である。露西亞の地はその上に人間を支持する力を失つたやうである。我が地上にはどれだけの正直な人間が——殊に正直な女があるか知れない！露西亞の女は高尚になつて行く、恐らく、いろ／＼の事を救済するであらう、それに就ては改

めて語る積りである。我々の大きな期待である女は、恐らく、危急の際に露西亞の爲に盡すであらう。併し、不幸なことには、露西亞には正直な者が多い、非常に多い、正直といふよりも、寧ろ善良な者が多いが彼等の中で、どこに正直があるか知つてゐる者は一人もない。正直なるものゝ如何なる定義をも信じない、却つてその最も明かな、従來の定義をも否定してゐる。それは殆ど到る處である。萬人がさうである。何といふ奇蹟であらう？そして、所謂「生きた力」や、それがなくては一つの社會も生存が出来ず、又地球が立つて行かない所の生きた感情はどこへ行つてしまふのか一向に解らない。何故私は、この苗床を、是等の兒童を見て、この建物の中に於ける自殺に就て思ひ煩つたか？これが既にふさはしからぬ思想である。我々にはふさはしからぬ思想が多い、それが我々を壓へつける。思想は、大きな巖石のやうに、人間の上に墮ちて来て、その半身を壓へつける。人間はその下に藻掻いても、身を脱することは出来ない。或る者は壓へつけられながらも生きる事を肯ずるが、他の者は肯じないで、自分を殺す……「ノオウオエ。ウレミヤ」に載つてゐた或る自殺者の手紙は、非常に興味がある……ある娘の長い手紙である。彼女は二十五歳であつた。苗字はピサレワと言つてかなりな地主の娘だつたが、彼得堡へ出て、世の進歩に身を捧げる積りで、産婆にならうとした。彼女は甘く行つて試験に合格し、自治廳の産婆になつた。それで、少しも窮らなかつたことや随分に稼ぐことが出来たことは自ら證言してゐるが、併し彼女は疲れた。非常に「疲れた。あんまり疲れたので、休みたくなつた。『墓の中でなくて、もつと、よく休めるところがどこにあるか？』けれど、彼女は眞個に恐しく疲れた。この哀れな女の手紙は疲労に始まつて疲労に終つてゐる。むか／＼と腹を立てゝゐるやうな手紙である——ほうつといつて下さい、私は疲れた、疲れた。『忘れないで私

から新しいシャツと靴下を引き離すやうに吩咐して下さい、私は机の上に古いシャツと靴下があります。それを私に着せるやうに吩咐して下さい。『彼女は脱ぐとは書かないで、引き離すと書いてゐる。凡てがかういふ風に、恐しく氣短かになつてゐる。かういふ烈しい言葉はいつれも氣短かから來るので、氣短かは疲労から來るのである。彼女は悪口をいつてさへゐる……「貴方は、私がうちへ行くと思ひますか？邪が非でもそんなところへ行くものですか？」或は『もう、リバレワ、私を赦して下さい、それからベトロワにも（その宅で彼女が毒を仰いだ。）特にベトロワには私を赦して呉れるやうに言つて下さい。私は見苦しいことをしてゐるのです、淺ましいことを……』彼女は自分のみうちの者は愛してゐるに相違ないが、次のやうなことを書いてゐる……『ライザニカ（リザウエタ若しくはエリザウエタの愛稱名詞）には知らせないで下さい、それでないと、姉妹に言つて、こゝへ哮えにやつて來るから』私は自分の身の上を哮えて貰ひたくない、でもみうちといふものは自分のみうちの身の上を哮えるものですから、哮えと言つて泣くとは言つてゐない——これは癩癩と氣短かが高まつた疲労から來てゐるのである……早く、何でもいゝから早く——安静を下さい……彼女には癩癩持な、破廉恥な不信が恐ろしく多い。彼女はあんなに愛してゐるリバレワも、ベトロワも信じてゐない。手紙は次のやうな文句から始まつてゐる……『狼狽せずに、嘆息をつかずに、氣を締め終りまで讀んで下さい、その後で、どうしたがいゝか、思案をつけて下さい。ベトロワを駭かさないで下さい。恐らく、笑ふくらるが關の山でせう。私の居住證は靴の袋に這入つてゐます。』

笑ふ位が！彼女を、彼女の骸を笑ふだらうといふ——而も誰が——リバレワとベトロワが笑ふだらうと

いふこの考へがかやうな瞬間に彼女の心に閃いたのである！恐ろしい事である！

後に残る些細な金の始末が不思議な程彼女の心を占めてゐる……『チエトキンのところで路用として私に呉れた二十五留のお金は、みうちの者が手をつけないやうに、ペトロワのとこへ持つて行つて下さい。』この金の事を重要に思つた事は、恐らく、一生涯の「麵麴(馬太傳第四章三節)に變つた石」に就ての主要な偏見の最後の反響であらう。要するに、一生涯を指導した信念が顔を出してゐるのである……即ち(この世に金といふものがなければといふ條件句を抜いてある)『萬人が安心してゐられるであらう、萬人が幸福であらう、貧乏人がないであらう、罪悪がないであらう。罪悪は貧乏と不幸な部落から生ずる病的状態である。』云々。この中に彼女等が一切を、生きた生命を、地との連鎖を正義に對する信仰を——一切を換へるやうな信仰を以て(それにも拘らず、このやうに早く自分の信仰と生活とに意屈して仕舞ふ。)没頭する信念の小さな、日常の、而し恐ろしく性格的な、行き詰まつた教義問答がある。彼女は正義に對する一切の信仰を失ひ、義務に對する一切の信仰を失つて、生の意屈から疲れたのである。つまり、生存の最も高い理想の消滅である。

哀れな娘は死んだ。私はお前の身の上を咥えはしない。哀れな娘よ、けれど、お前を氣の毒に思はせてお呉れ、それを許してお呉れ、もうお前が意屈しないかも知れない、その生活に於てお前の魂が復活するやうに望ませてお呉れ。優しい、善良な、正直な娘たちよ。(それが悉くお前たちの心にあるのだ。)かうしてお前たちは、どこへ行つて仕舞ふのであるか？どうしてお前たちには暗い、淋しい墓が懐しくなつたのか？見て御覽、空には明るい春の太陽が輝いてゐる。樹々は花を開いた、それをお前たちは生きもした

いで疲れて仕舞つた。お前たちを育て、まだお前たちが赤ん坊であつた時、あんなに見惚れてゐたお前たちの母親が、どうしてお前の身の上を咥えずにゐられやう？赤ん坊の中にはどれだけの期待があると思ふ！かうして見てゐると、こゝにゐる「捨兒たち」は——どんなに生きたいと思つてゐることであらう！どんなに自分の生きる権利を主張してゐることであらう！お前もこんなに赤ん坊であつたのだ、そして生きたがつてゐたのだ！お前の母親もそれを憶えてゐるのだ、そして、今お前の死顔をお前の赤ん坊であつた時の愛くるしい顔を、見たことのある未だに憶えてゐる笑ひや喜びとどんな氣持で較べてゐるかを考へたら、どうして咥えずにゐられやう、どうして彼女等の咥えるのを責められやう？今私にツウニヤ(アウドチャ若しくはエウダキヤの縮小名詞)を見せて呉れた、彼女は曲りついた足をもつて生れて来た、いや、まるで足がない、片足は小さな紐のやうなものになつてゐる。彼女は生後一ヶ月半にしかならない赤ん坊である、而し丈夫で、大變に美しい子である。みんなが可愛がる、彼女は誰にでも頭をうなづいて見せる、誰にでもこゝろする、誰にでも舌を鳴らす。彼女はまだ自分の足のことは何にも知らない、自分が畸形兒であり、不具者であることは知らない、けれど、この子も果して人生を嫌悪するやうな運命を擔つてゐるのだらうか？

『この子に足をつけてやらう、松葉杖をあてがつて、歩くやうに教へてやらう、さうすればこの子も氣がつくまいからと醫者が彼女をあやしなから言つた。眞個に氣がつかないやうにしたものである。否、疲れて、人生を嫌悪し、即ち萬人を嫌悪するか、お、否、否、この憐むべき、畸形な、無疵な種族は、——自分の上に落ちて来た石の下に藻掻いてゐる人たちの種族は満足に通つて行くだらう、そして、新し

い、偉大な思想が太陽のやうに輝いて、定まりのない分別も鞏固になるだらう、そして皆が言ふであらう『人生は好い、我々が穢れてゐたのだ。』と、私は穢れてゐるのを責めはしない。向ふを見ると、粗野な田舎女の乳母が、「雇はれた乳」が急に赤ん坊を接吻した、——あの赤ん坊を、「あの捨兒」を！私はこゝの乳母が赤ん坊を接吻しやうとは思はなかつた。これ丈けでも、これを見る丈けにでも、こゝへ来る値打がある。彼女は接吻したが、私が見てゐたことは見もしなければ、氣が付きもしなかつた。彼女たちは金の爲に赤ん坊を可愛がつてゐるのだらうか？子供を育てる爲には、彼女たちを雇ふが、接吻するやうに要求しはしない。田舎の、芬蘭女のところにゐる赤ん坊はもつと惨めださうであるが、それでも或る者は心から自分の育て子に馴染んで仕舞つて、泣きながら養育院に戻しに来る、それから態々遠くから逢ひに来たり、土産を持つて来たりしては『子供たちの身を案じては咥える。』さうである。否、そこには金の故はない。『みうちのものは誰でも咥える。』と、ピサレワは遺書の中に断言してゐるが、是等の女も咥えに来ては接吻する、そして田舎の貧しい土産を持つて来る。これは單に母親の胸に代つた、雇ひの胸と許りは言へない、否、これは母性である、これは、その爲にピサレワがあんなに疲れた所の「生きた生活」である。露西亞の地が露西亞の人々をその上に保持して行かなくなつたといふのは眞個であらうか？何故に人生は、そこにもこゝにも、かやうに熱い泉をなして迸つてゐるのだらう？

勿論、そこには、おのが別宅の階段に腰を卸して、忽ちに剃刀を自分の戀仇に下さうとするやうな、面白い母親から寄越されてゐる赤ん坊も澤山にある。終りに言ふが、是等の剃刀もそれ／＼に取つては非常に深切けがあるものであるが、カイロワ女史の事件を調べてゐる時にこの建物にやつて来たことを残念に

思ふ。私は毫しもカイロワ女史の經歷を知らない。だからこの建物に關する事柄を彼女に適用することは絶対に出来ないし、又權利もない。けれど、彼女の全體の戀物語と彼女が法廷に於て自分の情熱を優辯に陳述したこととは、私がこの建物から出るが否や、私に取つては何等の力もなくなり、私の心中にある一切の同情を殺して仕舞つた。私は眞つ直にそれを自白する。何故ならば、私がカイロワの「事件」に就てこんなによくない書きかたをしたのも、恐らくそれが爲であるから。

三、疑ひのないデモクラチズム。女

もう一人の通信者の手紙にも答へなければならぬやうな氣がする。四月號の「日記」で、政治問題に就て語つた時、私は、就中、一つの、言はゞ、空想を書き込んだ……

……露西亞は歐羅巴で最も強くなるだらう、それは、歐羅巴では凡ての強國がその大部分の下層民やプロレタリアや貧民などの満足されない民主主義に因て羸弱し、疲弊するといふ極めて簡單な理由で是等の強國が亡びて仕舞ふといふ事から起るのである。露西亞にはそんなことは起りつゝがない。我がデモスは満足してゐる、そして先に行けば行く程、餘計に満足する。何故ならば、凡ての事が一般の氣分を以て、或はもつとよく言へば、一致を以てこの方向に進んでゐる。それ故に歐羅巴の大陸には露西亞といふたつた一つの巨人が残る許りであらう。

私の通信者はこの意見に對する答へとして非常に待色のある、教訓的な事實を引用し、『我がデモスは満足してゐる。』と、いふ事が疑はしい理由として、その事實を提示してゐる。名譽ある通信者は（この）數行を読んだならば、何故に私が彼の知らせて來た事實を今持出して、それに答へることが出来ないかを餘りによく諒解するであらう——假令近々の内にこの事實に就て語ることが出来るといふ期待は充分にあるが……

けれど、我が「デモス」が満足してゐるといふ私の所信と一致しない他の意見も二三受取つてゐることもあるし、今一寸デモスに關する説明として一言して置きたいと思ふ。私は私の反對論者が四月號から上に、拔萃した箇所の一行に注意を向けられんことを欲する……即ち『何故ならば、凡ての事が一般の氣分を以て、或はもつとよく言へば、一致を以てこの方向に進んでゐる。』といふ事に。

實を言へば、若しもこの『一般の氣分が、或はもつとよく言へば、一致が』私の反對論者自身にないならば、彼等は私の言葉を反駁せずに見逃したであらう。それ故にこの氣分は疑ひもなく存在してゐるのである。疑ひもなくデモクラチックな、無慾な、而も普遍的な氣分が存在してゐるのである。成程、今のデモクラチックな思潮には多くの似而非物がある、ジャアナリスチックな欺瞞がある、デモクラチズムの反對者（序でながら、さういふ者は今の露西亞には非常に少い。）に對する攻撃の誇張に勝手な嗜好が多い。それにも拘らず、露西亞の社會の大部分に於けるデモクラチズムが正直で、無慾で、卒直で赤裸々であることは毫しの疑ひも容れられない。この點に於て、我々は、デモクラチズムが今日まで常に下層からのみ

主張されて、未だに争闘を續け、敗北した（やうに見える）上層が未だに反撃を與へてゐる歐羅巴にはまだ現れない現象を造つたか、或は造り始めてゐるのである。

我が上層は敗北しなかつた、我が上層は自らデモクラチックになつた、もつと正確に言へば、平民的になつた、誰がこれを否定することが出来るやう？ さうとすれば、幸福な將來が我がデモスを待つてゐることを肯定せすにはゐられないであらう。若し現在の事象に懐かないことが多いとすれば、デモスの一時的失敗は、上層を初めとし、露西亞人全體の普遍的なデモクラチックの氣分と普遍的な一致といふ偉大な主義（ほかに名づけやうはないから）の疲れず、絶えざる影響の下に必ず改善されるに違ひないといふ大きな期待を抱持することが許されると思ふ。即ちこの意味に於て、私は我がデモスは満足してをり、『先へ行けば行く程、餘計に満足するであらう。』と言つた譯である。どうだらう、これは信じまいとしても難いことではないか。

筆を擱くに及んで、私は尙一言露西亞の女に就て書き加へたい。既に私は露西亞の女の中には我々の大きな期待が、我々の更新の保障の一つで裏まれてゐることを述べて置いた。最近の二十年間に於ける露西亞の女の再生は疑ひもない事實となつた。その要求に於ける向上は高く、公明で、逡巡する所がなかつた。それは最初から尊敬の念を湧かせた、この運動に於て暴露した、多少の寄生的不正確は免れないにしても、少くとも、深く世人を考慮させた。併し、今はもう、決算をして、顧慮する處のない結論を下すことが出来る。露西亞の女は不快と嘲笑とを無事に無視することが出来た。彼女は公事に參與したいといふ希望を確乎として公言した、そして私慾を棄て、獻身的にこれに着手した。露西亞の男はこの二十年間

強奪と破廉耻と物質主義の惡徳に没頭してゐた、然るに女の方は男よりも遙かに忠實に思想を崇拜し、遙かに純潔に思想に奉仕して來た。彼女は眞摯と忍耐とを以て高等教育を受けたといふ希望を表明した、そして偉大な豪氣の範例を示した。「作家の日記」は露西亞の女を近づいて見る機會を私に與へて呉れた、私は三四の素晴らしい手紙を受取つた。彼女たちは『何をすべきか？』と、不肖な私に訊ねてゐる。私はこの質問を尊重する、そしてこれに答へる力の不足なことを誠實を以て贖はうと努めてゐる。私は茲で多くを傳へることが出来ない許りでなく、權利のないことを遺憾に思ふ。とは言へ、私は現代の女に多少の缺點を見出してゐる、その中の重なるものは男の或る思想に従屬し過ぎてゐることやそれを言葉通りに受容れ、詮索もせずそれを信ずる才能があることである。これは決して凡ての女に就て言ふのではない、又この缺點は心の美しい姿を證據立てゝゐるのである。即ち彼女たちは何よりも清新な感情と生き／＼した言葉を尊ぶが、それよりも尊ぶのは誠實である、そして時には似而非の誠實さへも信じて、男の意見に感激することがある、而も「時には」が餘りに多過ぎる。高等教育が進んで來ればこの點に竭す所が多いであらう。

高等教育を、それが與へるところの權利を附して、誠實に且完全に施すことが許されるならば、露西亞は人類の更新といふ偉大な事業に於て歐羅巴の前に更に大きな、獨特な歩分を踏み出すであらう。露西亞の女には、例へば、ピサレワのやうに、あんなに「疲れ」させないやうに失望しないやうに、させたいものである。寧ろシチャボフの妻のやうに、犠牲と愛の精神を以て自分の哀愁を諦めるやうにさせたいものである。併し、それもこれも同じやうに、——一つは酬はれることの少ない、高尚な、女性の精力に依

つて、他は疲れた、孤獨になつた、屈服した、敗れた、哀れな女として——苦しい、忘れ難い現象である

.....

六月

一章

一、ジョルジ・ザンドの死

私が新聞でジョルジ・ザンドの死に就て讀んだ時は、(死んだのは五月二十七日である——即太陽曆の六月八日である。)五月號の「日記」は既に組が済んで、印刷に懸つてゐた。だから彼女の死に就ては一言も語る間がなかつた。ところが、かうして訃報に接して見ると、この名前で私の生涯に何を意味してゐたか

明かに解つて来た。この詩人は生前にどれだけの隨喜と崇拜とを蒐めたらう！嘗てどれだけの喜悅と幸福とを私に與へて呉れたらう！私は臆せずには等の文字を列べる事が出来る、何故ならば、文字通りにさうであつたから。これは吾が、いや吾が（吾が即ち露西亞のといふ意味である。）現代婦人の一人である。三十年代から四十年代へ掛けての理想家である。これは吾が雄大な、自信の強い、それと同時に最も不可解な理想と最も解決の難い希望とに充滿した病的な世紀を代表する人物の一人である——「神聖なる奇蹟の國」たる自國に起つて、我々から——永久に創られて行く露西亞から非常に多くの智識と、愛と、神聖で立派な衝動の力と、生き／＼した生命と貴い信念とを取容れた人物の一人である。けれど、それを我々に訴へないやうにしなければならぬ、露西亞人はこれ等の人物を擔ぎ上げ、その前に拜跪しながら、おのが眞率なる使命に奉仕したのであり又奉仕してゐるのである。かういふ私の言葉を怪しまないで貰ひたい、殊にジョルジ・ザンドのやうに、今だに是非の論が起り、又露西亞では十中の九でなければ、半分は忘れて仕舞ひながら、その生前に露西亞に於て自分の仕事を成し遂げた者に就て語る場合には。——彼女と同時代の人間である我々を措いて、誰が彼女の墓の上に彼女を語らうとする者があらう？我々露西亞人には——我々が自らスラヴ主義者と名づける時にさへも——二つの故郷がある、それは吾が露西亞と歐羅巴とである。——露西亞人はかういふ私の言葉を怒らないで貰ひたい。これに對して議論する要はない。既に露西亞人がその未來の事に於て自覺した、偉大な使命の中の偉大な使命は全人類の使命である、人類に對する公仕である——單に露西亞とスラヴ民族に對するのではなくて、全人類に對する公仕である。よく考へて見れば、スラヴ主義者もこれと同じことを認めてゐることが肯かれる——それだからこそ彼等は我々も

つと嚴肅に、もつと鞏固に、もつと責任を以て露西亞人たるやうに警告してゐたのである——即ち彼等は全人性が主要な個性であり露西亞人の使命である事を理解してゐたのである。但し、これは多くの説明を要することである。全人類的思想に奉仕とすること、自分の勝手に祖國を毛嫌ひして、輕卒に歐羅巴の文物に妄執すること、は全く反對の事であるのに、未だにこれを混同してゐる。却つて、我々が歐羅巴から取つて、自國に植付けた事柄の多^多を我々は主の傍にある奴隸のやうに、又崇歐者流が強要するやうに、模倣したのみでなく、我々のオルガニズムに取容れて我々の肉や血としたのである、或る事物は經驗し盡して、それが自分たちには親身の事であつた歐羅巴人の通りに、獨立に苦しみ上げた。歐羅巴人はいつかな事でもこれを信じ様と欲しない。彼等は我々を知らない、それに今のうちはその方が好いのである。後になつて世界中が眼を圓くして眺めるうな事件の過程が、それだけ目立たずに、それだけひそかに行はれてゐるのである。この過程が最も明かに、最も露には見られる者は他の民族の文學に對する我々の態度である。他國の詩人は我々に取つて、少くとも吾國の發達した人たちの大多數に取つては歐羅巴に於ける如く、自國に於ける彼等にとつてと同様に親身である。歐羅巴の詩人や、思想家や、慈善家は、その國土は別として、世界中で露西亞に程多く理解され、親身に取容れられてゐる所はどこにもないであらう。沙翁、バイロン、スコット、ヂッケンズは獨逸人などよりも露西亞人に親身であり、理解されてゐる——縱令露西亞には書物の豊富な獨逸よりも、是等の作家の翻譯は十分の一も擴がつてゐないけれども。九十三年の佛蘭西國民議會は *au poëte a l'emand Schiller. Pami de l'humanité*（人類の友たる獨逸詩人シルレルに）公民權の特典を贈つたが、それで立派な、壯重な、預言的行爲はしたに違ひないが、歐羅巴の一方、野蠻な露西

亞にはこのシルレルが當時の佛蘭西許りでなく、その後佛蘭西で佛蘭西の公民にして、又 Yami de Rhuma と云ふたるシルレルを單に文章學の教授として——それも少數の人たちがやう／＼のことで——知るやうなつた我々の世紀に於て、野蠻人たる露西亞人にとつての方が遙かに同化して親しくなつてゐるといふ事は疑つても見なかつたのである。直個に露西亞では彼は、ジュコフスキイと共に露西亞の精神に浸透して、これに刻印を残し、吾が發達史の中に一時代を劃したのである。この、世界の文學に對する露西亞の態度は他の民族には萬國史を通じて、かやうな程度には繰返されなかつた現象である。そして若しこの性質が眞に露西亞の民族的特徴であるならば、如何に侮辱を事とする愛國者でも、如何に偏狹な國粹論者でも、この現象に反對の意見を洩らしたり、これに我々の未來に就ての推測に最も適確な、最も預言的な事實のあることを認めない譯にはいかならう。おゝ、勿論、多くの人たちは、上に私がジョルジ・ザンドに加へた意義を讀んで、笑ふであらう、けれど、笑ふ者は間違つてゐる。今はかういふ過去の事にはかなり多くの時代が過ぎて仕舞つた、それにジョルジ・ザンドは疾うの昔に名聲を失つて、七十といふ老婆になつて死んだのであるが、この詩人が存在中に「新しい言葉」を残して行つた事や、「全人性的であつた」事は強い、深い印象を以て露西亞に反應して、我々を逃しはしなかつた、そして歐羅巴の詩人といふ詩人は——新しい思想と新しい力とを以て出現した革新者といふ革新者は直ちに露西亞の詩人となり、露西亞の力とならざるを得なかつた——露西亞の思想を捉へずには置かなかつた。さればと言つて、私はジョルジ・ザンドに就て批評がましい論文を書きたいのではない、只々彼女の新しい墓に、此の世を去つた故人に訣別の辭を捧げたい許りである。

二、ジョルジ・ザンドに就て

ジョルジ・ザンドが文壇に現れたのは私の青年時代と時を同じうした。私はそれがこんなに昔の事であつたのを喜ばずにはゐられない、何故ならば、今は三十年も過ぎ去つてゐるので、全く公然と語ることが出来るから。その當時はそれが許された許りであつた——即ち小説でも、ほかの事でも、殆ど思想といふ思想は、特に佛蘭西からは持つて來る事を嚴禁されてゐたことに注意しなければならぬ。我々は見ることとも出来ないことが屢々であつた、それにどこから學ぶことが出來たらう、我々はメッテルニヒの眞似をしたのである。それ故に我々は「恐ろしい物」を飛び超えて來た。(ペリンスキイの如きも飛び超えた。)その代り、この埋合せとして、殊に仕舞には殆ど一切の事物を禁じ始めたものだから、飛んだ透畫となり終つた。併し小説は初めも中頃も、最後まで許されてゐた。それが爲に當時の警戒者はジョルジ・ザンドに對して大きな見損ひをしたのである。貴方方は次の詩を憶えてゐるでせう……

『ピエルとラボの巻を

彼は語んじて知つてゐる——

そして、狂暴なミラボのやうに、

放肆を讚美してゐる。』

この詩は異常に傑れてゐる、そして歴史的のものであるから、永久に残るであらう。けれど、詩人であり、文學者である最も正直な露西亞人のデニス・ダウイドフが書いたものであることに依つて一層の値打がある。けれど、若しデニス・ダウイドフがビエルを（無論、「革命史」に因つて）危険な人物と看做して、ラボとかいふ者と（従つて、私は知らないが、さういふ人物があつたと見える。）一緒に詩の中へ入れたとすれば、當時公けに許されてゐたことは餘りに妙なかつたからである。そこでどうなつたか、當時小説の形式を以て我々のところへ侵入して來たものは、その通りに事物に貢獻したのみでなく、恐らく、却つて、當時の時代から言へば最も「危険な」形式となつたであらう、何故ならば、ミラボを追ふ獵人は、當時、ジョルジ・ザンドを追ふ獵人が數千を以て數へられた程にはなかつたであらう。茲に注意して置くべきことは、露西亞にはマゲニツキイ（當時カザン教育區の長官として極端な保守主義を發揮した男）の徒やリブランヂ（同じく有名な保守主義者にして圖書の檢閲を嚴にした男）の徒があるに拘らず、既に舊世紀から、歐羅巴に於ける一切の智的運動に就て直ぐに我が智識の高層から少しでも思索する人士の群に傳へられる事柄である。それと同様の事柄が三十年代の歐羅巴運動にも起つた。この大きな、歐羅巴文學の運動に就ては、三十年代の劈頭から、露西亞には極めて敏速に理解が出來上つた。新たに現れて來る雄辯家や、歴史家や、演説家や教授の名前は既に知られてゐた。

ほんの一部ではあるが、この運動がどこに傾くかも解つて來た。この運動は殊に強烈に藝術に、就中ジョルジ・ザンドの小説に現れた。實に、ジョルジ・ザンドに就ては彼女の小説が露西亞語に現れる前にセ

ンコフスキイやブルガリンが世間に警告した。彼等は彼女がゾボン下を穿いて歩いてゐると言つて殊に露西亞の婦人を駭かした。その醜惡に眉を顰めさせ、彼女を滑稽なものにしやうと欲した。自らジョルジ・ザンドの作を自分の雜誌「讀書の圖書室」に翻譯しやうとしてゐたセンコフスキイは彼女をエゴル・ザンド女史と呼んで、眞面目に自分の奇智を恐悅がつてゐたやうである。その後、四十八年にブルガリンは「北の聖典」に、彼は毎日のやうにビエル・レルと關門の傍らで酒を呑んで、アテナ（猛烈な社會の夜會）に出たり、内務省に出入して、盜賊と選ぶ所のない内務大臣のレドリユ・ロオルレンの許に入りびだつてゐるといふ事を書いた。私もこれを讀んだから、よく憶えてゐる。けれど、當時、四十八年にはジョルジ・ザンドの名はもう我が讀書界に知れ渡つてゐたので、誰もブルカリンの言を信するものはなかつた。彼女の名が初めて露西亞語に現れたのは三十年代の半ば頃であつた。残念ながら、いついかなる作品が初めて翻譯されたか憶えてゐない、けれどそれ丈け驚くべき印象があつたに違ひない。まだ青年であつた私と同じやうに、多くの人たちはこの型と理想との無疵な、崇高な清淨と嚴肅な、敬虔な物語の調子の謙遜な美に打たれたであらうと思ふ——かういふ婦人がゾボン下を穿いて歩いたり、醜態を演じたりすると言ふのである！私が最も美しい彼女の初期の作品の一つである「躍進」といふ小説を初めて讀んだのは、十六歳の時であつたと思ふ。私はそれを讀んだ後は一晩中身顫ひがしてゐたことを憶えてゐる。ジョルジ・ザンドは、せめて私の追憶に依つて察すれば、その頃突如として歐羅巴中にその名を轟かした新作家の中にあつて露西亞では殆ど第一位を占めたと言つても過言ではないと思ふ。殆ど彼女と同時に我が國に出現したデツケンスでさへも、恐らく、世間の注目する程度では彼女に劣つてゐた。彼女よりも前に出現して、ともあれ、

三十年代に「エジエニ・グランデ」や「ゴリオの父」(これに對してはベリンスキイも、佛蘭西文學に於けるこの作の意義を見損つて、過つた意見を吐いてゐた。)のやうな作品を出したバリザツクに就ては言はずもがなである。とは言へ、私は批評的見地からこれを語つてゐるのではない、只々その當時に於ける露西亞の讀書界の趣味とこれに及ぼした直接の印象とに就て追憶を述べてゐるまでに過ぎないのである。要は讀者がその頃世間が警戒に努めてゐたものを小説からでも抽き出す事が出来たといふことである。少くも四十年代の半ば頃、露西亞には、講者の大部分がジョルジ・ザンドは血塗れの佛蘭西革命が(歐羅巴革命と言ふ方が正しいであらう。)最後に到着した「積極的の」獲得を驕地に否定し始めた當時の西歐に於ける新人の列で最も鮮明な、嚴肅な、正しい代表者の一人であることを知るやうになつた。革命が終ると(ナポレオン一世の後)新しい希望と新しい理想を表現しやうとする新しい企てが現れて來た。先覺者は專權が復興したのみであり「*Où toi de li que je m'y mette*」(形式の變化)が行はれたのみであり、世界の新しい勝利者(ブルジョイ)は恐らく以前の專權者(貴族)よりも悪く、「自由、平等及博愛」は單に麗辭に過ぎなかつたことゝ明瞭に諒解した。そののみか、麗辭は途徹もない文句であつたといふやうな教へが現れて來た。勝利者はこの三つの神聖な言葉を發するに、いや想ひ出すのに冷笑を浮べるやうになつた。科學すら(經濟學者)當時は一緒に三つの言葉を發するに、いや想ひ出すのに冷笑を浮べるやうになつた。科學すらし、その爲にあれ程の血が流された、この三つの言葉の架空的な意義を批難するやうになつた。かくて、勝ち誇つた勝利者と並んで、この勝利者を駭かした悲痛な、遣る瀬ない顔をした人物が現れた。かうした時代に、眞個に新しい言葉が突如として起つた、新しい期待が現れた、事件が空しく、且正しくなく停ま

つたこと、勝利者の政治的進退にては何事も達せられなかつたこと、事件を繼續しなくてはならないこと、人類の更新は根本的で、社會的でなくてはならないことを驕地に宣揚する人物が現れた。勿論、かういふ宣揚と並んで最も奇怪な斷定も澤山に現れたが、兎も角も、再び希望が輝き初め、再び信仰が生れ始めた事は注意すべき事である。この運動の歴史は人の知る如く、今日まで續いて、決して停る氣色は見えない。私は茲でこれが贊否を述べる積りではない、けれど、只この運動に於けるジョルジ・ザンドの位置を指示したつたのである。彼女の位置はその最初に索めなければならぬ。その頃、歐羅巴では彼女に向つて、彼女は女の新しい位置を宣傳し、「自由な妻の權利」(センコフスキイの表現)を豫言してゐると言つてゐた。併し、この言葉は全く正しいとは言へない。何故ならば、彼女は決して女のこと許りを宣傳してゐたのではない。又「自由な妻」などを發明しはしなかつた。ジョルジ・ザンドは全體の運動に従つてゐたので、單に女の權利に終始してゐたのではない。成る程、自分が女性であるところから、男の主人公よりも女の主人公を持出すことを好んだのは無理もないことである。勿論、今世界中の女は彼女の後を弔つて喪服を着なければならぬ、何故ならば、彼女等の最も崇高な、最も立派な代表者の一人である許りでなく、その知識と才能に於て類似のない女が死んだのであるから、——その名は青史に残り、永久に忘れられないで、歐羅巴の人類の間に消滅する事がないであらう。

彼女の書いた女の主人公に就て、再び繰返すが、私は最初から——十六七の頃から、彼女に就て書かれたり、語られたりしたことが私の自分で見てゐたこと、莫迦に矛盾してゐるのに驚いてゐた。眞個に、彼女の書いた女の主人公の多くは、少くとも、或る者は詩人の心中にある絶大な道德的要求がなく、最も充

實した義務の觀念がなく、慈悲や忍耐や正義の中にある最高美の理解力と認識力がなければ想像も出来ないやうに高い道德的純潔を具現してゐる。誠に、慈悲や、忍耐や義務の認識には要求と反抗との異常な傲慢が現れてゐるが、この傲慢は、人類が最高の道德圏に立ち盡すにはなくてはならない最高の正義から發したものであるが故に尊かつたのである。この傲慢は、俺はお前よりか好い、お前は俺よりか悪いといふやうな事に基いてゐる怨恨では *grand mime* (佛蘭西語、決して、どんな事があつても) ない、どうしても曲と邪に黨することの出来ない感情である、而もこの感情は全赦をも、慈悲をも除いてはゐない、且、この傲慢に相應して絶大な義務を自らに負はしたのである。是等の女の主人公は犠牲と義舉を渴望してゐる。彼女の初期の作品の中で、その頃殊に私の氣に入つたのは、その頃ヴェニス小説と名づけられたもの、中に出て来る娘の或る型や(それに屬するものは「躍進」や「アリヂニ」などである。)ジャンヌダークに關する歴史的問題の明確な解決となつてゐる傑作「ジャンナ」となつて現れた人物である。

當時の百姓娘の中に彼女はジャンナ・ダークの姿を我々の前に再現し、この壯嚴な、奇蹟的な歴史的现象が現實にあり得ることを明確に證明してゐる。——これは眞にジョルジ・ザンドの目的である。恐らく、彼女を措いては、當時の詩人であんなに無邪氣な娘の純潔な理想を——その無邪氣に依つてあんなに雄大な理想を自分の心に抱懐したものは一人もなかつたであらう。

凡てのかういふ型の娘は幾多の作品の中で一つの懸題を、一つのテーマを繰返してゐる(單に娘許りではない、かういふテーマは同じく初期の作品である「La Mar quise」といふ立派な小説にも繰返されてゐる) 少しも恐れない、邪惡と接觸しても邪惡の魔窟に落ち込むやうな事があつても、汚されないやうな誇りか

な純潔を持つた若い女性の眞卒な、正直な、うぶな性格を表現してゐる。寛大な犠牲の要求は(恰も彼女から期待されてゐるやうな)若い娘の心を捉へて、彼女は毫も躊躇せず、我が身を惜しまず、私慾を棄て、恐るゝことなく、最も危険な、生死の境に足を踏み出すのである。彼女が遭遇するところのものは少しも彼女を畏伏しない。却つて、初めて自分の全力を——無邪氣と正直と純潔の力を知つた許りの若い心に勇氣を増し、精力を倍加し、それまでは己を知らなかつた、清新な、まだ世の中の讓歩に依つて汚されない、大膽な叡智に新しい道と新しい地平線を示すのである。茲に非の打ちどころがない、美しい詩の姿がある。ジョルジ・ザンドはさういふ時、殊に自分の詩を幸福に、無邪氣と誠實と、若い恐るゝことのない素朴の捷利を以て結びをつけるのを好んだ。

かういふ人物が社會を攪亂し、疑念と恐怖を呼起すことが出来たらうか。否、最も嚴格な父母がジョルジ・ザンドを自分の家庭に讀む事を許したのである。只「どうしてあんなにみんながジョルジ・ザンドの事を話すのだらう」と、驚いた許りである。けれど、そこに『この傲然たる女性の要求に、この純潔が邪惡と融和しないところに、この邪惡に對する一切の讓歩を拒絶するところに、この無邪氣が嵩じて争闘となり、侮辱を明視する大膽の中に將來の女性の反抗と女性の解放の毒が潜んでゐるのであるといふ警戒の聲が起つて來た。或は、毒に就ては正しい言葉かも知れない、直個に毒が芽ぐんだのかも知れない、けれど、その毒は何を減ほしに行つたか、この毒から何が減び、何が救はれなければならなかつたか——それが直ぐに問題を構成して、永く解決されなかつた。

今ではもう疾うに是等の問題は解決されてゐる(さう思はれる)。序に言つて置くべきことは、四十年代の半ば頃に掛けて、ジョルジ・ザンドの名聲と彼女の才に對する信仰とは異常に高かつたから、我々、彼女と同時代の者は皆彼女の將來に非常に大なる期待を懸け、まだ聞いた事のない新しい言葉を豫期し、何か解決を與へるやうな、終局のものを期待してゐたのである。この期待は實現されなかつた。その當時、即ち四十年代の終り頃に掛けて、彼女は自分が表明する使命を持つて來た事は悉く言ひ盡して仕舞つたやうに思はれた。それで今はもう、彼女の新しい墓の上に、彼女に就て最後の言葉を言ひ切る事が出来る。

ジョルジ・ザンドは思想家ではない、彼女は人類を待つてゐる。もつと幸福な將來の最も明解なる豫感者(こんなひねくれた言葉を使用することを許されるならば)の一人である。彼女は自ら、自分の心中に於て、理想を昇き上げる力があつたから、生涯人類の理想の貫徹を大膽に、寛大に信じてゐた。この信念を終りまで存置するは崇高な靈魂を有する者と、眞に人間を愛する者とが誰でも持つてゐる天分である。ジョルジ・ザンドは固く神を信じ、自分の不死の生を信じながら、自然神論者として死んだ。それ許りで言ひ足りない、彼女は、形式上には(加特力教徒として)基督を信奉しなかつたとは言へ、同時代の佛蘭西作家の中で誰よりも熱烈な基督教徒であつたらう。勿論、佛蘭西の女として、その同胞の見解に従つて、ジョルジ・ザンドは、『宇宙に彼を措いては救はれることの出来る名前はない』といふ正教の眞諦を自覺的に信奉することは出来なかつた、けれど、外面に現れた形式的の矛盾があるにしても、ジョルジ・ザンドは、恐らく、自分はそれに氣付かずに、最も充實した基督の信奉者であつたに違ひない。彼女は人間の道念の上に、人類の靈の飢渴の上に、人類の蟻のやうな要求に對してではなく、人類の完全と清淨とに對す

る欣求の上に自分の社會主義と、自分の信念と、希望と理想とを建設した。彼女は人間の人格を無條件に信じ、(それが不死だといふまでも)生涯その觀念を自分の作品の中に昂揚し擴張し、以て自分の思想と感情とを基督教の眞諦たる人格と人格の自由(従つて、その責任)との承認と融合させた。こゝから義務の承認とこれに對する嚴肅な道德的要求と人間たる責任の完全な承認が生れて來る。恐らく、當時の佛蘭西には、『人は麵麩のみで生きてゐるものではない』ことをこんなに強く理解してゐた思想家や作家はなかつたであらう。彼女の要求と反抗が傲慢だと言ふ事に就ては、再び繰返して言ふが、この傲慢は慈悲や、侮辱の宥恕や、侮辱者その者に對する同情に基く底のない忍耐を除外したことは決してなかつたのである。却つて、ジョルジ・ザンドは自分の作品の中でかういふ眞理の美に魅惑されたことは一再に止まらない、幾度も彼女は眞の宥恕と愛の型を權化してゐるのである。彼女は自分の生を終るまで、近隣の農民の友として働きつゝ、自分の友達から限りなき愛を受けながら、立派な母親として死んだと書かれてゐる。彼女は幾らかおのが身分の貴族主義を尊重したやうにも思はれるが、若しも彼女が人々の中に貴族主義を尊重したとすれば、それは人間の精神の完全の上に根據を置いたのであると確言することが出来る。彼女は偉大なものを愛し、賤しいものと融和し、その思想を譲らずにはゐられなかつたのである。との意味に於てこそ、餘りに傲慢であつたのである。成る程、彼女は又自分の小説に、偉大な基督教徒たるヂッケンズの小説にあるやうに、虐げられた、正しい人物でも、それを屈するやうな、愚鈍な、打ちのめされた者は描くことを好まなかつた。反對に、公然とおのが主人公を昂揚し、眞つ直に女王を引出した。彼女はこれを好んだ、そしてこの特徴に注意しなければならぬ、それは随分特質のあるものである。

二 章

一、私のパラドックス。

再び歐羅巴との紛糾が起つた（おゝ、まだ戦争ではない、我々には、即ち露西亞にはまだ戦争までは遠いとの事である）再び切りのない東方問題が舞臺に現れて來た。再び歐羅巴では露西亞人に疑ひの眼を向け始めた……けれど、我々は何を焦つて歐羅巴の信用を得ることがあるか？果して歐羅巴は露西亞人に信じ深い眼を向けたことがあるか？果して歐羅巴は將來に於て我々に敵意のない、信じ深い眼を向ける事があるだらうか？おゝ、必ず、いつかはこの眼差が變る時があるだらう。いつかは歐羅巴はもつとよく我々の正體を見究める時があるだらう。この何日は就ては大いに語る必要があるが、今のうちは——今は私の頭に局を外れた、枝葉の問題が浮んで來た。そしてこの頃からその問題の解決に身を委ねてゐる。誰も私の言ふことに同意するものはあるまいが、幾分は私の言ふことも正しいと私には思はれる。誰

私は、歐羅巴では露西亞人を好まないと言つた。好まない——この事に就ては誰も異論はないと思ふ。けれど、就中、歐羅巴では、我々は恐るべき自由主義者であるのみか、いづれも革命家であつて、常に成る愛念を以て、歐羅巴の保守的要素よりは、寧ろ破壊的要素と結合する傾きがあると言つて、凡ての露西亞人を、殆ど一人一人に非難してゐるのである。これに對して多くの歐羅巴人は嘲笑の眼を以て、高い所

から嫌惡するやうに我々を眺めてゐる。彼等には、何から我々がひと事に於て否定者となるべきが解らないのである。彼等是我々を『文明』に屬してゐる者と認めない所から、我々より歐羅巴を否定する權利を奪ひ取つてゐるのである。彼等是我々の中に、歐羅巴をさまよひ、どこかで何ものかを破壊する事が出来るのを——單に破壊の爲に破壊し、野蠻人の群か、古代の羅馬に侵入しやうとしてゐる匈奴のやうに、如何に、凡ての事物が崩壊するかを眺める満足を得る爲に破壊し、如何なる貴重物を滅ぼすかに就て何等の分別もなく、一切の靈場を破壊するのを喜ぶ野蠻人を我々の中に見てゐるのである。歐羅巴に於て露西亞人の大部分が自由主義者であると名告つたことは眞實である、そんな事を言ふのはおかしい位である。誰か自分に、『どうしてこれはさうなのだ』といふ質問を課したものであるだらうか。何故に十中八九の露西亞人は、我々の世紀を通じて、歐羅巴で修業するに及び、歐羅巴人の中で自由を尊んでゐる部類に、『左側』に、即ち、多かれ少かれ、自ら自分の文化と、自分の文明とを否定してゐる方面に結び着いたであらうか。（文明の中でもチエルが否定してゐることゝ七十一年の巴里革命政府が否定してゐることゝは非常な相違である）同様に『多かれ少かれ』又同様に種々雑多に歐羅巴に於ける露西亞人も自由主義になつてゐるのである。併しながら、繰返して言ふが、彼等は抑々の初めから、最初は自由主義の低い階級に躰つてゐるといふよりも、寧ろ驀地に極左側に結び着く傾きが歐羅巴人よりも強いのである——一言にして盡せば、露西亞人の中には革命政府員の徒よりも、チエルの徒の方が遙かに少いのである。これは風に打据ゑられた人たちではない、少くとも、風に打据ゑられた人たちが許りではない、否、非常に緊乎した、文明人の風を備へてゐる、時には殆ど大臣たちと選ぶところが無い。けれど、この風を歐羅巴人は信じないので

ある『Gratitez le russe et vous verrez le tatar』と彼等は言つてゐる。(露西亞の皮を剥いて御覽なさい、韃
鞨人が現れる)これは、恐らく、正しいかも知れない、併し私の頭にはかういふ考が泛んで来た——露西
亞人が歐羅巴と往來するに及んで、その大部分が、極左側に結び着くのは、露西亞人が韃鞨人であつて、
野蠻人として、破壊を好むが故であるか、或は、ほかの原因が露西亞人を動かすのかしら……それが問題
である……この問題は可なりに興味を喚ぶではありませんか。歐羅巴との紛糾は終りに近づいてゐる。
歐羅巴に向つて打抜かれた窓の役目は終つた。そして、何かほかの事が到来しかけてゐる、少くとも、刊
來しないでは置かない、この氣運は些かでも思索する事の出来る者は誰でも認めてゐる。要するに、我々
は何物かに對して用意しなければならぬ、歐羅巴と、これまでとは違つた、新しい、もつと獨特な態度
を以て接しなくてはならないといふ事を益々感じて来たのである——それが東方問題にあるか、或は何か
ほかの事柄にあるか、それは知る所でない！それ故に、かういふ問題は、研究でも、推量でも、バラドッ
クスであつても、それは思想を惹起することの出来る一事でも興味を喚ぶものである。次のやうな現象が
どうして興味を喚ばないだらう？例へば、最も歐羅巴人と自らを任じてゐる露西亞人を我々の間で『西歐
主義者』と呼んでゐるが、彼等はこの紳名を得意がつて、鼻に掛け、今日でも他の露西亞人をクワス屋(ラ
イ麥の麵麩やライ麥の粉と麥芽とを醸造したロシア人の飲料)とかジブン屋(百姓の着る着物)とかと馬
鹿にしてゐる。是等の露西亞人が誰よりも速く文明の否定者と、文明の破壊と『極左側』に結び着き、それ
が露西亞では誰をも驚かさなかつたり、嘗て問題を造らなかつたとあつては、どうして興味を喚ばずにな
られやう？どうしてこれが興味を喚ばないであらう？

私は眞つ直に言つて仕舞ふが、私には答が出来てゐる。けれど、自分の思想を證明する事はしないで、
只それをざつと陳べて、事實丈けを展開しやう。残らずを證明することが出来るものでないといふ一事で
も、證明することは出来ない。

かういふ事が思はれる。この事實には(即ち極左側に結び着く事には、實は最も激烈な西歐主義者でさ
へも歐羅巴の否定者に結び着く事には)——歐羅巴文化が常に、彼得の當時から、嫌つてゐて、由縁のな
い露西亞の精神に、いろ／＼の點に、語られてゐた反抗心が現れてはゐなかつたらうか？私は眞からかう
考へる。勿論、この反抗はいつも無意識の中に生ずる、けれど、露西亞的感覚が消滅しなかつたことが大
切な事である、露西亞の精神は無意識ながらも、おのが露西亞主義の爲に、おのが露西亞の潰されてゐる
主義の爲に反抗してゐたのではあるまいか？勿論、若しさうだとすれば、そこには喜ぶべきことはないとい
言ふかも知れない。『何れにしても破壊者である——匈奴、野蠻人、韃鞨人だ——それが何か崇高なものゝ
爲に否定したのではなくて、自分が歐羅巴の高さを見究めることが出来なかつたまでに低かつたことの爲
に否定するのである』と……

かういふに違ひない。これは問題であることは私も同意である。けれど、私はこれに答へやうとするの
ではない、只韃鞨人に關する想像は全力を以て否定すること丈けを公言する。お、勿論、今日露西亞人
の中で誰が、殊に一切が過ぎて仕舞つた(眞個にその時代は過ぎて仕舞つたから)今日誰が彼得の事業に、
打抜かれた窓に異議を唱へる者があらう。誰がそれに反對して起ち、古代の莫斯科王國を慕ふ者があらう？
そんな事には問題はない、そんな事に就て話を持出したのではない、問題は、どんなにそれが——即ち我

★が窓から眺めたことが好いことであり、益になることであつたにしろ、依然としてその中には良くないことや、害になることが多かつたので、露西亞の精神は殆ど憤慨して、反抗を抑へることが出来なかつた（その大部分は何をしたか解らなかつた程に迷つて仕舞つたが）それは、自分の韃靼性から反抗したのではなくて、實際は、恐らく、窓から眺めたものよりも高いものと良いものを自分の心中に保存してゐたからである……（無論一切の事に反抗したのではない、我々は立派な事物も澤山に受容れた、だから決して恩知らずにはなりたくないが、少くとも、半分には反抗してもよかつたのである）

繰返して言ふが、これは非常にオリヂナルに行はれた。即ち我が激烈なる西歐主義者が、即ち改革の闘士が歐羅巴の否定者となり、最極の左側に黨したのである……その結果、彼等は自ら最も熱烈な露西亞人である、露西亞と露西亞魂の爲に闘ふ志士であると自任した。それは勿論、若しも彼等がこの説明に終始したとすれば、或は嘲蔑を買ひ、或は恐怖を抱かせたであらう。彼等が自分の中に反抗の高さなどを認め、なかつたことは疑ひもないことである、却つて、彼等は二世紀の間、常に自らの高さを否定してゐたのである、單に高さ許りではない、自分に對する尊敬さへも否定して、（かういふ好事家もあつたのである）それが歐羅巴をさへ驚かした位である。而も、彼等が眞の露西亞人であつたのである。この推量を私は私のパラドックスと名づけるのである。

例へば、自分の生れつきからの事に夢中になる性質を有つてゐたベリンスキイは、露西亞人の中でも眞つ先に、歐羅巴文明の制度を否定してゐた歐羅巴の社會主義者に結び着いたのにも拘らず、國內の露西亞文學では、打ち見た所、最後まで正反對の事の爲にスラヴ主義者と闘つてゐた。若しもそれ等のスラヴ

主義者がその頃彼に向つて、彼が即ち露西亞の正義、露西亞の個性、露西亞の主義即ち彼が歐羅巴の爲に露西亞に於て否定し、彼がお伽噺と考へてゐることの爲に闘つてゐる志士の最も極端な者であることを告げ、尙彼に、彼は歐羅巴に於ては社會主義者であり、革命家であるからこそ、或る意味に於ては眞の保守主義であることを證言したならば、どんなに彼は驚いたつたであらう？實は眞個に、さうだつたのである。これには双方に一つの大きな謬りがあつたのである。それは第一に、當時の西歐主義者は何れも露西亞を歐羅巴と混同し、眞面目に露西亞を歐羅巴と看做し、歐羅巴とその制度とを否定しつゝ、露西亞は毫しも歐羅巴ではなく、只歐羅巴の制服を着て歩いてゐるのであるが、制服の下にはまるで異つたものがあるのに、同様の否定を露西亞にも適用することが出来ると思つてゐたのである。これは歐羅巴ではない、別物であるといふことは、スラヴ主義も説破して、西歐主義者が似も寄らない、共に測ることの出来ないものを同列に置いてゐることを指摘し、歐羅巴にとつて役に立つ斷定は露西亞に適用する譯に行かない——その故は、彼等が歐羅巴で希望してゐることは悉く露西亞にある、少くとも、萌芽として、可能として存在してゐる。却つて露西亞の本質を成してゐる位である。只それが革命の體裁を持つてゐるのではなくて、それ等の世界人類更新の思想が有つべき體裁を以て、即ち神の正義を形どつて、いつかは地上に實現すべく、又完全に正教の中に保存されてゐる基督の眞理を形どつて存在してゐるといふことを説破したのである。彼は初めは露西亞を學ぶやうに、それから結論を下すやうに薦めたのであるが、その當時は學ぶことは出来なかつた、實は方法もなかつたのである。且その頃は露西亞に就て何事かを知るなんてことは誰にも出来なかつた。スラヴ主義者は、勿論、西歐主義の百倍も知つてゐた（それも最小限である。）けれど、彼等

も殆ど摸索を以て、自分の法外な感覺に頼りながら、理論的に、抽象的に働いてゐたのである。何事かを學ぶことが出来るやうになつたのはついこの二十年來のことである。けれど、今でも誰が露西亞のことを知つてゐるだらうか？研究が緒に就いたものは澤山にある、が大切な問題が現れたかと思ふと、直ぐに露西亞では皆が區々の意見に別れて仕舞ふ。茲に東方問題が再燃してゐる。ところで、我々の間で誰がこの問題に就く一箇の一般的な決定に同意する能力がありますか？それがかやうに重大な、かやうに危急な、國家の問題に於てある！東方問題だつて！どこへこんなに大きな問題を片付けやう！數百、數千の我が國內の時事問題を見給へ——何ていふ一般のぐらつきやうだ、何ていふ不定見だ、何ていふ不手際だ！見給へ！露西亞中の山林を裸かにしてゐる。地主と百姓とが躍起となつて樹木を濫伐してゐる。その樹木は値段の十分の一にしか賣れはしないのだ——申込が永く續くものではない。我々の子供が成人し切らないうちに、市場の木材は十倍も少なくなつて仕舞ふだらう。その揚句がどうなるか——恐らく破滅だらう。然るに、試みに樹木の撲滅権を縮めるやうなことを言つて見給へ、それこそ何と彼等は言ふであらうか？一方からは、國家の必要で、他の側からは、所有權の破壊で、二箇の反對な思想である。直ちに二ツの派が現れる、そして、自由主義な、凡てを決する力のある意見は何に結び着くか不明である。而も二ツの派だけであらうか？事件は長びいて来る。或る者が今様の進取的な思潮を揶揄して、善がなければ惡がない、若しも露西亞中の樹木をなくして仕舞つても、答の體刑が改廢されるといふ利益が残るだらう、何故ならば、郡の裁判所は罪を犯した百姓の男女を撲つものがなくなつて仕舞ふから。勿論、これは氣休めである、併し、そんな事はどうしても信じられない、縱令樹木が皆無になつても、撲つ位には足りるであらう、外

國から輸入するやうになるから。猶太人どもがこゝかしこで地主になる、——どこへ行つても、彼等が露西亞の土地を、だいなしにしてゐると叫んでゐる。彼等が地領の買入に資本を費しては、直ぐ資本と利息を運用する爲めに、買入れた土地の資力を吸盡すると書いてゐる。けれど、何かこれに反對の言を洩らし見給へ、直ぐに經濟の自由と公民の平等權の主義に背くものだと思はれるであらう。けれど、若しそこ(に)Talmud(猶太法)の status in statu(拉典語、國家に於ける國家)が第一に立つてをり、又若しそこに單に土地の衰退許りではなく、從來の地主から解放されても、そのオプシチナ(土地を共有してゐる農民の團體)を擧げて、更に惨めな奴隷の状態に——更に悪い地主に——既に西部露西亞の百姓から膏血を搾つて仕舞つた新しい地主に——今では土地や百姓を買込む許りでなく、自由主義な意見をも買込み始め、その買込みを敏速に續けてゐる地主の手に落ちるに違ひない露西亞の百姓の衰退があるとすれば、そこに何の平等權があらうぞ。何故に露西亞ではこんな事なるのか？何故に、如何なる事の決定にもかやうにきまりが着かないで、意見が合はないのであらう(眞個の事ではありませんか)？私の考へでは、それは我々の無能からでもなく、實務に對する能がないからでもなくて、ベリンスキイの時代と共にスラヴ主義者も我々も二十年の學校を卒へたのにも拘らず、引繼いで我々が露西亞と露西亞の眞髓や個性と露西亞の意味や精神を知らないからである。この二十年間の學校で露西亞の研究は實際に於て非常に進んだけれど、露西亞的感覚は以前と比較して減少したやうに思はれる。どういふ原因か？若しスラヴ主義者を彼等の露西亞的感覚が救つたならば、その感覚はベリンスキイにもあつたであらう、そして、スラヴ主義者は彼を最も善い友と數へることが出来たであらう。繰返して言ふが、そこには双方に大きな誤解があつたのである。

時には可なりに鋭い事を言つたアポロン・グリゴリエフが、『若しもベリンスキイがもつと生存してゐたらば、屹度スラヴ主義者に結び着いたであらう。』と、言つたのは無理もないことである。この言葉には意味がある。

二、バラドツクスの結論

或る者は言ふだらう。それで貴方は『何れの露西亞人も、歐羅巴の共產主義者に變ると共に直ぐに露西亞の保守主義者になる。』と、主張するのですかと。いや、この結論は餘りに早計である。私はかういふ考へにも一分の眞實はあるといふ文句を言つて置きたかつたのである。これには無自覺な點が多いが、私から見れば、絶えることのない露西亞的感覚と露西亞魂の不滅とに對する強烈な信仰がある。けれど、私が自分でも、そこにバラドツクスのあることに氣づいてゐるが、結論として私が敍べて置きたいことは、これも一つの事實である、事實からの結論であるといふことである。露西亞人は歐羅巴に於て自由主義を以て他と異つてゐる、少くとも、十中の九は、歐羅巴と接觸するが否や、左側に、極左側に結び着くといふことを上に述べたが……その數字に就てはどこまでも頑張るものではない、恐らく、彼等は十中の九ではないかも知れない、併し、自由主義な露西亞人は自由主義でない露西亞人よりも遙かに多い、ことだけは主張する。とは言へ、自由主義でない露西亞人もある。中には歐羅巴文明を否定しないのみではなくて、却つてこれを崇拜して、根こそぎに露西亞的感覚を失ひ、露西亞の個性を失ひ、自國語を失ひ、祖國を換

へて、若し外國の臣民に移らないとすれば少くとも、その未代までも歐羅巴に止つたやうな露西亞人が絶えなかつた。而も、かういふ者が何れも、自由主義な露西亞人に反し、その無神論と共產主義に反して、忽ちに右側に、極右側に結び着いて、恐るべき、歐羅巴流の保守主義者になつたことは事實である。彼等の多くは自分の信仰を換へて、加特力教に移つた。これが既に保守主義者ではないだらうか、これが既に極右側ではないだらうか？然るに歐羅巴に於ける保守主義者は即ち露西亞の完全な否定者である。彼等は露西亞の破壊者となり、露西亞の敵となつたのである！それが露西亞の眞の歐羅巴人から文明の實子となることを意味したのである。——これは二百年間の經驗から得た顯著な事實である。眞の歐羅巴人になつた露西亞人は、同時に露西亞の敵とならざるを得ないといふ結論である。窓を打抜いた人たちが望んだのはそれであるか？念頭に置いてゐるのはこれであらうか？かくて、文明の露西亞人には二ツの型が出来上つた、同時に歐羅巴を否定したベリンスキイのやうな歐羅巴人は、露西亞に就ていへば、の謬論を公表したにも拘らず、極度に露西亞人であつたが、生粹の露西亞公爵であるガガリンは歐羅巴人となると共に、加特力に移る許りでなく、一足飛びにイエスイツトに改宗することが必要だと思ひ込んで仕舞つた。彼等のうちでどちらが餘計に露西亞の友でせう？どつちが餘計に露西亞人だつたでせう？この第二の例(極右側)は、露西亞の歐羅巴的社會主義者や共產主義者は第一に歐羅巴人ではなくて、混迷が雲散し、露西亞の研究が積んで仕舞ふと、再び立派な露西亞人に立歸るといふこと、第二に露西亞人には幾らかでも露西亞たることを失はずに、どうしても眞面目な歐羅巴人に變ることは出来ない、若しさうとすれば、露西亞は、従つて、歐羅巴とは似も寄らない、我と自らに依つて眞面目な、全く獨立した、特殊なものであるといふ

ことにある、私の初に言つたバラドックスを裏書してはならないだらうか。且歐羅巴そのものが、露西亞人の革命性を批難したり、笑つたりしてゐるのは、恐らく、間違つてゐる。我々が革命家であるのは匈奴や韃靼人のやうに建設を忘れた破壊のみの爲ではない、何かほかの事の爲である、成る程、未だに我々は、自らも何の爲か知らない(併し、よく知つてゐるものは、自分のことは隠すものである。)けれども……

要するに、我々は自家の必要から、言はば、保守主義から革命家である譯である……けれど、それも皆過渡の事である、上にも陳べてある通り、局を外れた枝葉のことである、が今や永久に解決し難い東方問題が舞臺に現れてゐる。

三、東方問題

東方問題！我々の中で今月中に可なりに異常な感じを味はない者があらうか。そして、どれ丈けの議論が新聞に出てゐたらう！或る者の頭には如何なる困亂があるだらう、或る決議には如何なる破廉耻があるだらう、或る者の心には如何に純潔な顛慄があるだらう、或る愆張りは如何に悲鳴を揚げたらう、併し、おどかす者は澤山にあつたが、何にも恐れることはないこと丈けは儲かである。且露西亞に臆病者がそんなに多かつたとは想像し難いことである。露西亞には故意からの臆病者があることは眞實である、併し、彼等は時機を誤つたのだ、今ではもう臆病になるには遅い位である。効果を納める的がない。けれど、故意からの臆病者も分を辨へてゐるから、昔イワン・ワシリエウイチ・グロオズヌイがステファン・パトリイ王

に使者を送るに及んで、いくち打たれても我慢して、講和を願つて来るやうに要求したやうに、露西亞から不名譽を要求するやうなことはないであらう。要するに、輿論は如何なる講和を結ぶ爲にも打たれることを肯じなかつたやうである。ミラン・セルプスキイ公とニコライ・チエルノゴルスキイ公は、天祐と自分の權利を頼みとして、回々君主に向つて軍を進めたが、この文が讀まれる頃には、恐らく、目覺しい會戦が、否決戰の報知が傳はるであらう。今や事態は迅速に進まうとしてゐる。列國の逡巡、伯林會議の決議に則することを拒絶した英吉利の外交、それに次で君斯坦堡に起つた革命と回々教徒の狂亂、バシブズキ(土耳其の馬賊)やチエルケツス(アリアン人種にして、回々教を奉ずるアヂゲ種族の高架索人)が六萬に達する勃牙利人の老若男女を虐殺した事——これ等の事件が一緒になつて戰爭に點火したのである。スラヴ人には多くの期待がある。彼等には、その全力を集めれば、十五萬の兵がある。その中で四分の三以上は可なりな正規軍である。併し、肝心なことは士氣である。彼等は自分の正義を信じ、自分の捷利を信じて進んで行く。然るに、土耳其人には狂信があつても、無主義と困亂とが漲つてゐる。そして、若しこの困亂が最初の會戦後に絶大な恐怖に變るやうなことがあつても、さして異とするには及ばない。それで、歐羅巴の干涉さへ起らなければ、スラヴ人が勝つに違ひないと豫言することが出来ると思ふ。歐羅巴の干涉しないことは決まつたらしいが、歐羅巴の政策に緊乎と結着がつかないものがあるとは言ひ難い。急に勃發した大問題に因つて、凡ての人々はてんで人を當てにして、最後の斷定を下し兼ねてゐるたやうである。併し、東方三強國の同盟は繼續してゐるといふことである、又三帝王の會見も繼續してゐるといふから、この方面からスラヴ人が戰鬪に干涉しないことは儲かであらう。孤立した英吉利は同盟者を求めてゐる――

—それが見つかるかどうかは問題である。見つけたとしても、佛蘭西ではなからう。要するに、歐羅巴は干渉せずに、基督教徒と回々教徒の戦争を傍観してゐるだらう……けれど、それは當分のことである、ある時までのことである……遺産の分配までのことである。併し、その遺産があり得るであらうか？否何等かの遺産があるであらうか？若し神がスラヴ人に捷利を贈つて呉れたとしたら、如何なる程度まで歐羅巴はスラヴ人を捷利の中に許すだらうか？寢床から病人を引摺り出して仕舞ふことを許すだらうか？それは想像し難いことである。反對に、新たに合議をした上で、再び病人を治療することに決めはしないだらうか？……それ故に、スラヴ人の努力は、大成功の場合にも、一時の緩和劑位で報ひられるかも知れない。塞耳維は自分の力量を期待して、戰場に出たが、最後の運命は露西亞に懸つてゐるといふことを知つてゐる。大きな不幸が到來する場合、滅亡の憂き目を救つて呉れるのは露西亞のみである——又成功の場合、露西亞は得られる得る利益の maximum を保障するやうに助けて呉れることを知つてゐるのである。塞耳維はこれを知り、露西亞を期待してゐるが、又歐羅巴中が陰險な疑念を以て露西亞を眺めてゐること、露西亞の位置は心配であることをも知つてゐる。要するに、凡ては將來にあるのだが、さりとて露西亞は如何に振舞つたものであるか？

これは問題であるか？何れの露西亞人に取つても、これは問題になる譯がない。露西亞は正直に振舞つてゐる——これが問題に對する答への全體である。英吉利で最初の宰相が政策上から議會の前で眞實を曲けて、六萬の勃牙人を虐殺したのは土耳其人でもなく、パシブズキでもなく、スラヴの移民であると聲明して、議會が政策上からこれを信じ、その虚偽を黙諾するとしても、露西亞には決してそんなことが有り

得ない。或は言ふであらう、つまるところ露西亞は自分の明白な不利に面して進み得ないのかと。併し、どこに露西亞の利益はあるのか？露西亞の利益は（若しさしななければならぬ）明白な不利に、明白な犠牲に向つて進み、只正義を破らないやうにする所にあるのである。露西亞は數世紀に亘つて遺言されて、今日まで受繼いで来た大きな思想に乖くことは出来ない。この思想は、とりわけて、スラヴ人の大同團結である。併し、この大同團結は攻略でもなく、暴力でもない、人類に對する奉仕の爲である。まして何時、露西亞は自分の直接な利益から政治上に行動したことがあるか？否、彼得堡の歴史が始まつて以來、若しも歐羅巴が不信と疑念と嫌惡とを以て我々を眺めず、明瞭に眺めることが出来たならば、これを驚かすことが出来たかも知れないやうな無慾を以て他國の利益に仕へたことは屢々ではなかつたらうか？歐羅巴では何事にも無慾を信じやうとする者はない、單に露西亞の無慾を許りではない……寧ろ諷詐か愚劣を信じやうとする。けれど、我々は彼等の宣告を恐れる必要はない、こゝに露西亞の無慾の自制がある——こゝに露西亞の力が籠つてゐる、露西亞の人格と、露西亞の任務の將來が籠つてゐる。只遺憾なことは、この力が時として可なりに誤つた方に用ゐられて来たことである。

四、歴史の架空的な解釋

彼得後の百五十年、我々は人類のあらゆる文明と仲間入をし、その歴史やその理想と縁を結ぶことに努めて来た。我々は佛蘭西人や獨逸人を、彼等は嘗て我々を愛したこともなく、却つて永劫に愛すまいと決

めてゐるにも拘らず、恰も我々の兄弟でもあつたやうに、愛することを教へられ、又自分をさういふ風に仕向けて来た。けれど、この中に我々の改革があつた、彼得の事業が盡されてゐた、我々はその改革から、一世紀半に亘つて、恐らく古代や現代の如何なる民族にも繰返されたことのない視界の擴張を體驗した。彼得前の露西亞は、政治上には徐ろに造りなされて来たけれども、非常に活動的で、鞏固であつた。自らに統一を造つて、その邊境を固める用意をしてゐた。自分のことに就ては、どこにもない寶物——正教を自分の中に携へてゐて、露西亞は基督の眞理の、而も眞の眞理の、他の凡ての信仰や他の凡ての民族には暗くなつて仕舞つたまことの基督の姿の保存者であることを諒解してゐた。と寶物は、この露西亞に特有な、露西亞に保存を委ねられた永久の眞理は、當時の優れた露西亞人の見解に依つて、他の一切の教化の義務から彼等の良心を極めて呉れたのである。そののみか、莫斯科では歐羅巴との交りを深めることは露西亞の知識と思想とに有害な、醜惡な、影響を及ぼし、正教の本質を曲げ、露西亞を『他の凡ての民族の轍を踏んで』滅亡の途に連れ込むかも知れないといふ見解に達した位である。かくして、古代の露西亞は自己に閉ぢ籠つて正しくなくなるやうに——自分の寶物たる正教を無爲に自分の中に藏つて置いて、貴方がたと同一の什器で食べやうとしない。又各自が自分の茶碗と匙を持つのを神聖なことと思つてゐる他の分派のやうに歐羅巴から、否人類から自らを閉ざすやうに決めて仕舞つて、人類の前に正しくなくなるやうに用意をしてゐたのである。この比較は間違つてゐない、何故ならば、彼得の來臨する前に、露西亞には歐羅巴に對してこの通りの政治的及精神的態度が出来上つてゐたのであるから、彼得改革と共に未曾有の視界の擴大が現れた——繰返して言ふが、茲に彼得の偉勳が盡されてゐるのである。これが私が「日記」

の前號中で語つた貴重物なのである——我々、露西亞文化の上層が露西亞から百五十年の歲月を留守にした後に民衆に齎してゐる貴重物である、我々自身がその正義の前に拜跪した後に、民衆が *St. Paul's House* (拉典語、必須條件として)我々から探らなければならぬ貴重物である、『それがなければ兩層の結合は不可能となつて、一切が滅びて仕舞ふであらう。』さらば、この「視界の擴大」とは如何なるものであるか、又何を意味するものであるか？元來の意味に於て、これは開化ではない、科學ではない、これは歐羅巴文明の爲に露西亞民衆の道德的本體に乖離することではない。否、これは露西亞の民衆にのみ特有なものである、蓋しこのやうな改革は未だ曾てどこもなかつたことである。これは、眞個に又實際に、一世紀半に亘る交易を以て我々が體得した、他の民族に對する我々の兄弟愛である。これは、時として、自己の大きな利益をも犠牲とする我々の人類に對する公仕の要求である、これは我々の彼等の文明との和合である、彼等の理想の知得と——その理想は我々の理想と融和しなかつたが——寛恕である、それは我々が贏ち得たところの、歐羅巴文明の各々に、否歐羅巴の人格の各々に、同意することの出来ない點が澤山にあるに拘らず——その中に、含まれてゐる眞理を啓き且見出すことの出来る能力である。最後、これは第一に正しいものとなり、眞理のみを求めやうとする要求である。要するに、これは、恐らく、我々の寶物たる正教を人類に對する奉仕に——正教が豫任されてゐるところのものに、又その眞の本質を形造つてゐるところのものに適用することの初めである、第一歩である。かくて、彼得の改革を通じてもとの吾が思想が、露西亞の莫斯科の思想が擴張されたのである、その増大した理解が緊張したのである。我々はそれに因つて我々の世界的任務を知り、人類に於ける我々の人格と役目とを自覺したのである、そして、この任務と

役目とは他民族のそれとは似てゐないことを覺らざるを得なかつたのである。何故ならば、彼等の民族的
人格は一途に自分の爲に自分の利益の爲に生きてゐる許りであるが、我々は、時機到来せる今日、一般の
和合の爲に、萬人の僕となることから仕事を始めやうとしてゐるのである。これは毫しも恥辱ではない。こ
れは人類の最終の團結に導くものであるから、この中には我々の偉大があるのである。神の王國に於て誰
よりも高くなりたいたいものは、萬人の僕となれ。私はかういふ風にその理想に於ける露西亞の使命を解する。
彼得の彼に於ける吾が新しい政治の第一歩は自づからに決まつてゐた、この第一歩は、言はゞ、露西亞
の翼の下に凡ての斯拉ヴ民族が團結することになればならなかつた。この團結は略取の爲でなく、暴力
の爲でなく、露西亞の異像の前に斯拉ヴの人格を撲滅する爲でなく、人格を再創して、歐羅巴と人類に對
する當然の關係に置き、その數限りない數世期間の苦痛から休息し、氣を休める事が出来るやうにする爲
である、又英氣を養つて、自分の新しい力を感じたる後、おのが寄進を人類の魂の殿堂に齎し、文明の只
中で自分の言葉を言はんが爲である。おゝ、貴方がたは上に掲げた露西亞の使命に關する「憧憬」を嗤ふ
であらうが、併し、歐羅巴の疑つてゐる如く、斯拉ヴ人を政治上に露西亞と結び着け、彼等に因つて露西
亞の政治的勢力を強めんが爲ではなくて、完全な人格的自由の爲と彼等の魂を蘇らす爲にこそ、以上の根
底に於て斯拉ヴの人の復活を望んでゐるのは露西亞人の全體ではないでせうか？眞個にさうではないでせ
うか？従つて、前述の「憧憬」はたとひその一部分なりとも、事實の上に現れてゐることではないでせうか？
勿論、この目的の爲にこそ、君斯坦丁堡は、晩かれ早かれ、我々のものとならなければならぬ……若し
も塊地利人が英吉利人が上述の「憧憬」を讀んで、かやうに大それた結論に達するならば、どんなに嘲

笑するであらう……『君斯坦丁堡や金角は世界で第一の政治點ではないか、これをしも略取でないとは？』
……と。

さうだ、金角と君斯坦丁堡——何れも我々のものとなるのだ。けれど、略取の爲ではない、暴力の爲で
はないと私は答へる。第一にこれは獨りで起つて来る、それは時機が到来したからである、若し今はま
だ來ないとすれば、眞個に近づいてゐる、その兆が方々に見えてゐる。これは當然の歸趨である、これは
自然の言葉である。これが以前に起らなかつたのは、時機が熟さなかつたからである。歐羅巴では「彼得
大帝の遺言」でもあるかの様に信じてゐる。それは波蘭人の書いた偽造書に過ぎない。けれど、若しも彼
得に彼得堡を創立する代りに、君斯坦丁堡を略取し様といふ考へが湧いたとしても、又回々君主を打破る
丈けの力は持つてゐたとしても、その時は、或る熟慮から、その考へを放棄したであらう、何故ならば、
その時は、この事業は機運が到来してゐなかつた故に、却つて露西亞の滅亡を招くかも知れなかつたから。
既に芬蘭の彼得堡に於て我々が、たとひ益になつてゐたが、その代り、著しく露西亞の發展を麻痺させ
た、隣人たる獨逸人の勢力を避けることが出来なくなつた時、そのまことの道が明かになる前に、壯大な
古代文明の遺風を存してゐる、巨大な、獨特な君斯坦丁堡に於ては、希臘人の、粗野な獨逸人には及びも
つかぬ程に高雅な、まるで我々とは異つてゐる獨逸人よりも遙かに我々と共通な接觸點を持つてゐる、又
忽ちに王座を取圍み、露西亞人よりも先に學識と修養とを具へ得るやうな、その近い子孫許りでなく、彼
得そのものをその智識と航海の技能と丈けで、魅惑したかも知れないやうな人たちである希臘人の勢力
を避けることが出来たかも知れない。要するに、彼等は露西亞を政治的に領獲し、露西亞を新しい亞細亞

の道に、又しても何等かの孤立に引摺り込んだかも知れない、勿論、これは當時の露西亞には堪えられないことであつた。その露西亞の力とその民族性はおのれの儘に停まつたであらう。強大な露西亞は遠く離れた、雪の絶えない、暗い北國に止まつて、單に物質丈けを以て更新された君府の爲に盡しながら、恐らく、仕舞ひには、君府を取りに行くことが必要であるとは認めなくなつて仕舞つたであらう。露西亞の南方は悉く希臘人の略取する所となつて仕舞つたであらう。否、恐らく、正教そのものも、更新された君府と露西亞との二ツの世界に分離して仕舞つたであらう……要するに、一切の事が毫しも時を得てゐなかつたのである。然るに今日では全く異つてゐる。

今露西亞は既に歐羅巴に行つて來た、そして自身が既に教養を受けてゐる。殊に自分の全力を知つて、眞個に強くなつた、知つたと共に、その知つたことに因つて誰よりも強くなるのである。今や露西亞は、君府は決して露西亞の首都としてではなくて我々のものになり得ることを解した、ところが、二世紀前には、彼得が君府を略取したとしたら、これにおのが首都を選さなければならなかつたであらう、そんなことをしたら滅亡だつたであらう、蓋し君府は露西亞にあるのではない、又露西亞となることは出来なかつたのである。若しも彼等がこの誤りを制し得たとしても、その近い子孫はどんなことがあつても制することは出来なかつたであらう。若しも今、君府が露西亞の首都としてでなく我々のものとなるとしても、或る者が空想するやうに、同じく全スラヴの首都としてではない。全スラヴは、露西亞がなければ、若しもその部分部分から政治的に纏つたものを造ることが出来るとしても、希臘との戦ひに衰へて仕舞ふであらう。希臘人丈けで君斯坦丁堡を繼承することは、今ではもう全く不可能である、かやうな地球の重要地點

を彼等に渡すことは出来ない、彼等には餘りに分限に合はない。露西亞を頂く全スラヴなら——お、勿論、それは全く別の事である、けれど、それが良い事であるか否かは再び問題であらうか？これは露西亞が政治的にスラヴ人を略取する——それは毫しも我々に必要のない——ことであらうか？かくては、何の名に依つて、如何なる道徳的の權利の名に依つて露西亞は君斯坦丁堡を索むるむとが出来るであらう？如何なる崇高な目的に倚つて、これを歐羅巴から要求することが出来るだらうか？それは正教の指導者としてである、その保護者として、保存者としてである——その紋章として君府の兩頭の鷲を露西亞の古代の紋章よりも上に置いたイワス三世の時から露西亞に豫任され、露西亞が己に己の任務を果す力を認め、實際に正教と、これを奉ぜざる民族の有力な、又唯一の保護者となつた時である。彼得大帝の後には既に疑ひもなく定まつた役目としてである。これが理由である、これが舊い君府に對する權利である、そして、自己の獨立に最も執拗なるスラヴ民族にも、或は希臘人にすらも分명한ことであり、耻辱なことではないであらう。且これに因つて始めて、凡ての正教民族——スラヴ民族だらうが、希臘人だらうが同じやうに——對して露西亞には必然到來すべき政治的態度の眞の實質が定まるのである。露西亞は彼等の保護者である、恐らく、指導者である、けれど、主宰者ではない、彼等の母であつて、主人ではない、若し彼等の女王であるやうなことがあるとしても、それは單に彼等が勝手にする宣言に依るのみで、彼等が因つて以て自ら自分の獨立と人格を定めるところのものは毫しも喪失するものではない。それ故に、かやうな同盟には、正教でない歐羅巴のスラヴ民族も、いつかは遂に加盟するかも知れない。蓋し彼等は、露西亞の保護の下に團結するは各自が獨立の人格を鞏固にすることであつて、この偉大な團結力がなければ、たとひ

回々教徒や歐羅巴人(今彼等が隸屬してゐる)から政治上に獨立するやうなことがあつても、恐らく、相互の不和と不一致から再び衰頹を來すであらうといふことを自ら看取するであらう。

何が爲に言葉の遊戯をするのだ——と私に言ふだらう——その「正教」とは何のことだ？そのやうに變つた考へは何を意味するのだ。民族の團結權とは何を指すのだ？それは最も廣い根柢に於てとは言へ、或は亞米利加合衆國のやうに、或はもつと廣いかも知れないが、要するに他のそれと類似した一般の政治的聯盟ではないか？といふやうな問題がある。それに答へやう。否、これはそれどこではない、言葉の遊戯ではない、實際に特殊な、未聞の事が起るのだ。これは單なる政治的團結ではない、而も歐羅巴がさうよ外には想像することが出来ないやうな、政治的略取や暴力ではない。又商賣や、自家の利益や、愚昧な者より外には誰も信じない官用の基督教を藉りてするいつも變らない偽善の爲ではない。否、これは東方に保存されてゐる基督の眞理の闡揚である、眞に新しい十字架の闡揚である、既に昔から露西亞がその上に立つてゐる正教の最終の言葉である。これは世界の列強に取つて、今日まで世界で勝を制し、常に侮蔑と嘲りとを以てかやうな「期待」を眺めてゐた、否人類に對する公仕に基いてゐる人々の親愛や、民族の和合や、同盟と、最後に、眞の基督教に基く人類の更新を眞面目に信ずることが出来ることを解しない者に取つて誘惑となるだらう。そして、若し統一された正教の頭に立つて露西亞が世界に向つて發し得るこの「新しい言葉」を信ずることが「ユトピア」であり、嘲笑に値ひすることに過ぎなければ、私をさうしたユトピストの數に加へても構はない、が私はこの笑止な事を自分の心に藏つて置かう。

尙、又反駁するであらう——「露西亞にスラヴ民族の頭となり、君斯坦丁堡に這入ることを許すときがあ

らうといふのが既にユトピアである、憧れることは出来るが、それはどこまでも憧れるに過ぎない。」と。さうだらうか？けれど、尙、露西亞は強い、恐らく、自分が思つてゐるよりも、遙かに強いかも知れない——その上に、歐羅巴に横溢してゐた威力が——その一つは塵埃のやうに、たつた一日で神風に掃蕩されて、消滅して仕舞つたが、その代りに、その強さでは地上になかつたやうな新しい帝國が姿を現した——揚つたのは我々の目撃するところではなからうか、それは最近の十年間ではなからうか？誰がそれを豫言することが出来るだらう？若しも我々の時代に於て、我々の眼前に起つたやうな轉變があり得るとすれば、人智は毫も誤りなく東方問題の運命を豫言することが出来るだらうか？スラヴ民族の復活と團結とに絶望する實際の根據がどこにあらう？誰が神の道を知つてゐやう？

五、再び女に就て

新聞では既に殆ど凡ての人達がおのが兄弟の解放の爲に立つた塞耳維人と黒山人に同情を表するやうになつた、又社會でも、民衆でも熱心にその成功を願つてゐる。けれど、スラヴ民族は援助の必要がある。内密ではあるが、塊地利と英吉利が積極的に土耳其を助けてゐるといふ確報が到着した。否、殆ど内密ではない。金錢や、武器や、人力を以て助けてゐる。土耳其軍には多くの外國士官がある。英吉利の大艦隊は君斯坦丁堡の口に碇泊してゐる……政治的商量から……否萬一の場合に備へて……。塊地利には既に大軍が用意されてゐる……同じく萬一の場合に備へて。塊地利の新聞は騒起した塞耳維人と——露西亞に

回々教徒や歐羅巴人(今彼等が隸屬してゐる)から政治上に獨立するやうなことがあつても、恐らく、相互の不和と不一致から再び衰頹を來すであらうといふことを自ら看取するであらう。

何が爲に言葉の遊戯をするのだ——と私に言ふだらう——その「正教」とは何のことだ？そのやうに變つた考へは何を意味するのだ。民族の團結權とは何を指すのだ？それは最も廣い根柢に於てとは言へ、或は亞米利加合衆國のやうに、或はもつと廣いかも知れないが、要するに他のそれと類似した一般の政治的聯盟ではないか？といふやうな問題がある。それに答へやう。否、これはそれどころではない、言葉の遊戯ではない、實際に特殊な、未聞の事が起るのだ。これは單なる政治的團結ではない、而も歐羅巴がさうよりに外には想像することが出来ないやうな、政治的略取や暴力ではない。又商賣や、自家の利益や、愚昧な者より外には誰も信じない官用の基督教を藉りてするいつも變らない偽善の爲ではない。否、これは東方に保存されてゐる基督の眞理の闡揚である、眞に新しい十字架の闡揚である、既に昔から露西亞がその上に立つてゐる正教の最終の言葉である。これは世界の列強に取つて、今日まで世界で勝を制し、常に侮蔑と嘲りとを以てかやうな「期待」を眺めてゐた、否人類に對する公仕に基いてゐる人々の親愛や、民族の和合や、同盟と、最後に、眞の基督教に基く人類の更新を眞面目に信ずることが出来ることを解しない者に取つて誘惑となるだらう。そして、若し統一された正教の頭に立つて露西亞が世界に向つて發し得るこの「新しい言葉」を信ずることが「ユトピア」であり、嘲笑に値ひすることに過ぎなければ、私をさうしたユトピストの數に加へても構はない、が私はこの笑止な事を自分の心に藏つて置かう。

尙、又反駁するであらう——「露西亞にスラヴ民族の頭となり、君斯坦丁堡に這入ることを許すときがあ

らうといふのが既にユトピアである、憧れることは出来るが、それはどこまでも憧れるに過ぎない。」と。さうだらうか？けれど、尙、露西亞は強い、恐らく、自分が思つてゐるよりも、遙かに強いかも知れない——その上に、歐羅巴に横溢してゐた威力が——その一つは塵埃のやうに、たつた一日で神風に掃蕩されて、消滅して仕舞つたが、その代りに、その強さでは地上になかつたやうな新しい帝國が姿を現した——揚つたのは我々の目撃するところではなからうか、それは最近の十年間ではなからうか？誰がそれを豫言することが出来るだらう？若しも我々の時代に於て、我々の眼前に起つたやうな轉變があり得るとすれば、人智は毫も誤りなく東方問題の運命を豫言することが出来るだらうか？スラヴ民族の復活と團結とに絶望する實際の根據がどこにあらう？誰が神の道を知つてゐやう？

五、再び女に就て

新聞では既に殆ど凡ての人達がおのが兄弟の解放の爲に立つた塞耳維人と黒山人に同情を表するやうになつた、又社會でも、民衆でも熱心にその成功を願つてゐる。けれど、スラヴ民族は援助の必要がある。内密ではあるが、塊地利と英吉利が積極的に土耳其を助けてゐるといふ確報が到着した。否、殆ど内密にはない。金錢や、武器や、人力を以て助けてゐる。土耳其軍には多くの外國士官がある。英吉利の大艦隊は君斯坦丁堡の口に碇泊してゐる……政治的商量から……否萬一の場合に備へて……塊地利には既に大軍が用意されてゐる……同じく萬一の場合に備へて。塊地利の新聞は斷起した塞耳維人と——露西亞に

對し憤然としてゐる。現時歐羅巴がスラヴ民族を冷視してゐるとすれば、それは、露西亞人もスラヴ民族であるといふことに依るのである。さもなくば、塙地利の新聞が、塙地利の威力に對してはその武力に於て餘りに微々たる塞耳維人をあんなに恐れる譯がない、又ビエモントと彼等を比較するやうな筈がない。それ故に露西亞の社會は、たとひ金錢や、何かの物資でも、スラヴ民族を助けなければならぬ。チエルニヤエフ將軍から彼得堡に届いた報道に依れば、塞耳維軍の衛生部は非常に貧弱で、軍醫はなく、藥品はなく、負傷者の看護が行き届かないといふことである。莫斯科ではスラヴ委員會が吾が擧起した兄弟の援助に就て露西亞中に呼號し、多くの人たちが成る全員が擧つて塞耳維旅宿の教會に於ける戰勝祈禱に列席した。彼得堡の新聞には公衆が寄附金を送致するといふ申出が現れてゐる。この運動は、所謂死んだやうな夏季たるにも拘らず、益々増大してゐるに違ひない。併し、この季節を彼得堡丈けが死んだやうになつてゐるのではないか。

私はもう「日記」を締切りたいと思つて、既に校正を見て仕舞つた、ところへだけぬけに一人の娘が私を訪れた。彼女は、既に私が「日記」の發行を始めた冬の頃に私と近づきになつた。彼女は可なり六ヶの娘であるから、金に不足はしてゐないが、非常に自分の教育を氣にして、何を讀むべきか、何に最も注意すべきか、私に忠告を講ひに来てゐた。彼女が私を訪ねるのは一と月に一度位に過ぎなかつた。いつも十分以上はゐらないで、自分の事許り話した、けれど、おしゃべりではなく、おとなしく、内氣で、莫迦に私を信頼してゐた。けれど、彼女の中に極めて斷乎たる性格を見届ない譯には行かなかつた、そして私の

眼は誤つてゐなかつた。その時、彼女は這入つて來ると、いきなり言つた……

——塞耳維では病人の看護にことを缺いてゐるさうです。私は當分試験を延ばして、負傷者の看護をしに行きたいと思ひます。貴方のお考へは如何でせうか？

そして彼女は臆病さうに私を見た、それにも拘らず、私は彼女の眼差に既に覺悟を決めて、その覺悟は翻すべくもないことをあり／＼と讀むことが出來た。けれど、彼女は私から首途の言葉を望んでゐた。私は若しやの事から匿名を破るやうなことがあつては不可ないから、私たちの會話を詳細に傳へることは出來ないから、只あらしの事を傳へて置く。

私は急に彼女が可憐になつた——彼女は若いのだ。彼女を困苦や、戦争や野戰病院の望扶斯などで怯えさせることは全く餘計なことであつた、これは火に油を注ぐやうなものであつた。そこには犠牲と義舉と善事の渴望がある許りである、何よりも尊いものがある許りである——些しの名譽心も、些しの陶醉もない——只管に「負傷者を看とりたい。益になることをしたいといふ——希望がある許りである。

——けれど、貴方には負傷者の看護は出來ないでせう？

——え、けれど、私は照會をしてゐるのです、もう委員會に行つて來ました。志望者には二週間の期限を下さいますので、私は、屹度、準備を致します。

屹度、準備を致します、そこには言葉と實際とが離れてはゐない。

——お聞きなさい——私は彼女に言つた——私は貴方を嚇かしたくはない、又心を翻させたくもないが、私の言ふことを商量して、それを良心で量つて下さい。貴方は全く別の境遇に育つて來た。貴方は善良な

社會許りを見て来たので、どうしても善良な氣品を破りやうのないやうな、靜かな境涯にある人たちより外には見たことがないので。けれど、同じ人間でも戦争に出て、窮屈な思ひをし、困苦を嘗めてゐると全くの別人になるものです。偶と貴方が終夜病人の看護や世話をし、やつとで立つてゐられる位に疲れ、軍醫がやつて来て、——自體は非常に善い人であるが、疲れてゐるから、——幾つもの手足を切斷して来た許りで、疲れ果てゐるので、氣が荒くなつてゐるから、貴方に向つて『君は仕事の邪魔をする丈で、何にもしはしない、やり掛けた位なら、よく勤めなければ不可ない。』などと言ふでせう。貴方には辛抱が出来ますか？でも、これはどうしても豫想して掛らないと不可ません、そして私は貴方の前に微細な事柄を擧げるに過ぎないので。現實は時として意想外なものです。それでも貴方は辛抱が出来ますか、貴方の決心は固いけれども、この看護を堪え切れると信じてゐますか、これは意志を餘所にして、無意識に行はれることです……

——若し、私に仕事の邪魔をする許りで役には立たないと言ふならば、それはその軍醫自身が痼癢を起して、疲れてゐるので、私は自分には罪がない、すべきことをしたのだと獨りで承知すれば充分です

——けれど、貴方はまだ若い、どうして自分を受合ふことが出来ますか？

——どうして貴方は私がそんなに若いと思ふのですか？私はもう十八です、少しも若いことはありません……

要するに、納得させることは不可能であつた、何れにしても明日は立つて行くに違ひない、只私が賛成しないのを情なく思つて……

それなら機嫌よくね——と私は言つた——お出でなさい。けれど、仕事が終へたら、早く歸つて御出でなさい。

——お、勿論です。私は試験を受けなければなりませんから。けれど、貴方はどんなに私を喜ばせたか、お信じにならないでせう。

彼女は輝いた顔をして去つたが、一週間の後には彼地にあるであらう。

この「日記」の初めに、ジョルジ・ザンドに關する論文の中で、私は彼女の初期の作品の中で殊に私の氣に入つた娘たちの性格に就て一言して置いたが、これがその娘たちの類ひである、そこには恐れることのない、たとひ邪惡と接觸しても穢れることのない誇らかな清淨を持つてゐる眞卒な、正直な、併し、うぶな若い女性の性格があるのである。そこには恰も彼女から豫期されてゐるやうな犠牲と仕事の要求がある、他の人々から期待し、要求する善い事の一切は一切の理屈を抜いて、自分が眞ッ先に始めなければならぬといふ信念がある——この信念は極度に正しく、極度に道徳的ではあるが——悲しいかな、少年の純潔と無邪氣とにばかりに附きものとなり勝ちなものである。併し、くだいやうだが、そこにあるのは仕事許りである、仕事の爲といふこと丈けである、そして、却つて現代の若い人たちや、まだほんの少青年（ボドロストック。十六歳より十八歳までの男女）にさへも屢々見受けるやうな名譽心や、思ひ上りや、自分の義舉からの陶醉などは微塵もない。

彼女が去ると再び私の頭には、現代の女のなかにある活動力の眞面目な需要と教育を修めて公事に携るの必要が著しくなつた今日に於て、女の爲に高等教育を設ける事が焦眉の必要であるといふ考へが泛んで

来た。是等の娘たちの父母は自分の爲に、若しも自分の子が可愛いならば、これを強要しなければならぬと思ふ。眞に、高等の學問は現代の女性の間が始まつた動搖を鎮める丈の魅力と力とを持つてゐるのである。彼女等の質問に答へを與へ、智力を固め、散逸した思想を處理することの出来るのは學問を措いてない。いまの娘に就ては、たとひ彼女が年の若いのは不憫でも、私には彼女を止めることが出来なかつたが、或は、この旅立ちには或る方面から却つて益になるかも知れないと思ふ。それはどこまでも書物の世界ではない、抽象的な信念ではない、彼女を救ふ爲に神が自ら、自分の測り難い恩恵のうちに、彼女に授けた偉大な經驗かも知れない。そこには——彼女の爲に用意された生きた生活の試練があるのだ、そこには彼女の思想と視界との擴大が控へてゐるのだ、そこには彼女が參與した尊い、立派なことに就て生涯の追憶となるべきものが控へてゐるのだ、その立派なことは彼女が人生を尊重し、私が五月の「日記」の中で語つた不幸な自殺者ピサレワのやうに、生きもしないうちに、人生から疲れるやうなことがないやうにするであらう。

七月と八月

一章

一、外國行き。露西亞の汽車に就て。

もう二た月も讀者と話をしなかつた。六月號を（それで私の刊行物も半年は締切りになつた）渡すと、私は直ぐに汽車に乗つて、エムス（獨逸の都市）へ發つた。——お、靜養をしにではない、その爲なら、どうしてエムスなどへ行かう。又これは、勿論、餘りに個人的の私用である、けれど、私が「日記」を書くのは、時として公衆の爲許りでなく、自分自身の爲である——（それだから、多分日記の中にはギョチないことや、以外なことが、即ち私にはすつかり馴染になつて、肚の中で長い順序を以て作られてゐるが、讀者にはだしぬけに飛び出した、前の事とは關係がないことのやうに思はれる思想が出て來るのである）

——それ故に、どうしてこれに私の外國行きを入れないでられやう。おゝ、勿論、私の望みとしては、どこか露西亞の南の方へ行きたいのである、あの

……とはに變らぬ御恵みで、

少しの、樂な骨折りに、

農夫に百倍の實入りを

肥えた畠が與へるところ、

見かすむやうな草原には、

波がさら／＼と鳴るごとに、

勢ひのいゝ牝馬の群が

誇りに駈け廻る……

やうなところへ行きたい。

けれど、悲しい哉！その地も今は、詩人の憧れた時とは、まるで變つてゐる。少しの骨折どころではない、苦しい骨折にも、農夫が受ける利益は百倍などは及びもつかない。牝馬のことを言ふにも、こんなに烈しい調子を使ふ譯には行かない。序でだが、この間『モスコフスキヤ・ウエドモスチ(莫斯科の大新聞)』でクリミヤの事や、クリミヤから韃靼人を追出すことや、「邊境の疲弊」といふやうな事に關する論説を見

た。「モスコフスキヤ・ウエドモスチ」は韃靼人などは毫しも憐むことはない、追出して仕舞つて、その代りに露西亞人を植民した方が遙かにましだといふやうな激烈な意見を吐いてゐる。私はかういふ意見を激烈と名づけるのに躊躇しない。これは私が六月號の「日記」で陳べた、そのうちのどれかと現れたかと思ふと『直ぐに露西亞では皆が區々の意見に分れて仕舞ふ』三つの思想の一つである、三つの問題の一つである。私はこの「クリミヤ問題」に就ては疾うからさういふ考へを抱いてゐたから、心から「モスコフスキヤ・ウエドモスチ」の意見に同意するが、皆の人たちがこれに同意するかは、眞個に、決し難い。極めてリスタの件つた意見である、又これに自由主義な多數の意見が結び着くかどうかとも解らない。「モスコフスキヤ・ウエドモスチ」は單に事件の政治的方面から即ち單に邊境の守備から「韃靼人を憐むに及ばない」といふ希望を述べてゐるのではなく、眞つ直に邊境の經濟的要求を示してゐるのである。クリミヤの韃靼人はクリミヤの地を開墾する能力がないが露西亞人——即ち南露西亞は遙かに能力があることを事實として示し、その證據として高架索を例に擧げてゐるのである。概して、若しも露西亞人がクリミヤに移民する(勿論、漸次に)に國家から莫大の費用を要するとすれば、そのやうな費用は出すことも出来るし、又出すことにした方が非常に有利である。何れにしても、露西亞人が場所を占めなければ、クリミヤには猶太人が入り込んで、土地の土壤を不毛にして仕舞ふに違ひない。

彼得堡から伯林までは二晝夜もかゝる旅なので、萬一の場合に、二冊の本と幾枚かの新聞を持つて行つ

た。「萬一の場合に」とは、平生から私は知識階級の見知らぬ露西亞人の中に立入るのが怖いからである——これは汽車でも、汽船でも、何れの集會でも、到るところでさうである。これは私の弱點であるが、その弱點は私が持前の猜疑心からである。外國で、外國人の中では、私はいつも氣が軽い、そこでは各々が目指した方へ眞つ直に歩いて行く、ところが露西亞人は「俺のことを何と言ふだらう。」と、左顧右眈しながら歩いてゐる。但し、見掛けは意志が堅固で、ビクともしないやうであるが、その内實は彼等よりもグラつき易いものはないのである、そして少しも自己に信ずる所がないのである。見知らぬ露西亞人が貴方と話を始める時は、いつも莫迦に内密に莫迦に親しさうに持掛けて来るが貴方は最初の一言から深い猜疑と、どんなに「教育」があつても、又どんなにつまらない事からでも、むきになつて、粗々しく躍り出し兼ねまじき、猜み深い、隠れてゐる間癢とを見るであらう。誰も彼もが自分の微々たる事が誰かの故でもあるかの如くに思つて仇を討つやうな氣になつてゐる、ところが、それが毫しも微々たる人間ではなくて、却つて全く反對なことさへもある。否、「俺のことを何と言ふが、俺に構つたことではない。」とか或は「俺は世間の評判などには毫しも頓着しない。」と、いふことを露西亞人程多く口にする人間はない、——而も露西亞人程(又しても文明な露西亞人程)多く世間の評判を怖れ、彼に就て人が言つたり、思つたりすることにビク／＼する人間はない。これは、勿論、底の知れない意固地と虚榮から自己に對する尊敬の念が皆無になつてゐる所から起るので、それが露西亞人の中に深く隠れてゐるのである。この二つの反對性は殆ど一如の知識ある露西亞人の中に鎮座してゐるが、自身に取つて第一に堪え難いものである、列敵ならば、何れも「心中に地獄」といふべきものを持つてゐるのであるから、殊に外國で、知らない露

西亞人と面と向つて會ふのは辛いものである、何故ならば、例へば、貴方がワゴンの中へ一緒に閉ぢ込められるやうな、不幸に遭つたらば、それこそ逃げることは出来ない。それでも、「他國で同胞に遭ふのは如何にも愉快なやうに思はれるに違ひない。而も會話はいつも極つてこの言葉から始まる、貴方が露西亞人であることを知ると、同胞は「貴方は露西亞人ですか?他國で同胞に遭ふのは何て愉快だらう、私も當地に來てゐるのです。」と、型のやうに始める……すると忽ちに調子が寛いで来る。他國で抱き合つた二人の同胞にふさはしい、如何にも親密な兄弟のやうな調子になる。けれど、その調子を信じては不可ない。たとひ同胞は笑つてゐても、疑ひの眼を以て貴方を見てゐるのである。貴方は相手の眼から、相手のシユウシユウ言はせる音調から、言葉の優しい韻列からそれを看取することが出来ます、相手は貴方を測つてゐる、屹度貴方を怖れてゐる、もう嘘を言ひたくなくなつてゐる、且貴方が同じく露西亞人であるところから、どうしても貴方を疑ひ、嘘をつかなければゐられないのである、そして不知不識に貴方を自分と較べて測つてゐるが、それは恐らく、貴方が實際にさうされるやうなことをしたからであらう。それから殆どいつも、いや、少くも、非常に屢々、露西亞人の見知らぬ人は外國にあると(外國の方が烈しい、外國では殆どいつも)二言か三言言葉を交したかと思ふと直ぐに、自分はこの間かういふ人に會つたとか、かういふ人から、即ち露西亞人の中でかういふえらい人とか有名な人からかういふことを聞いたとかいふことを言ひたがるのも著しいことである——而もその人が自分の許りでなくあなたの友だちでもあるやうに、如何にも親しい、打ち解けた調子で——勿論、貴方は御存じでせう、氣の毒な病人が當地の名醫といふ名醫に見て貰つたが、その名醫たちは彼を鱈泉に行くやうに勧めてゐるが、全く死んだやうになつてゐる。

若し貴方が全く知らないと答へやうものなら、その見知らぬ人はそこに『お前は俺がお前の前に名士と知己があることを誇りたかつたのに気がつかかなかつたのか？』と、何か自分に取つて侮辱なことを採し出すのである。貴方はこの質問を彼の眼の中に讀むことが出来ますが、それはいかにもその通りだつたのです。若し貴方がその人を知つてゐると答へやうものなら、彼はもつと烈しく立腹するでせう、だがそれは何故だか知りません。要するに、不誠實と反感が双方から増長して、會話は急に杜切れて黙り込んで仕舞ふのである。同胞は急に貴方から脊を向ける。彼は貴方と許りでなく、向ひ側に腰掛けてゐる獨逸人の麵麴屋と——貴方がそれを注目するやうに——さつきから話をし掛けやうとしてゐる。あんなに親しさうに話を始めながら、彼は貴方と凡ての關係を絶つて、無下に貴方に構はなくなつて仕舞ふ。夜になる、そして席があれば、もう少しであなたに足が觸れるやうに、或は、故意に足を觸れさせて、座蒲團の上に長々と寝そべる、そして旅が終ると、貴方に頭も下けずに、ワゴンから出て行く。『一體何がそんなに癢に觸つたのだらう？』と、貴方は悲哀と疑惑とを以て考へるだらう。遭つて一番好いのは露西亞の將軍である。露西亞の將軍は外國に出ると、彼と遭遇する露西亞人が、『我々は外國に来てゐるのだから、平等になつたのだ。』といふことを應用して、位階に依らずに話し出すやうな無禮をしないやうに氣を遣ふことが夥しい。それ故に、旅行に出ると、最初から嚴めしい、暗い沈黙に沈む、だが誰にも妨げをしないので、遙かに好い。序でだが、外國に行く露西亞の將軍は平服を着るのが好きで、彼得堡で一流の洋服屋に注文する、そして、歐羅巴中から澤山の美しい婦人が出て来るやうな湯治場に来ると、莫迦におしやれをしたがる。季節を過ぎすと、彼は平服で寫眞を撮つて、彼得堡にゐる自分の知人に贈つたり、贈物として部下の者を幸

福にしてやつたりする。併し、いづれにしても、用意して来た本や新聞は旅に出ると非常に助けになる。即ち露西亞人避けとして『私は讀んでゐる、安靜にさしといて呉れ給へ。』といふことになる。

二、獨逸人の好戦性に就て

獨逸の地に這入ると、我々のクベエにゐた六人の獨逸人が、直ぐに我々を一緒に閉めるが否や、お互の間に戦争のこと、露西亞のことを話し始めた。これは私に取つて興味のあることであつた、獨逸の新聞では目下露西亞に就て大騒ぎをやつてゐることは私も承知してゐるが、それが巷間で論ぜられるとは思はなかつた。これは決して「上流の」獨逸人ではなかつた、一人の男爵もなく、一人の獨逸士官もなかつたやうである。又彼等の語る所は「高尚な政論」ではなくて、露西亞の實力——主として軍事上の——とか、現在の勢力とかいふことに過ぎなかつた。得意さうな、いさゝか傲慢な落附きを以て彼等は、露西亞は未だ嘗て武力に於いてこんなに薄弱な状態にあつたことはなかつたと話し合つた。彼得堡から乗つて来た、一人の尊大な、年輩の獨逸人は如何にも物議り顔をして露西亞にはいくらか物になる速射銃は二十七萬挺を出ない、あとの古いのを造り直したもので、それ等を合算した速射銃はみんな五十萬挺に達しないといふやうなことを言つた。それから、金屬製の信管は六千萬しか出来てゐない、だから戦時の軍隊が残りまで百萬とすれば、一人の兵卒に六十發にしか當らない、加之、その信管は出来が悪いと説いてゐた。彼等は、併し、愉快さうに論じてゐた。茲に斷つて置くべきことは、彼等は私が露西亞人であることを知

つたことである、けれど、私が車掌と交した二三の言葉に依つて、私は獨逸語を知らないと斷定したものであつた。併し、私は獨逸語を操ることは不味いが、解る丈けは解る。暫くの後、私は彼等の數字や報告は悪い方へ誇張されてゐること、既に四年も前に吾が軍隊の軍備は極めて満足な結果に達してゐるが、軍備の事業は不斷に繼續してゐるから、その時から見れば遙かに進んでゐること、又我々は今どこにも劣らないことを反駁するのが——併し、彼等の調子に合ふやうに、出来る丈け冷靜に——「愛國的義務」だと考へた。彼等は、私の獨逸語が不味いにも拘らず、私の言ふことを傾聴した、そして私が忘れてゐたり、突つかつたりする單語を言ひ添えて呉れたりして、私の言ふことが解る印として點首したりした。(備考、貴方が獨逸語を話すのが不味くても、貴方の聞き手たる獨逸人の教育が高ければ高い丈け、それ丈け早く貴方の言ふことを理解します。ところが街の群衆と、例へば、女中ど、話すとき全く違ひます、彼等は解りが鈍い、纏つた句のうちで一語でも忘れてゐるやうなものなら——殊に、若しも普通に用ゐられる言葉の代りに、少しく用途の少ないほかの言葉を使はうものなら、それこそいかなることでも貴方の言ふことを理解しない。それが佛蘭西人や伊太利人もかういふ風であるかどうか知らない、けれど、セバストポオルの露西亞兵はクリミヤにある佛蘭西の俘虜と會話をして(多分、身振りでも)彼等を諒解することが出来たと云ふことであつた。従つて、佛蘭西人の語つた言葉の半分も知つてゐれば、そのいふことが悉く解つたのであらう。)獨逸人は私の言ふことに一つも反駁しなかつた、私の言葉に微笑を洩らしてゐた、けれど、毫しも尊大ぶつた所はなく、却つて賛成するやうに、私が露西亞人として、露西亞の名譽を辯護するやうに許り話してゐることを辨へてゐた。けれど、彼等の眼を見ると、微塵も私の言ふことを信じないで、自分

たちの考へを曲げないことが解つた。五年前の七十一年には、彼等もこんなに慥慥ではなかつた。その頃私はドレスデンに住んでゐた、そして素邈の軍隊が凱旋した様子を憶えてゐる。市は凱旋門を設け、祝賀會を催した。是等の軍隊が出征し始めた許りの時、俄かにドレスデンの隅々や、公衆の集まる場所に大きな字で *der Krieg ist erklärt* (戦争は布告せられたり!) といふ印刷物が現れた時の、一年前の彼等の様子を憶えてゐる。その時私は夫等の軍隊を見たが、思はずそれに見惚れて仕舞つた。彼等の顔には勇氣が溢り、明るい、娛しさうな、同時に、重々しい表情が充ちてゐた。それは血氣の青年であつた、そして通つて行く中隊のあるものを見ると、驚くべき教練と、整然たる歩調と、正確な、嚴肅な整列と、而も未だ私が兵隊には見たことのない、並ならぬ自由と、それ等の勇士の一擧手、一投足に表れる自覺的な決斷力とに見惚れざるを得なかつた。彼等は追はれてゐるのではない、自分から進んでゐることが明かであつた。木で造つた棍棒や笞で擲る士官の臭ひは毫しもなくなかつた。それは我々が彼得堡の時代から我々の軍隊を仕込む爲に、亂暴な士官や棍棒を藉りて來た獨逸人が——その獨逸人がさうなのである。否、是等の獨逸人がさうなのである。否、是等の獨逸人は棍棒を携へずに、一人の人間のやうに、決斷力に溢れ、勝利を確信して進んでゐた。戦争は國民の戦争であつた。兵卒の顔には「公民」が輝いてゐた、實を言へば、その時私は佛蘭西人が心配になつた——依然として私は佛蘭西人が獨逸人を破るだらうと確信してゐたけれども。それから一年の後、彼等の一世紀の間、あらゆる迫害を蒙つてゐた佛蘭西を敗つて後、如何に是等の兵士がドレスデンに這入つて來たか想像することが出来る。而も獨逸人には、何かに成功すると、法外もなく自慢する傾きがある、それは國民性ともいふべきもので、子供乗みでゐる程につまらない自慢心で

あるが、それが獨逸人にあつてはいつも悪辣に變つて行くのである——餘り見上げた國民性ではないが、それがこの民族には驚くべき性質である。この民族は、こんなに些細な事を表明しやうとすれば、他の如何なる民族と比較しても、いくらでも誇ることがある。して見ると、この名譽は彼等に取つて、彼等で豫期しなかつた程に珍らしかつたのである。眞個に、彼等は露西亞人を侮蔑しやうと掛るまでに得意であつたのである。その時分、ドレスデンには澤山の露西亞人がゐた、その多くが後で我々に傳へた所に依ると、誰彼を問はず、つまらない商人でも、何かを買ひにその店に行く露西亞人を捕まへて言葉を交し始めると、「こんな工合に佛蘭西をやつつけた、今度は君たちに掛かるのだ。」と、言はないではなれなかつたさうである。露西亞人に對するかうした悪感、戦時に於ける露西亞の政策を——その政策がなければ、彼等は恐らくかやうな月桂樹を刈り取ることは出来なかつたかも知れないやうな政策を諒解してゐる新聞紙があれ程に説いたにも拘らず、その頃國民の中に自から沸騰したのである。成る程、これは爾く意外な戦勝の最初に起る激情であるが、この激情に於て直ちに露西亞人を想ひ起したところの事實である。この、殆ど無意識に現れた露西亞人に對する激昂は私にさへも驚くべきものに思はれた——縱令私は獨逸人がいつても、又どこでも、莫斯科に於ける獨逸部落の當時から、露西亞人を好まなかつたことは、自分の生涯を通じて推知してゐたところだけでも。

當時ドレスデンに住んでゐた一人の露西亞婦人カア伯爵夫人は市に這入つて來た軍隊の歡迎會の折、公衆に當てられた席に腰掛けてゐたところが、その後ろで得意になつてゐる數名の獨逸人が露西亞を罵倒し始めた。「私は彼等の方を向いて、平民的に彼等を罵つてやりました。」と、彼女は後で語つてゐた。彼等は

黙つた——獨逸人は婦人には禮儀が厚いが、露西亞人に負けてゐないであらう。私自身も、その頃、露西亞の新聞で、彼得堡の獨逸人が、彼得堡で、酔ひどれの群をなして、どこかの酒盛りで露西亞の兵士と喧嘩や口論を企てたといふ記事を讀んだが、それが「愛國の精神」からであるのである。序でだが、獨逸新聞の多數は、この頃、露西亞に多して最も激烈な譏誣を滿載してゐる。「ゴロス」新聞は、露西亞人が、國力を増大して、歐羅巴文明に對抗する爲に、東方とスラヴ民族を略取しやうと欲してゐるといふことを論じてゐる獨逸新聞の亂暴を指摘しながら、その社説に於てこの亂暴なる合唱は、それが三帝王の親善なる會議と會見が濟むと直ぐに、如何にも故意に起つたことに因つて、更に驚くべきことであり、奇怪なことであることを論じてゐる。機微に觸れた警告である。

三、文明の最後の言葉

さうだ、歐羅巴にはどうしても免れ難いやうな事が起り掛けてゐる。東方に關する問題は大きくなつた。滿潮の波のやうに高まつて來た。眞個に、恐らく、一切を捉へて仕舞つて、どんなに熱心な平和論もどんなに立派な思慮も、どんなに固い決心も大勢に抗して、戦争を止めることは出来ないであらう。併し、最も重大なことは、今や既に恐ろしい事實が明かに表現されたこと、その事實が——文明の最後の言葉であることである。この最後の言葉は既に發せられて明かになつた、それはもう解つてゐる、それは十八世紀の全體を通ずる發達の結果である、人類が人間とならうとする全努力の結果である。全歐羅巴は、少く

も、その一流の代表者は、彼の奴隷制度の反対を絶叫し、黒奴の賣買を改廢し、自國にあつては專制政治を倒壊し、人類の權利を宣揚し、科學を創造し、その力を以て世界を驚倒し、藝術とその神聖なる理想を以て人類の精神を鼓舞し、人類の心に、近き將來に於て正義と眞理の到らんことを誓つて、歡喜と信仰とを點火したその國民や民族が皆(殆ど皆)俄かに、この期に及んで、一齊に數百萬の不幸な存在から——基督教徒から、自分の兄弟から、亡びんとしてゐる辱かしめられた人たちから乖いて、彼等を肥蟲類か虱のやうに押潰す時を、遂にこの、歐羅巴に臍を嚙ませ、歐羅巴を脅かす叫喚が、彼等の救ひを求むる絶望の叫喚が緘黙する時を鶴首して待つてゐるのである。如何にも肥蟲類か虱のやうに、或はもつと慘めに、數萬、數十萬の基督教徒は悪性の疥癬として苛まれ、地面から根こそぎに、絶滅されやうとしてゐるのである。死にかゝつてゐる兄弟の眼前で、その姉妹は醜ひ行ひをし、母親の眼前で、その子供を投げ上げ、銃劍を以てそれを受け止めるやうなことをしてゐる。一人々々から凡てを擔ぎ取つてゐるのである。それが野蠻な、非道な、文明の呪はしい敵である回教徒の群に依つて行はれてゐるのである。これは組織的の撲滅である。これは内争や、戦亂の時に、偶然に出現した、併し法律を怖れてゐる。賊徒の群ではない。否、そこには組織がある。これは大きな帝國の戰術である。是等の賊徒は大臣や、國家の爲政者や、回々君主の命令に依つて行動してゐるのである。然るに歐羅巴は、基督教の歐羅巴は、偉大なる文明は……是等の風を潰して仕舞ふ時は何時だらう！」と、焦慮しながら眺めてゐるのである。且、歐羅巴では事實を否定し、議會に於てこれを否認して少しも信じないのである。信じないやうな風をしてゐるのである。是等の國民の指導者は何れも肚の中では、これが眞實であることを承知してゐながら、我勝ちに眼を外らし

合つて『それは眞實ではない、そんなことはなかつた、それは誇張である、それは土耳其人を誣ひる爲に、彼等自らが六萬の勃牙利人に手を下したのだ。』と、言つてゐる。

『閣下、彼女は我と我が身を打擲したのですよ！』フレスタコフ(ゴゴリ作「檢察官の主人公」)の輩がどうした事からだらう、是等の人たちは何を怖れてゐるのだらう、何故に見るのも、聞くのも厭なのだらう、そして我と自らを偽つて、我と自らを辱かしめてゐるのだらう？そこには露西亞があるのです。露西亞は強くなる、そして東方を、君斯坦丁堡を、地中海を、港灣を略し、貿易を握つて仕舞ふだらう。露西亞は夷狄となつて歐羅巴に侵入して、『文明を撲滅するだらう。』——(かやうな狼藉を容してゐる文明を！)……と今英吉利や獨逸では絶叫してゐるのである、そして一人々々に偽つて、自身が是等の非難や杞懼の隻句も信じてゐないのである。之は民衆に憎惡の念を湧かせる爲めの言葉に過ぎない。今歐羅巴には少しでも考へのある、教養のある人間で、露西亞が文明を勦滅しやうと欲してゐるとか、勦滅する力があるとかと信じてゐるやうなもの一人もない。彼等が我々の無慾を信ぜず、又凡ての悪い企らみを我々に着せやうとも、それは解つてゐる、けれど、彼等が爾くいろくの實例や經驗を嘗めた後にもまだ我々が歐羅巴の全體が聯合したものよりも強いことを信ずるやうなことはないだらう。彼等が縱令歐羅巴が君斯坦丁堡を自分の手に約めたとしても、露西亞の二倍も強いなどと思はないのである。けれど、打つて出る段になるとその四倍も弱いと。おゝ、眞實のことは彼等の承知し切つてゐることである、が胡魔化し

てゐるのである。只英吉利には病的に猜み深い、自分の利益には目も鼻もない商人や製造が家あるが爲に、萬人を胡魔化し、我と自らを胡魔化し續けてゐるのである。併し露西亞は自分に最も都合の好い事情があつてさへも、依然として彼等の商業や工業を征服しやうとはしない、それは數世紀の問題であるといふことを彼等は承知し切つてゐる、然るにどこかの商業が少しでも發展したり、どこか少しでも海上に力を伸ばしてもすると彼等は周章し、狼狽し、利害の上から悲觀するのである。これが爲に一切の「文明」がたわいのないものになつて仕舞ふのである。さらば獨逸人にはどうか？その新聞は何に恐愕したのか？それは露西亞が彼等の後ろに在つて彼等の手を縛してゐるから、地球の表面から佛蘭西を掃滅し、永久に佛蘭西との憂へを絶つべき現代の時機を逸したことである。露西亞が邪魔になる、露西亞を國內に追ひ込まなければならぬ、だが他の側に満足な佛蘭西がある以上、どうして追ひ込むことが出来やう？さうだ、露西亞は露西亞であることが既に過つてゐるのだ、露西亞人は露西亞人であることが——即ちスラヴ人であることが過つてゐるのだ、スラヴ民族は歐羅巴の憎まれ者なのだ。The Slav (佛蘭西語、奴隸)、奴隸が——獨逸人の中に澤山にゐる奴隸が反逆を起すに違ひないと言つてゐるのである。かうして十八世紀の歲月を閉じた基督教や、人間にならうとする努力や、科學や進化は弱所に觸れたか觸れないに、無意義なものとなり、小供のお伽噺となり、手ほどきの修身となつて仕舞ふのである。けれど、悲しむべきことは、恐るべきことはこれが『文明の最後の言葉』であり、その言葉が發せられて仕舞ひ、臆面もなく發せられたことになるのである。お、佛蘭西にも、英吉利にさへも、反抗や要請や、虐けられる人類に對する金錢の寄附などとなつて輿論が頭を擡げて來たことを見ても結論を急いではならない、否、それだけ

悲しむべきことである。これは何れも個人的の現象である、それは社會的な、國家的な、民族的な方針に對して彼等がどんなに無力であるかを立證したに過ぎない。疑問を抱いてゐる人は疑惑の中に停まつて、『どこに正義があるのだ、果して世界は正義からこんなに遠いものだらうか？反目の終熄するのはいつだらうか、いつかは人間が一緒に集まる時が來るだらうか、さうとすれば何がこれを妨げてゐるのだらう？いつかは正義が人間の敗徳や破廉恥や利己心を征服する程に強くなる時が來るだらうか？あのやうな辛苦を以て獲得した眞理はどこにあるのだ、人間愛はどこにあるのだ？一體それが眞理であらうか？そしてその眞理は「高尚な」感情に取つての、辯論に取つての、或は兒童を掌中に捉へて置く爲の練習に過ぎなくはなからうか——それで少しでも實際の事柄は、實地の事柄は何れも側の方へ押しやるのである、理想は打つちやつて仕舞ふのである！理想や詩や歌は下らないものである！そして再び猶太人が到る處に跋扈したといふのは眞理であらうか、否單に「再び跋扈した」のみでなく、未だ嘗て跋扈することを止めたことがあらうか？

(附記。この稿は七月中に書いたものである。)

二 章

一、シニツクな理想主義者

有名な教授であり、有名な露西亞人であるチモフエイ・ニコラエウイチ・グラノフスキイが千八百五十五年、それに間違ひがなければ——我々と歐羅巴との戦争が最も耐な、既にセバストポオルの包圍が始まつた時に書いた東方問題に關する論文を憶えてゐますか？私をそれを汽車の中に持ち込んで、今や再び持ち上つた東方問題の参考として読み返した、この名譽ある舊い論文は私に異常な興味を與へた、初めて私がそれを讀んだ時よりも、又それに満腔の賛意を表した時よりも遙かに面白いやうに思はれた。今度は一つの特色ある商量に私は魂を奪はれた、第一に、當時の西歐主義者の民衆に對する見方で、第二に、又主要な點は——論文の心理的意義とも言ふべきものである。私は自分の印象を讀者に分けないではゐられない。グラノフスキイは當時の人たちの中で最も潔白な人であつた、彼は非難の打どこがない、美しいものであつた。最高の意味に於ける四十年代の理想主義者である、そして、無論、彼は或る種の氣風を具へてゐた當時の先覺者の中で抽出したオリジナナルな、特色のある蔭影を持つてゐた。これは吾が最も正直なステパン・トロフイモウイチに屬する人たちの一人である（私が「惡靈」の中に持出した四十年代の理想主義者で、吾が批評家が正しいと言つた型である。私はステパン・トロフイモウイチを愛し、又深く尊敬してゐる）——そして、この型に附きものである滑稽な分子は更にない。けれど、私は論文の心理的意義に魂を奪はれたと言つたが、この考へは非常に面白いやうに思はれた。貴方がたは私の言ふ事に同意するかどうか知らないが、吾が露西亞の理想主義者が——皆が自分を單なる理想主義者に過ぎない、言はば、「立派な事や高尚な事」の「專賣を受けた宣傳者」と目してゐることを承知してゐる、眼のある理想主義者が何かの場合何かの事柄に（「實際の」時事に關する實地の問題で、詩や何かとは趣きを異にした、重大な、眞面目な社

會の問題に於て）自分の意見を發表し、而も好い加減でなく、序でなくて、物事を決定し、斷定するやうな言葉を陳べる爲に、又何れかの影響を齎す爲に自分の意見を披瀝しなければならぬと見て取ると、彼等は俄かに何かの奇蹟のやうに頑固なリアリストになるか、甚だしいのはシニツクに豹變して仕舞ふのである。加之、彼はこのシニズムを誇つてゐるのである。意見を陳べて、殆ど我と自らに舌を鳴らしてゐるのである。理想などは末のことである、理想や詩や歌は下らないものであるとして、その代りに「現實の眞實」のみを追ふが、その現實の眞實が過ぎてシニズムとなる。シニズムの中に現實の眞實を索める、シニズムの中に現實の眞實を期待する、粗暴なれば粗暴な程、眞に迫れば迫る程、冷淡なれば冷淡な程、現實的だと思つてゐるのである。どうしてさうなのか？それはかういふ場合、吾が理想主義者は、必ず自分の理想主義を耻かしいと思ふからである。「ふん、君は理想主義者か、何が實際の事」に當つて解るか、獨りで立派な事を説くがよい、だが「實際」の事を解決することは我々に任して呉れ給へ。」と、言はれるのを恥かしがり、恐れてゐるのである。プウシキンにさへもかういふ氣分があつた。この偉大な詩人は、彼が單に詩人であるといふことを恥かしがつてゐた。恐らく、この氣分は他の民族にもあらうが、併し、どうだか解らない。少くも、我々に於けるやうな程度にあるだらうか？歐羅巴では、萬人や各人が昔から實務に馴れて來たから、人たちの仕事と意義とが永い年月の間に分類された、そして、殆ど各人が自分の仕事と自分の意義に於て——自己を知り、解し、敬つてゐる。然るに露西亞では二百年も實務から遠ざかつてゐるので——いくら異つてゐる。深く内部に潜んでゐる自己に對する蔑視はプウシキンやグラノフスキイのやうな人たちをも逃さなかつた。この清廉な、正義の念に厚い人が、急に歴史の教授から外交家にな

るの必要を認めて、遂に驚くべき事を發表するやうになつた。彼は、例へば、我々が墺地利と洪牙人とが
爭論した時に墺地利を助けて、文字通りにこれを瓦解から救つてやつたから、それに對して墺地利は感謝
するだらうといふことを否定してゐる。これを否定してゐるのは墺地利が「狡猾」だからといふのでもな
く、又我々はそれを豫測すべきであつたからといふのでもない。否、彼は狡猾などは少しも見えてゐない、
で、直ぐに墺地利はほかに取るべき行動がなかつたのだと結論してゐるのである。そればかりでは足りな
いで、墺地利は他の行動を取つてはならなかつたのだ、却つて、彼等が行動した通りに行動しなければな
らなかつたのだ——従つて、我々が彼等の感謝を期待するのは吾が政策の許すべからざる、又笑ふべき過
失を構成するものであると断定してゐる。個人は個人で、國家は國家である、國家には國家の高尙な現在
の目的がある、自らの利益がある、それを自分の利益を犠牲にさせるまでに感謝を要求するとは笑止の沙
汰であると言つてゐるのである。「墺地利の狡猾と恩知らずが露西亞では——とグラノフスキイは言つてゐ
る——一般の通り言葉となつてゐる。けれど、政治上の事で恩知らずとかなんとか言ふのは彼等の無理解
を示すのみである。國家は個人ではない、國家は感謝の爲に自己の利益を犠牲にすることは出来ない、況
や、政治上の事では寛大が無慾であることはいつもない。」(即ちあつてはならないと言ふのであるか？考
へはさうなのである)。要するに、名譽ある理想主義者は餘りに惻巧なことを言ひ過ぎた——而も現實的な
ことを——我々はいつても詩を書いてゐるのではないといふのである……惻巧だといふのはこれが惻巧
なのである。これは眞實だ、それに新しいことではなくて、この世に外交家といふものが存在し始めた時
から生きてゐることであるが、かやうな熱を以て墺地利の行動を辯護するのは、辯護するのではない、彼

等がほかの行動を取つてはならなかつたと立證するのは貴方の由自であるが、それは理智を半分づつに截
斷するやうなものである、そこには吾が歴史家に依つて——立派な事の預言者である詩人に依つて爾く唐
突に、爾く意外に發現された極めて實際的な、政治的な理智が輝いてゐるにも拘らず、どうしても同意の
出来ない、同意するの厭はしいものがある。)このやうに現在の利益の、直接的な、あせつてゐる利得の神聖
を認めるならば、このやうに廉潔と良心に唾することの正當を認めるならば、只一來の毛を撈り取りさへ
すれば——どんなことをしても構はない譯ではないか。それを認めれば、恐らく、高尙な、實際的な國家
の目的としてメツテルニヒの政策をも辯護することが出来るではないか。加之、國民の眞の利益を——従
つて感情、理想などの「シルレル主義」に反對して國民の「高尙な」政策を形造るのは單に實際的な利益
のみであらうか？現在の利得のみであらうか？そこに問題があるではないか。却つて、この利益に反する
やうに見える(實際に於ては、決して反してゐない)廉潔と寛大と正義の政策は偉大な國民に取つて最善の
政策ではなからうか？果して吾が史學者はこの偉大な、正直な思想が(單なる利得や一束の毛ではなく)諸
國の民衆や國民の中に於て、その思想が笑止な程に實際を離れて居り、又外交家やメツテルニヒの輩から
見れば屈辱とも見える理想主義であるにも拘らず、遂には捷利を得るものであつて、又正直と無慾の政策
は嘗に高尙な許りでなく、それが偉大であるだけに、偉大な國民に取つて最も有利な政策であることに氣
づかなかつたのであらうか？眼前の實利を求め、なるべく有利な、なるべく必要なところへ己れを投する
政策は國家の些細なこと、内部の無力なると、悲痛な状態にあることを示すものである。
外交的理智、眼前の實利に終始する理智は常に廉潔や正義よりも低いものであるが、廉潔や正義は遂に

は捷利を勝ち得て来た。

若し勝ち得なかつたとすれば、將來には勝ち得るであらう、何故ならば、人々に永久に易ることなく、かくあらんことを欲してゐるたし、又欲してゐるから。黒奴の賣買が廢止された時、果してこの「廢止」は實際の利益に垂いてゐる、この「廢止」は國民と國家の最も必要な實際の利益を害するといふ、猛烈な攻撃はなかつたらうか？世人は黒奴の賣買を以て道徳上缺くべからざることとさへ言ひふらし、種族の自然的な區別を以てこれを辯解し、黒奴は殆ど人間ではないと斷定してゐた程であつた……ところで英吉利の北亞米利加植民地が英吉利に對して反亂を起した時、實際的な英吉利では、植民地を英吉利の自治權より解放するは英吉利の利益の滅亡であり、動搖であり、不幸であると幾年月を叫び續けたではないか。露西亞で農民を解放した時、この通りの叫びが各所に起らなかつたらうか、「深慮ある、實際的の識者」が國家は先の知れない、恐ろしい、悪い途に進み、社稷の動搖を來したと言ひ、及經驗を以て試験もせられない流行の經濟論や「感覺」などの上には基礎を置かない、現實の利益を擁護する最高の政治はこんなものであつてはならないのだと論じはしなかつたらうか？そんなに遠くへ行くことはない！我々の前にスラヴ問題がある、我々は今スラヴ民族を放棄したらどうだらうといふ問題が起つてゐる！成る程グラノフスキイは、我々はスラヴ民族によつて強くなることを欲し、我々の實際的の爲にのみ行動してゐることを主張してゐるけれども、併し、私の考へでは、彼はそこに誤つたことを言つてゐるのである。さらば、彼等と共にして、縱令將來に於ても、どんな實際的の利益があるか、又何を以て強くなるか？いつかは地中海か、或は「決して我々に寄越しつこのない。」君斯坦丁堡か？それは空を飛んでゐる鶴と同様ではないか、又よし

んばそれを捕へたにした所で、餘計な面倒を儲けるに過ぎない。千年も掛る面倒を儲ける計りだ。これもしも繁榮といふのであるか、これをしも智者の眼識といふのであるか？これをしも本統の實際的の利益といふのであるか？スラヴ民族には厄介と面倒が掛る許りである、彼等が我々のものでない今日に於ては殊にさうである。彼等の事から歐羅巴は既に百年も我々を僻んでゐる、今日では僻んでゐる許りではない、一寸でも我々が蠢くと、直ぐに劍を抜いて、我々に大砲を向ける。永久に歐羅巴を安心させる爲には、永久に彼等を棄てるのが簡單である。だが彼等を棄てるのは簡單に行かない、恐らく、歐羅巴は我々が棄てたのを信じまい、従つて、證據をつけて棄てなければならぬ、我々が自らスラヴ民族に飛び掛つて、土耳其を援助する爲に、兄弟の務めとして彼等を抑壓しなければならぬ……『そら、親愛なる兄弟のスラヴ人等よ、國家は個人ではない、國家は寛大の爲に己れの利益を犠牲にすることは出来ない、それを諸君は知らなかつたのか？』——すれば露西亞は立ちどころに、未來の空想などではない、實際の、現在の、即座の利益をどんなに得られるだらう！直ぐに東方問題は終熄し、歐羅巴は一時なりとも我々に自分の委任狀を返却するであらう、それに因つて吾が軍事豫算は減少し、吾が信用は復興し、吾が留は實價に戻るのである——單にそれ許りであらうか、鶴は決して飛び去りはしない、常にそこらを飛んでゐる許りである！今我々は我慢して、待つてゐるやう、『國家は個人ではない、國家は己れの利益を犠牲にすることは出来ない』——さあ、時を経れば……スラヴ民族に我々がなくては濟まされない運命が與へられてゐるとすれば、時が來れば、彼等が自分から我々に結び着いて來る、その時、我々は再び愛と情とを以て彼等と交りをつなぐ。而も、グラノフスキイはこれを吾が政策に見出してゐるのである。彼は我が政策がこの一世紀間スラ

ヴ民族を壓迫し、『彼等を譴誣し、彼等を土耳其人に渡した』のである。吾がスラヴ政策は常に略取と暴力の政策であつた、而しほかにどうしやうもなかつたのだ、(即ちかういふ政策でなければならなかつたのか？彼はかういふ政策に對して他國人を辯護してゐるのだから、我々をも辯護するに相違ない)と説いてゐるのである。併しさういふ譯なのだらうか、果して、眞個に、スラヴ問題に於ける吾が政策は常にかうであつたらうか、果してそれは今日でも明らかになつてゐないであらうか——といふ問題が起る。

二、理想主義者たることは恥づべきことであるか？

グラノフスキイは自尊心が強かつたのだ、併し、自尊心は、時には激昂したやうにさへなつてゐる自尊心は、仕事に莫いのと、仕事に關する煩悶から仕事を索めることが出来なかつたのとで、當時の吾が才能ある人たちが誰でも持つてゐなければならなかつたやうに思はれる。それが嵩じて、職業を持つてゐる人たち(學者や、文士や、詩人や、大詩人でさへも)は、自分や自分の職業が窮屈であると思つたから許りではなく、殆ど彼等の各々が自分の中に、彼等が現に携つてゐる仕事よりも——彼等の見解に依れば——高尚な、有益な、社會的な、他の仕事の萌芽を豫想する傾きがあつたので自分の仕事を輕視したやうに思はれる。才能ある秀れた先覺者の中にある自尊心の激昂は(勿論或る人たちの)今でも著しい、而も依然として同一の原因からである。(但し、私は才能のある、天稟のある人たちのこと許りを言つてゐるのであつて、自分を天才だと思ひ込んでゐる幾多の凡庸な、空虚な現代の「活動家」の醜い、いやに激昂した意固地と

虚榮心に就ては、この頃著しく眼に觸れる現象ではあるけれども、暫く預つて置くことにする)この仕事に關する煩悶は——今や我々は仕事に近寄る能力を失ひ、且どこに仕事があるか、その仕事はどういふこととであるかを知る能力さへも喪ふまでに及んだ二百年來の無爲から生ずるこの絶えざる仕事の詮索は恐ろしく我々を激昂させるのである。その人物の道德程度から察すると、時として不躰けな意固地が現れる。そしてその人物を笑はざるを得ないやうなことがある。けれど、それはこの高尚な、徳のある人間が自ら自分を、自分の力や意義を決定する力がなく、自己の天分や、實際の仕事の上に於ける自己の眞價を知ることがないからである。これを知つたならば、彼も、思ひ上つた人間のやうに、自分が無能と感じてゐることを自白することが自分に取つて賤しむべきこととは思はないであらうが、今は何事にも屈辱を感じ易くなつてゐる、そして腹立ち紛れに自分の仕事でないものに従事することがよくある。グラノフスキイの論文は繰返して言ふが、非常に精巧に書かれてある、——たとひその後になつて歐羅巴の事實が證明した所の政治的誤謬はあるにしても——又それを指摘することは出来るが、私はその誤謬を語りたのではない、且それを以てグラノフスキイを判斷してゐるのでない。

今度、私を駭かしたのは、論文が非常に激昂してゐることである。おお、私はその激昂を彼の自尊心に歸しはしない、論文の或る傾向を攻撃するのでもない、私はこの文章に反映してゐる「時弊」や、公民の感情や、公民の悲憤はよく理解してゐる。又、如何に正しい人間でも公平を保つことが出来なくなる時がある……(悲しい哉、グラノフスキイは農民の解放まで生存しなかつた、そして、當時、これを自分の空想にも浮べることが出来なかつた)いや、それを私は攻撃してゐるのではない、けれど、何故に彼は「東方

問題」に於てあんなに民衆を蔑視し、これに正當の力を認めなかつたのだらう？彼はこの問題に於ける民衆の參與や民衆の思想を少しも認めやうと欲しなかつた。民衆はスラヴ問題や、當時の戦争に就て如何なる意見も持つてゐなかつた。只納税の苦痛を感じてゐた許りだと彼は主張してゐる。見受ける所、民衆は意見を持つてはならないのだ——グラノフスキイは次のやうに書いてゐる……

『第一に、この戦争が（五十三年、五十四年、五十五年の）神聖の戦争であるといふ觀念を取除かなければならぬ。政府は同宗徒と基督教會の權利を擁護する爲に進んでゐることを民衆に信じしめやうと努めた。正教とスラヴ民族の擁護者は喜んでこの旗幟を掲げた、そして回々教徒に對する十字軍を宣傳した。併し、十字軍の時代は過ぎた。現代は何人も主の棺を擁護する爲に動くものはない。（スラヴ人を擁護する爲にも同じくか？）何人も回々教徒を基督教の永久の敵とは見てゐない、ウイフレエム寺院の鍵は政治的目的を貫徹する爲の口實となるのみである、（他の場所ではこれをスラヴ人にも當倣めてゐる。）勿論、我々はスラヴ問題に於ける露西亞の政策が、この百年來、非難を打つべき點のあつたことに異議を唱へるものではない。時として餘りに控へ目で、餘りに慎重なことがあつた、従つて、氣の早い者から見れば、不誠實に思はれないでもなかつた。或は、現在の利益に就て餘計な恐れをしたり、野心を抱いたり、外交界の氣運に動かされて、生温い手段を取つたり、躊躇したりしたが、その實質に於ては、總體に就て見れば、露西亞の政策が單にスラヴ民族を征服して自分の力と政治上の勢力とを扶植することのみ汲々としてゐたとは言ひ難い。否、勿論、そんなことはなかつた、吾が政策はその實質に於て、吾が歴史の彼得堡時代を通じてすら、スラヴ問題即ち東方問題に於て古代の遺訓や傳説と民衆の觀念から離れてゐたやうなことはな

い。吾が政府も吾が民衆がこの事件に就て政府の招請を耳にする時は、常にこれに應ずることを確知してゐたのである。従つて、東方問題は、その高尚な實質に於て、常に民衆の問題であつたのである。然るに、グラノフスキイは更にこれを認めてゐない。おお、グラノフスキイは深く民衆を愛してゐた。その諸文に於て彼は戦争中に於ける民衆の苦痛と民衆が背負つた重荷に就て悲歎の涙を流してゐる。さうだ、グラノフスキイのやうな人たちが民衆を愛せずならぬやうか？この愛の中に、彼の美しい心は悉く現れてゐる、けれど、それと同時に、單に「被動的な形」に於てのみ、又「田園詩的な隠れた生活」の程度に於てしか民衆の中に麗はしい萌芽を認めることの出来ない——民衆の眞の活動力に就ては——「言はない方がましだ。」といつてゐる——危険な西歐主義者の吾が民衆に對する見解が不知不識に現れてゐる。彼に取つて吾が民衆は、如何なる場合でも、無性な、だんまりなかたまりに過ぎない——而も我々は皆當時殆ど彼の言ふことを信じたのである。それだからこそ私はグラノフスキイを「攻撃」しやうとはしないのである、只時代を非難する許りで、彼を非難しないのである。この論文は、その頃、隨分に讀まれて、勢力を持つてゐた……何よりも私を駭かしたのはこの素晴らしい論文の素晴らしい見解と吾が目下の現況との比較である。否、今なら西歐主義者たるグラノフスキイも驚歎して、恐らく、信じたかも知れない。あの自發的な寄附、正教スラヴ人の爲に盡す民衆の奉公、その社會から衛生隊を送つてゐる同宗徒の奉公振り、組合労働者が最後の給料から、或は全村を擧つてする寄附、最後に、兵士や水兵が給金を割いてする寄附、虐げられた正教の兄弟の爲に戦ひに行く、彼等の爲に血を流しに行くあらゆる階級の露西亞人は——これは既に確固たる意義を有する何ものかである、決して被動的だとは言へるものではない、重視せざるを得ない何

ものかである。運動は確固たる力を持つて来た、それはもう議論の餘地がない。婦人たちは、貴夫人たちは、兄弟たるスラヴ人の爲に義捐金を集める爲に、金箱を持つて街々を歩いてゐる。そこで民衆は感慨に沈みながら、この彼等にとつては全く新しい現象を眺めてゐる、『して見ると、皆が再び一緒に集合してゐるところを見ると、いつでも分離してゐる譯ではない、して見ると、我々は皆この通りの基督教徒なのだ。』——と民衆は感ずるに違ひない、否既に恐らく考へてゐるに違ひない。民衆にも報道が傳はつて来る。新聞の報知を耳にする、又自分も新聞を讀んでゐる。疾うに聞いてゐる、否既に教會に行つて、民衆の爲に命を献けたニコライ・アレクセウイチ・キレエフの冥福を禱つたのである、そして、恐らく、この死と犠牲に就て民衆の歌を作るかも知れない……

たとひその身は斃るとも、

麗はしくして自由なる

燃ゆるが如き魂は

民の心に生くるべし

民に殉せる名譽の死！

さうだ、これは「民に殉せる死」であつた、而も單にスラヴ民族に殉じたのみではない、一般の公事に殉じたのである、正教と露西亞の爲である、民衆は永久にこれを理解するだらう。否、我が民衆は物質主

義者ではない、まだ實利許りを考へてゐる程に魂が腐つてはゐない。彼等は偉大な目的が目前に現れると精神的に喜んで、それを精神の麵麩として探るであらう。果して民衆は、現在この「スラヴ人に關する問題」の發展が戦争となつて我々を脅かし、戦争を焚きつけるやうになるかも知れないといふ事を知つてゐないだらうか、感づいてないだらうか？ さすれば彼等には再び、二十年前の東方戦争の時のやうに、いろ／＼の義務と負擔とが懸つて來るのである。今、彼等を眺めて御覽なさい、彼等は何かを恐れてゐるでせうか？ 否、吾が民衆の中には我る種の民衆「通」が想像してゐるよりも多くの勇氣と活動力が見えてゐる。グラノフスキイはあの見解を他の人たちに譲ればよかつたのである——即ちかやうな「民衆通」や、生涯外國人の眼を以て露西亞の百姓を研究してゐた民衆作家に譲ればよかつたのである。

終りに臨んで繰返すが、吾が理想主義者は、理想主義は毫しも恥づべきことを屢々忘れてゐる。理想主義者にも、現實主義者にも、——彼等が正直で、寛大でありさへすれば、——同一の實質——人類に對する愛——と同一の實體——人間——であるのである、只實體を理解する形式だけが異つてゐるのみである。少しも自分の理想主義を恥づるには及ばない、これは同一の目的に至る同一の道程である。それ故に、理想主義は實質に於て、リアリズムと等しく、現實的である、そして決して世界から消滅するものではない。グラノフスキイの徒は、「立派な事や高尚な事を」宣傳する爲に現れるのを恥づることはない。若しグラノフスキイの徒が耻辱を感じ、アレオバグ（希臘古代の刑事裁判所）の傲慢な、嘲侮を事とする聖人たちを怖れて、メツテルニヒへでも結び着かうものなら、それこそ誰が我々の豫言者となるであらう？ 又理想を持ち、理想を保存することは國民にとつて何よりも貴いことや、或る神聖な思想が、最初聖

人の眼にはどんなに弱く、どんなに非實際的に、理想的に、笑止に見えても、尙初めから宣傳者を信じて、おのが聖人との離反をも怖れずに光明ある事に結び着くアレオバグの會員や「フアマリと呼ぶ女」があることは歴史家たるグラノフスキイが知つてゐなければならぬ筈である。かくて小さな時代には合はない、實際に向かない「笑止な思想」は成長し、増大して遂には世界を征服するだらう、そしてアレオバグの聖人たちは緘黙するだらう。

三、獨逸人と勞働。解せない魔術。奇警に就て。

エムスは當世流の華美な土地である。こゝへは世界ぢうから病人が集つて来るが、重に胸の悪い人たちや「呼吸器加答兒」などをやつてゐる人たちでその温泉で療養してゐる——非常に功能があるらしい。夏は一萬四千から一萬五千までの客があるが、勿論、何れも金持か、或は少くとも、自分の健康を配慮してゐられる人たちである。併し、貧乏人もあつて、茲へ療養をしに歩いて来る。それらは百人足らずである、或は歩いて来るのではなくて、乗つて来るのかも知れない。私は獨逸の鐵道に設けてある——凡ての鐵道にあるのかどうか知らないが——四等の車輛に興味を感じた。或る停車の折、私は車掌に（獨逸の鐵道の車掌は皆非常にキチンとしてゐる許りでなく、乘客に對して注意が行届いてゐて、非常に深切である）四等のいはれを説明して呉れるやうに頼んだ。彼は壁と床がある許りで、更に腰掛といふものがない、空のワゴンを見せて呉れた。乘客は立つてゐなければならぬといふことが解つた。

——床の上に座るのでせうね？

——はあ、勿論、御隨意です。

——席は幾つになつてゐるのですか？

——二十五席です。

このがらんとしたワゴンの大きさを二十五人分に割り當て、見て、乘客はどうしても立つてゐなければならぬ、——而も肩と肩とを擦りつけて、と私は断定した。されば、若し眞個に二十五人——即ち満員になつたならば、如何に「御隨意」であつても、一人として食事をすることは出来ないであらう。勿論、自分の荷物は手に持つてゐなければならぬ。而も、彼等にはいろいろの包がある。

——はあ、その代り茲は丁度三等の半値です、これが貧乏人には大した徳です。

半値なことは、實際、いくらかの値打はある。かくて、エムスへやつて来る是等の「貧乏人」は單に療養が出来る許りでなく、費用を持つて貰へるのである……誰に持つて貰へるか……それは知らない。貴方がエムスへ着いて、ホテルに宿を取つて、（エムスではどの家もホテルである）二日目か三日目になると、二人の寄附金を集める人が帳面を持つて、一人が一人の後について貴方の所へやつて来る——おだやかな、落着いた人たちである……が相當の品格を具へてゐる。その中の一人は是等の貧乏な病人を支持する爲に集めるのである。帳面にはエムスの患者を——是等の貧乏人に同情して呉ろといふエムスの醫者の印刷にした案内が附いてゐる。貴方は出来る丈の寄附をして、貴方の名前を記入する。私は帳面を繰返して見たが寄附金の貧弱なのに駭いた。大抵は一馬克（約五十錢）か半馬克で、三馬克は珍らしい、五馬克となる

と極めて稀である。併し、茲では、公衆は寄附の依頼にそんなに倦きてゐると思はれない。この二人の「蒐集者」より外には、別にそんなことをする人はない。貴方が寄附をして、帳面に名前を記入してゐる時、役人は(以後は役人と呼ぶことにする)部屋の眞中におとなしく立つてゐる。

——季節中に澤山集まりますか?——と私は訊ねた。

——千タレル(一タレルは約一圓五十錢)までです、メイン・ゲル(私の旦那)ですけれども、これでは入用高に較べると莫迦に少ないのです、さういふ人たちは多いのです、百人位はあります、我々は一切を見てやるのです、療養させ、飲ませ、喰はせて居どこを與へてゐるのです。

眞個に少ない。千タレルといふと三千馬克である。客が一萬四千人と見ると、一人前の寄附は幾らづゝになるか?それに、少しも寄附しない、斷つて、蒐集者を追ひ拂ふ者もある。(眞個に追ひ拂ふ者がある、私は後にそれを知つた)。然るに客は立派である、非常に立派である。鑛泉を飲んでゐる時に、音楽をやつてゐるところへでも出て御覽なさい、そしてその群集を御覽なさい。

序でだが、この春に露西亞の新聞で讀んだことだが、露西亞人反旗を翻したスラヴ人の爲に極めて少しゝか寄附しなかつた。(これは、勿論、今日の寄附までも入れて言つたことである)歐羅巴では我々に較べると、遙かに多く寄附した、埃太利の如きは數萬をなしてその領土に逃れて來た奮起者の不幸な家族の維持に數(??)百萬グルデン(一グルデンは八十錢乃至一圓)を寄附した、英吉利でも、佛蘭西でも、伊太利でも我々よりも多く寄附したさうである。

けれど、人は知らないが、私は歐羅巴でこんなに巨大な金額をスラヴ人に寄附したとは信じない。英吉

利に就ては大きな騒ぎだつたが、その寄附金の正確な數字は、まだ誰にも知れてゐないと思ふが、それが解つたら興味あることと思ふ。埃太利に就ても、反亂の初めからボスニヤの一部を手に入れやうと思つてゐたので、(その事は今ではもう外交界の評判になり掛けてゐる)將來の利益を考へて寄附したので、無慾でやつたことではない。その寄附は決して社會的ではなく、單に單に政府の仕事である。併し、「數」百萬グルデンなどは疑はしい。寄附はあつた、否、もつと適切に言へば、金は支出された、併し、その救濟力は實際に大きかつたであらうか、それは將來になつて始めて解ることである。

もう一人の役人即ち恭しく先のに跟着來る寄附金の募集者は「Mädige Kinder」の爲に即ち白痴な子供の爲に集めるのである。それはこの地の宿舎である。この宿舎にさういふ白痴を供給するのはエムスの町が一箇ではない、こんなに小さな町にそんなに澤山の白痴が住むのは聞きよいことではない。この宿舎には官費を支出してゐるが、寄附も仰がなければならぬと見える。立派な紳士や華美な夫人は茲の鑛泉のお蔭で、病が癒えて、健康を取戻す。だが土地に對する感謝の印としてではなく、ほんの紀念に貧しい、棄てられた、薄倖な存在の爲に二三馬克を置いて行く。この寄附金帳にも一馬克、偶には二馬克、恐ろしく稀には十馬克さへも顔を見せる。この役人は一と季節に千五百タレルまでは集める、(けれど、以前の方がよかつたのです、以前にはもつと出して下さいました)と、彼は悲しさうに附加へた。この帳面の中で方針とでもいふべきものを持つてゐる一つの寄附が私の眼についた……五ブフェニツグ(銀で一哥半)。これに就て私は或る露西亞の高等官がビヤチゴルスタ(高架索)でレルモントフの紀念碑の寄附金帳に記入してあつた寄附の事を想ひ起した。彼が銀で一哥を寄附して、自分の名前を署した。今から一年許り前、新聞に

このことが出て来たが、寄附者の名前は發表してなかつた。私の考へから言へば、無駄なことをしたものであると思ふ——彼が自ら自分の名を公けに署したのは、恐らく、名聲に憧れたからであらう。けれど、高等官は、屹度自分の智力、見識、方針を示さうとしたのである、彼は藝術に對し、吾が「リアリズム」や、汽船や鐵道の時代に於ては詩歌の無意義に反抗したである、即ち三流どころの自由主義な（他人の聲から自由主義になつてゐると言つた方が慥かである）有象無象がいつも叛逆を企てることに對して反抗したのである。併し、この、茲の *Bridge* (少し前を参照) は五ブフェニツグで何を言ひ表さうとしたのだらう？ 何に方針を向けやうとするのか、さつぱり解らない。 *Bridge Kinder* ——これは小さな、不幸な存在である、極めて貧して家庭から投げ出されたものである、そこには何しに奇警を弄することがあらう？ 若し爾等が一碗の水たりとも貧しき者に飲ますれば、天國に於て酬はるべし。併し、私は何を迷ふことがあらう。エムスでは一碗の水が、勿論、五ブフェニツグ以上はしないのだ、如何なる場合だつたそんなことはない。従つて、五ブフェニツグで極樂へ行かれる譯である。極樂へ行く費用の *Minimum* (最小限) を計算したのである……『餘計なものを何に與へやう？』……と。時代の子は單純である、けふ日は誰も欺されない。

一昨年、私が最初にエムスへ来た時から、最初の日から私が興味を感じた一つの事柄がある——それが来る度毎に興味を感ぜしめる。エムスで——幾らか異つてゐるが——一般に用ひられる泉が二つある。そ

れはクレンヘンとケツセルブルネンである。鑛泉の上には家が建て、ある、鑛泉は欄干を以て公衆から境をしてある。この欄干の中に數人の娘が立つてゐる、一つの鑛泉に三人づゝ、——何れも愛嬌のある、きれいな身なりをした若い娘たちである。貴方は彼女たちに貴方のコップをやる、彼女たちは直ぐに水を注いで呉れる。朝の服水に當てられた一定の二時間はこの欄干のところに數千の病人が集まる。各々の病人はこの二時間内に幾杯づゝか、自分に吩咐けられてるだけ、二杯づゝとか、三杯づゝとか、四杯づゝとか飲むのである——晩の服水にも同じことである。かうして、三人の娘たちは、この二時間の内に、非常に澤山のコップに水を注いで配るのである。而も、それを整然とやつてゐるのである、少しも間違つかず、落着いて、型のやうに、一度でも貴方を待たせることはない——何よりも驚くべきことは、どの娘でも何か超自然的な商量を具へてゐるやうに思はれることである。貴方は着いてから一回目に、たつた一度彼女に『これが私のコップだ、私にはクレンヘンを何オンスに牛乳何オンス』と、言ひさへすれば、療治の月ちう一度でも間違ふことはない。且、彼女はもう貴方を語で知つてゐる、そして多勢の中でちやんと見分けてゐる。群衆は密集してゐる、幾つかの列になつてゐる、皆コップを差し延べる、彼女は一度に六ツか七ツづゝのコップを取る、それを一度に四分の一の位で注いで仕舞ふ、そして滾しもせず、破しもせず、銘々に誤りなく配る。彼女は自分で貴方にコップを差し出して呉れる、そして千もあるコップの中でこれは貴方のである、これは誰のであるといふことを知つてゐる、又貴方には水が何オンスで、牛乳が何オンスで、何杯飲むやうに吩咐けられてあるかを諳んじてゐる。嘗て少しの間違ひも起らない、私はそれを注視して、態々調べて見た。忘れてならないことは、何千といふ病人があることである。こんなことはあり

ふれたことで、少しも驚くべきことはないかも知れないが、私に取つては——既に三年目になる——殆ど解せないことである。私は未だにこれを何かの解せない魔術のやうに見てゐる。こんな事に驚くのは可笑しく思はれるかも知れないが、私にはこの問題を解決することがどうしても出来ない。見た所、是等の獨逸娘の並ならぬ記憶力と商量の敏速にあると断定すべきであるが、然し、殊によると、單に仕事に馴れ、幼少の頃から仕事を同化して、言はず、勞働を征服してゐる許りなのかも知れない。仕事自體に就て見るも、物ごとに注意を怠らない露西亞人には大きな疑惑がある。一ヶ月ホテルに住んで見て、本來はホテルではない、こゝではどの家でもホテルである。かういふホテルの大部分は、數戸の大きな旅館を除く外は、契約に依つて女中と暗ひとが附いてゐる下宿に過ぎない。私はホテルの女中に驚いて仕舞つた。私のゐたホテルには十二の部屋があつた、みんな塞がつてゐた、或る部屋には家族連れのもあつた。みんなが鈴を鳴らす、みんなが呼びつける。残らずの人に仕へなければならぬ、残らずの人に時々ものを出してやらなければならぬ、一日中には何遍となく階段を上り下りしなければならぬ——それをホテルぢうで、天にも地にもたつた一人の十九になる娘がやるのである。それのみか、主婦は彼女を、やれ午餐の葡萄酒を取りに行けとか、或る客には藥種屋へとか、ほかの客には洗濯屋へとか、主婦は主婦で店へ行けとか、いろ／＼の走り使ひにやる。この寡婦さんの主婦には小さな子供が三人もある、それらの面倒を見、世話をし、朝は學校へやるのに着物を着せてやらなければならぬ。土曜日毎に家ぢうの床を拭き、毎日各部屋を掃除し、どの客にも寢床や卓子の白布を換へてやり、又發つた客のある度に、土曜日を待たずに、その部屋を拭いて、きれいにしなければならぬ。この娘が寝るのは夜の十一時半で、朝は主婦がきつちり

五時に鈴を鳴らして彼女を起こす。私の言ふことは、文字通りにさうなのである。私は少しもおまけを付けてはゐない。その上に、彼女は彼得堡などでは思ひもよらないほどの輕少な給金で働いてゐるのである。而も、きれいな身なりをしてゐなければならぬのである。それなのに、彼女には僻んでゐる風も、苦しがつてゐる風も見えない、愉快で、元氣で、丈夫で、如何にも落着いた、非常に満足な様子をしてゐる。否、露西亞ではこんなにも働くものはない、露西亞ではこんな苦しい仕事をしやうといふ女中は一人もない、どんなに給金を出したつてない。且、こんなに仕事が出来るものはない、百遍も忘れたり、滾したり、持つて来なかつたり、破したり、間違つたり、怒つたり、「不貞腐つたり」するが、こゝでは一ヶ月の間に何事にも不平などは起り得ない。これは驚くべきことだと思ふ——私は、露西亞人として、これが賞むべきことであるか、或はくさすべきことであるかを知らない。だが私はよく考へて見るべきことはあるけれども、思ひ切つて賞めて仕舞ふ。こゝでは各人が自分の境遇をあるがまゝに受容れて、少くとも、多くの者は、見たところ、毫も羨まず、疑はずに、それに安心してゐる。併しながら、勞働は——基礎の据わつた、長い歲月の間に出来上つた、殆ど生れた日から各人に與へられる整頓した方法ややり方を具へてゐる勞働は人々の心を惹きつける。従つて、各人は自分の仕事に近づいて、これを手のものにする事が出来るのである。茲の人たちは誰でも自分の仕事を知つてゐる——たとひ、自分の仕事丈しか知らないのだけれども。かういふのは、茲では女中許りでなく、主人もかうして働いてゐるからである。獨逸の官吏を御覽なさい、例へば郵便局の官吏でもいゝから。そこへ行くと、露西亞の官吏はどうだらう。殊に毎日公衆とかがり合つてゐる官吏と來たら、いつも怒つてゐる、腹を立てゝゐる。時にはこの立腹があらはに出

ないこともあるが、その時は隠れてゐるのである。顔つきを見れば推量が出る。彼等はユピテルのやうな、驕慢なものである。殊にこれが著しいのは細かい小蟲である、例へばいつも腰掛けてゐて、公衆の訊ねごとに答へたり、貴方がたから金を受取つたり、切符や何かを渡したりする人たちの中に見受ける事である。御覽なさい、彼は仕事に忙がしい、『仕事に没頭してゐる。』公衆は寄つて来る、尻尾（露西亞人は如何なる場合にも先を争はないで、自分の番を待つ。後から来たものが順々に尻尾を作る。これは露西亞人の特性の一つで、一種の不文律をなしてゐる。）が出来て仕舞つた、何れも自分の訊ね事や、返事や、受取を貰ひ、切符を取らうと焦つてゐる。然し、彼は貴方に些しの注意も拂はない。辛くで貴方の番が来た、貴方は立つて、物を言ふ——彼は貴方の言ふことを聞いてゐない、彼は貴方を見ない、彼は頭を廻した、そして後ろに腰掛けてゐる官吏と話し掛ける、彼は紙を取つた、そして何かを調べてゐる——少しも調べることなどはないので、貴方は疑つて仕舞つてゐるのにお構ひなく。それでも貴方は待つてゐるすると彼は立ち上つて、あつちへ行つて仕舞ふ。すると、急に時計が鳴る、役所は閉る——退け退け、公衆！獨逸の官吏に較べると、露西亞の官吏は一日の中に仕事に就いてゐる時間は遙かに少ない。亂雑、粗莽、不注意、公衆に對する敵意——それは公衆が公衆であるといふことつ切りから来るのだが、要するにけちなユピテルであるからである。彼には貴方が彼に隷屬してゐることを貴方に見せなければならぬのである——『俺はかういふ風に豪い人間なのだ、君は柵の内では俺に何にもすることは出来ない、俺は君をしたいやうにすることが出来るのだ、怒つて見給へ、僕は番人と呼んで君を引摺り出すまでのことだ。』彼は誰かに耻辱を雪がなければならぬのだ、自分の貧弱なことを貴方に當らなければならぬのだ。こ

のEMSでは、郵便局に普通は二人、多くて三人の官吏がゐる。季節中は（六月、七月）來遊者が幾千と集まつて来る月があるから、どんなに通信があるか、郵便局の仕事がどんなに忙しいか想像が出来る。晝食などの二時間かそこいらを除いては、終日しつきりなしに忙がしい。郵便を受付けて、それを發送しなければならぬ。千人の人が Postersentrale（留置郵便）を訊きに來たり、何かの照會に來たりする。一々手紙の束を調べてやつたり、銘々の言ふことを聞いてやつたり、銘々に調べ事をしてやつたり、説明してやつたり……さういふことを丁寧に、愛想よく、面倒な顔も見せずに——といつて相當の威嚴は失はずにやつてゐるのである。彼は小つほけな小蟲から人間になるので、人間から小蟲に變るのではない……EMSへ着いてから、私は待ち切れないでゐる手紙をいつまでも受取らなかつたので、毎日のやうに Poste restante を調べて貰ひに行つた。或る朝、服水から歸つて來ると、卓子の上に手紙がある。それは着いた許りであつた。私の苗字は覺えたが、どこに住んでゐるかを知らなかつた官吏は、全部の來遊者と、その泊つた所とを記載してある來遊者名簿について態々調べた上、その手紙が Poste restante（留置）になつてゐるにも拘らず、臨時の取扱を以て私に届けて呉れたのである。それは私が前の日に調べに行つた時、私が非常に心配してゐたのを見とめたからである。さあ、我々の官吏のうちで誰がかういふ事をして呉れるだらう？ 獨逸人の勞働と私がそれに就て上に述べたことに關聯して私の頭に泛んだ獨逸人の智腦と獨逸人の商量が鋭いといふことに就ては、世間に幾らか誤聞がある。

未だ嘗て獨逸人を好いたことのない佛蘭西人は常に獨逸人の智腦が鋭いことを認めてゐたし、又認めて決して鈍いとは思つてゐなかつた。彼等は獨逸人の智腦に何事に於ても常に直接な事柄を避ける傾向と、

反對に、何か間接になる事柄に趨り、單一な事柄から二重の事柄を、二節の事柄を造らうとする傾きがあることを認めてゐる。

我々露西亞人には獨逸人の鋭いことや鈍いことに就て、彼等の學問に秀でてゐることは熱烈に崇拜してゐるにも拘らず、常にいろ／＼の噂が行はれた。けれど、獨逸人には餘りに強い、傲慢な程に頑固な我執があると思ふ、或る時には癪に觸る程に駭くべき、従つて時としては飛んでもない判断を蒙るやうな國民性である。但し、日常の生活に於て獨逸人は殊に新たに獨逸に到着した外國人には最初のうち洵に異様な印象を與へるものである。

伯林からエムスへ行く途中、汽車が或る驛で四分間停つた。夜であつた、私は車内に腰掛けてゐるのに疲れたから、一寸でも歩いて、外で巻煙草を喫かしたかつた。凡てのワゴンは睡つてゐた、長い列車の中で、私より外には一人も出た者はなかつた。けれど鈴が鳴つてゐる、すると私はいつもの頓狂からワゴンの番號を忘れて、出ながら、それを閉めたことに氣がついた。多分、幾秒か残つてゐたので、列車の他の端にゐた車掌のとこへ行かうとした、すると誰かと急に或るワゴンの窓から「*Ein*」と言ふのが聞えるので、それが自分のワゴンだと思つた。眞個に、獨逸人は定員が八人宛になつてゐる小さなクベエの中で、旅行中お互に監視し合つてゐる。獨逸人は晝飯や夕飯が出来る大きな驛に停車すると、自分が車内を出ながら、隣に眠つてゐる人を起して、彼が夕飯を寝過ぎたりなどして後で後悔しないやうに氣遣つてやるものである。それで私もこれは眼を覺ました汽車友達の一人が私が席を失つたのを見て、私を呼んでゐるのだと思つた。私は駆け寄つた、すると獨逸人の心配顔が現れた。

— Was suchen Sie? (何を貴方は探してゐるのです?)

— 自分の車室です。貴方と一緒にしたつたかね? これは私の車室でせうか?

— いや、こゝは貴方の車室ではない、貴方はこゝに乗つてはけません。だがどこでせうね貴方の車室は?

— それを失つて仕舞つたのです

— 私も貴方の車室は知りません。

ところが實に最後の一秒と言ふ時になつて辛く現れた車掌が私の車室を教へて呉れた。借問するが、何の爲にその獨逸人は私を呼んで、こんなことを訊ねたのだらう? 併し、少しでも獨逸に住んで見れば、貴方はどの獨逸人もこの通りであり、この通りに振舞ふものであることを合點するでせう。

十年許り前に、私はドレスデンに行つた——そして翌くる日、ホテルを出ると、眞つ直に繪畫展覽場を見に行つた。私は道を訊ねはしなかつた……ドレスデン繪畫展覽場は世界に名高い物であるから、智識階級の者なら、どんな人に訊ねても道を教へて呉れるだらうと思つた。仍て街を通りながら、極めて眞面目な、教養のあるやうな外見を具へた一人の獨逸人を停めて、

— 失禮ですが、こゝの繪畫展覽場はどこでせうか?

— 繪畫展覽場? ——と獨逸人は、思案しながら、立停つた。

— はい。

— 王室繪畫展覽場ですか? (彼は王室といふ言葉に殊に力を入れた。)

— はい。

——私はその展覧場はどこだか知りません。
——けれども、こゝにはもつと何か別の展覧場があるのですか？
——おゝ、いや、どんなのありません。

三 章

一 露西亞語か佛蘭西語か？

獨逸の鱧泉にはどこへ行つても、況してエムスのやうな流行の鱧泉には露西亞人がうよくしてゐる。概して、露西亞人は療養することが好きである。ミュンヘンに近いウンデルフラウの療養所には、鱧泉などはないにも拘らず、その主要な定員は露西亞から得られると言ふ話である。但し、こゝへ行くのはもつと立派な、謂はゞ、豪い方々で、豫め彼得堡から家令を遣つて、まだ冬のうちから、療養の爲に自分の場所を取つて置くのである。さういふ世界の女は人を威嚇するやうな、權幕の強いものである。エムスでは、貴方は言葉つきで直ぐに露西亞人を見分けることが出来ます、即ち唯露西亞に限つて特有な、今では外國人でさへも驚きの眼を睜るやうになつた、あの露西亞佛蘭西の言葉つきで……。私は「やうになつた」と言ふ、が従來これを好いことにして賞めてゐたのである。佛蘭西語の事に就て露西亞人を攻撃するのは恐らく陳腐なことであり、餘りに言ひ古された題目であり、教訓であると言ふだらう。けれど、私が奇怪

に思ふのは露西亞人がお互の間で露西亞語を使はないといふことではなくて（若しも彼等が露西亞語で話をしたとしたら、却つて異様な感じがする位であらう）彼等が巧みに佛蘭西語を語ると思ひ込んでゐることである。誰が我々の頭の中へこんな偏見を叩き込んだのだらう？この偏見は我々が無智であるからこそ保たれてゐるのである。佛蘭西語を語る露西亞人は（即ち智識階級に屬する露西亞人の大部分は）二箇の等級に大別することが出来る、即ち極めて不味く佛蘭西語を話す露西亞人を自分では眞の巴里ッ子のやうに話すと思ひ込んでゐるが、（吾が上流社會が全部）依然として前の等級と同じやうに、極めて不味く話す露西亞人とである。前者に屬する露西亞人は莫迦けた事までもやる。或る時、私は獨りでランヌの岸を夕方の方の散歩に出た折、二人の露西亞人に會つた——中年の男と女とで、何か非常にこみ入つた、心配な、二人に取つて極めて重大な、家庭の事情に就て、如何にも不安な様子で話し合つてゐた。彼等は戦きながら話してゐた、而も佛蘭西語で、極めて不味い、書物にあるやうな、ギョチない文句を使つて、時として、自分の思想を、否思想の蔭影を言ひ現すのに困るものだから、獨りがもどかしがつて相手の言ふことを助けてやつたりしながら、話をしてゐた。彼等はお互に相手の言ふことを助け合つてゐた、けれど、どうしても露西亞語で話をしやうといふことに氣が付かなかつた、却つて、互に諒解が出来ないまでも、唯々佛蘭西風になつてゐるたい爲に、不味く話し合ふことを選んでゐた。私は魂消て仕舞つた、莫迦け切つたことに思はれた。而も、私が生れてからかういふことに遭遇したことは數百度を下らない。多分、そこには選擇といふことや、——私は先に「話し合ふことを選んだ」と、言つたけれども——言語の選り抜きといふことではないので、如何なる言語で話すのが便利であるかといふ問題などは念頭に置かず、單に習癖と風

習から不味い佛蘭西語で話すのである——そこが注意すべき點である。その拙ない、死んだやうな言語の中で聞き苦しいものは、同じくその拙ない、死んだやうな、蕪雜な發音である。後の等級の露西亞佛蘭西語、即ち、上流世界の言語は、又しても第一に發音が異様である、即ち、實際、恰も巴里つ子の様に話してゐるやうだが、決してさうではない——最初の音から贅物が飛び出して来る、第一にこの、發音を無理に作ることや、模造の蕪雜なことや、P(英語のR)の字を強いて濁らせる(上顎で)ことや、最後に、精神上の點で——彼等がかういふ濁音を發音する時に持つ、不躰けな得意や、互ひに隠し切れない、彼得堡の理髮屋にゐるボオイの言語を眞似て互に氣取り合つてゐるやうな、子供染みた自慢となつて現れるのである。やうなボオイ風を得意がることが厭はしい。かういふことは今に始まつたことではないかも知れないが、血氣盛りの生き／＼した人たちが弱々しい、痛々しい言語で、話をしやうとするなぞは、どう見ても驚くべきことである。恐らく、彼等はこの言語の(佛蘭西語とは言はれない、彼等の話してゐる言語の)貧弱なことが解らないで、自分の思想が低級で、淺薄で、貧弱であるものだから、その淺薄な思想を表現する爲に選んだ材料に満足してゐるのである。彼等は、露西亞に生れ、露西亞に育つた以上は、よしんば他國の乳母から佛蘭西語で片言を嗜り、それから世の中で外國教師から實地に習つても、佛蘭西人になり切れるものでない事、又どこの國の人でも同じことだが、露西亞人は眞個の佛蘭西人に生れない以上、生きた佛蘭西語が持つてゐる眞髓を會得することが出来るものではなくて、第一に他人の通語、即ち言葉や、それから恐らく思想に就て理髮師の氣障を取容れるのが關の山であるが故に、まるで佛蘭西とは違つた言語を佛蘭西語と思ひ込んでゐるから、彼等の間に使はれる言語は死んでゐて、生きてゐない、不自然な、

な拵へた言語になり、架空的な、狂人染みた言語になつてゐるのだといふことを辨へることが出来ないのである。これは盗んだ言語である、だから露西亞人の巴里つ子なる者は自分の生涯にこの盗んだ言語で一つでも自分自身の表現や、他人にも使はれて街頭に行はれるやうな言葉を生むことは出来ないのである、而もそれは何れの理髮屋のボオイでも能くすることである。ツルゲニエフは或る小説の中で、かういふ露西亞人の一人が巴里のCafé de paris にはいりながら「Garcou, bellek aux pommes de terre(佛蘭西語。ボオイ、馬鈴薯のついたピフテキ)」と、呶鳴つたが、新式にピフテキを誂へる工合を、既に呑み込んでゐるたほかの露西亞人がやつて来て「Garcou, bellek-pomme(ボオイ・ピフジャガ)」と、呶鳴つたといふ逸話を語つてゐる。舊式に「aux pommes de terre」と、呶鳴つた露西亞人は、自分がそれを知らないで、この新しい言ひ方「Bellek-pomme」——をしなかつたのを悔んで、ボオイたちが侮蔑を以て自分を見はしないかと心配した。この話は、恐らく、作者が實際の出來事から取つたのであらう。言語の形式とボオイたちの意見との前に低頭してゐる露西亞人の巴里つ子は、従つて、佛蘭西の思想にも低頭してゐるのである。かうして、自分で自分の頭に生涯一つも自分の思想を持たないといふ悲しい運命に陥るのである。

さうだ、幼時から、母國語の代りに、他國語を取容れることの害に就ての議論は、無論、笑ふべき、下品な程にナイイヴな、陳腐な題目であるが、この題目に就て自分の言を述べやうとしては不可ない程に言ひ古された題目ではないと私には思はれる、且どんなに陳腐な題目にしても、それに就て何か親しい議論を述べて悪いことはない。勿論、私は新しい議論を主張しやうとするのではない。(そんな柄ではない!) けれど、良心を清める爲にでも、述べて見やうとするのである。私は高貴な社界の母親が私の書くものを

読んで呉れるやうに、どうかして自分の議論をもつと通俗的に扱いたいと思つてゐる。

二、如何なる言語で祖國將來の柱石となるべき者に語るべきか？

私が母親に聞かうとすることは、言語とは何であるか、如何に言語なるものを考へてゐるか、何の爲めに言葉は與へられてゐるものかといふことである。言語は、無論、思想の形式であり、肉體であり、皮膚である。(思想とは何であるかといふ説明は陳べないことにして) 謂はゞ、有機的發達の最後にして、又終結の言葉である。爰から、それを表現する爲に自分に同化する所の材料が、思想の爲の形式が豊富なれば豊富なる程、一生が幸福となり、自分の爲にも、他人の爲にも明晰になり、自分にも、他人にも明瞭になり、力強くなり、勢がよくなる譯である。又言いたいことを、早く自分で言ふやうになる、言ひたかつたことを、自分が深く理解するやうになる、精神が鞏固になり、安靜になる——そして、勿論、聰明になる譯である。再び、母親は、人間は或は電氣のやうな速さを以て思索することが出来るかも知れないが、實際には決してそんな速さで思索するものではなく、口で話すよりは遙かに速いとしても、依然として緩く思索するものであることを知つてゐるだらうか？それは何故か？矢張り、必ずや何れかの言語で思索するからである。實際に、我々は、我々が何れかの言語で思索するといふことを認めないことも出来るが、併し、それはそれまでのことで、若し言葉で思索しないならば、即ち、思索の状態で言葉を發しながらも、依然として、謂はゞ思索するやうに選擇した「言語の自然の力」を以て思索する譯である(かういふ言ひ

方が出来ると思はば)。我々が思索する上に選んだ言語をしなやかに、豊富に、多様に、同化すればする程、それだけその言語で吾々の思想を樂に、多様に、豊富に表現するものであることは明かである。一體、我々は何の爲に歐羅巴の言語を、例へば、佛蘭西語を學んでゐるのか？第一には、單に佛蘭西語を讀む爲で、第二には、佛蘭西人に打つつかつた時に、彼等と話す爲である。けれど、決して自分たちの間で使ふ爲ではなく、我々同志が話し合ふ爲ではない。崇高な生活、深い思想には他國から借りた言語は適しない、それは依然として他國の言語たるに止まるからである。これが爲には、謂はゞ、持つて生れて來た母國語が要るわけである。併し、茲にも故障がある、露西亞人は、少くとも上流の露西亞人は、多くは、ずつと昔から生きた言語を持つて生れて來ないで、人の作つた露西亞語を、後になつて、獲得するのである、殆んど學校で、文法に依つて覺えるのである。勿論、熱心な希望と勉強とさへあれば、死んだ言語を持つて生れて來ても、終には、或る程度までは自分を改育して、生きた露西亞語を覺えることは出来る。私は、更に露西亞語を知らないで、それを學び遂げた許りでなく、露西亞の百姓をさへも研究し盡して、農民の生活から小説を書くやうになつて名前を賣つた、或る露西亞人の作家を知つてゐた。かういふ滑稽は我々のなかに幾度も繰返されたことで、時としては、極めて大きな規模に及んだ。例へば、偉大なブウシキンも、その告白に依れば、自分を改育するの餘儀ない破目に陥つて、言語をも、民衆の精神をも、就中、自分の乳母のアリナ・ロチオノウナについて學んだのである。「言語を學ぶ」といふ言ひ方は、露西亞人の中でも、殊に我々に當て彼まる言葉である、何故なれば、我々上流の階級は民衆から、即ち生きた言語から切離されてゐるから。(言語と民衆とは、露西亞語では、同意語である、この中には非常に深奥な思想がある!) 併

し、既に生きた言語を「學ばなければ」ならなくなつた以上、露西亞語でも、佛蘭西語でも同じことではないかと言ふだらうが、露西亞語は外國の女教師があらうが、周圍の都合が好からうが、露西亞人に取つては依然として容易いものである、この容易さは、時間のある限り、利用しなければならぬものであるといふのはここである。この露西亞語を別に苦心もせず、又學問だけに依らずに（茲に學問といふのは學校の文法だけを指してゐることではないことは勿論である）もつと自然に體得するには子供の時から、アリナ・ロチオノウナの例に倣つて、露西亞人の乳母から取容れなければならぬ、その場合、乳母が子供に三ツの鯨といつたやうな（主よ！さあ、どうして鯨はその人のとこで生涯を暮すだらう！）いろ／＼の偏見を教へることを怖れたり、又は或る識者たちが親たちを戒めてゐる細民や召使を怖れるには及ばない。それから學校に行くやうになると、古代からの——年代記や武勇傳から又教會の斯拉ヴ語から露西亞語の遺物を語記しなければならぬ——語記といふことが時代遅れであるにも拘らず、語記するのである。かうして、母國語を、即ち、我々が出来るだけ、即ち、生氣のあるやうに見えるだけにする言語を體得し、又この言語で思索しなければならぬやうに、自分を仕込んで、それを以て我々は我々が歐羅巴の語學に對する獨特の能力から利益を齎らさうとしてゐるのである。眞個に、出来るだけ完全に最初の材料である所の母國語を會得してこそ、我々は出来るだけ完全に外國語を會得することが出来るのであつて、初めから出来ることではない。さうすれば、我々は外國語から母國語とは縁のない形式を不知不識に取込んで、又不知不識にそれを我々の思想の形式に融合し——以て我々の思想を擴げるやうになる。一つの顯著な事實が存在してゐる——我々は整つてゐない、若い、我が國語で歐羅巴語の精神や思想の深奥な形式を傳へる

ことが出来る。歐羅巴の詩人や思想家は悉く露西亞語で譯すことも、傳へることも出来る、或るものは完全に譯されてゐる。然るに、歐羅巴語には、主として佛蘭西語には露西亞語から、又吾が藝術文學の作品から譯し切れない、又傳へ切れないものが、これまで、随分多い。今では有名になつてゐるが、その頃は駈出しの若い作家に過ぎなかつた、名高い歌ひ女の夫であるウィアドロ氏が四十年代の中頃、彼得堡で或る露西亞人と一緒になつて作つたゴゴリの佛蘭西譯を（今では滅多に見當らないが）憶ひ出すと笑はずにはゐられない。ゴゴリは姿を隠して仕舞つて、誠に變挺なものが出来上つてゐる。プウシキンも多くは譯し切れない。フワクム僧正のやうな小説を譯したら、これも變挺なものが出来上るだらう、否、まるでなつてゐないものが出来るだらうと思ふ。それはどうしてだらう？ 歐羅巴の精神は、多分、我々の精神よりも、完結に、又明確に表現されたに相違ないにも拘らず、我々の精神よりも、もつと獨自に走つて、狷介を極めてをて、そんなに多様でないとは明言することが出来ない。けれど、さういふことが出来ないとすれば、少くとも、我が言語の精神は、無論、多様であり、豊富であり、あらゆる方面に亘つてをり、凡てを包含するものであることを、期待と愉悅とを以て認めざるを得ない。何故ならば、未だに整はない形式を以て、既に歐羅巴思想の實物を傳へることが出来たし、又我々はこの實物は的確に、忠實に傳へられたと感ずるから、かやうな「材料」を我々は自分の子供たちから取上げてゐるのである——何の爲であらう？ それは無論、彼等を不幸にする爲である。我々はこの言葉を侮蔑し、そんなもので高尚な感情や、高尚な思想を表現するのは下品であるとして、野卑な言語と思つてゐるのである。

序でだが、恰度五年前、所謂教育の古典改革が行はれた。數學と拉典、希臘の二古代語は智育にも、徳

育にも、最も啓發するの具と認められた。これは我々が認めたのではない、これは我々が案出したのではない、これは事實である。全歐羅巴は數世紀に亘る經驗を以て贏ち得たが、我々は單に採入れたに過ぎない所の事實である。それは好いとして茲に問題なのは、この偉大な二古代語と數學との教授を異常に獎勵すると共に、我が國では露西亞語の教授が殆ど全く壓迫されたことである。露西亞語が衰微したとすれば、我が兒童はどうして、何を具として、この二古代語の形式を會得するかといふ質問が起る。この二言語の教授の技術許りが（而もチエツタ人の教師が）果してその啓發力を構成するものであらうか？且、生きた言語の熱心な、徹底した教授と並行しなければ、技術の効果は舉るものでない。この二古代語の……幾世紀かの間に、以前には野蠻であつた西洋を最高の程度と文明に持上げた、人類思想の最も完成した、この二形式の徳化力は——凡ての徳化力は、露西亞語の衰微から、従つて、露西亞の新らしい學校を通らずに仕舞ふのである。或は、恐らく、吾が改革者は露西亞語は生れる時から持つて來るものであるから、どこにも（同音^{イニ}と誤り易く、無筆と有筆とを區別する標準とされたもの。新しい綴字法はこれを除く。）を書くべきかの外は、更に學ぶに及ばないことだと考へてゐたのであらうか？ところが、我々社會の上級にある者は疾うの昔に生きた露西亞語を持つて生れては來なくなつてゐるのである。生きた言語は、我々が民衆と結合して仕舞はないうちは、現れるものではない。併し、私は深入りをし過ぎた。私は母親と語りうとしたのに、古典改革と民衆との結合に移つて仕舞つた。

母親には、勿論、こんなことを聴くのは煩はしい。母親は腹を立てて手を振り、冷笑を以て横を向いて仕舞ふだらう。母親には息子が何語で思索しやうと同じことである。佛蘭西語でなら、『それだけ優美で、

賢くて、餘計に興味があるわけです。』と、言つて却つて好い位に思つてゐるのである。けれど、彼女は、之が爲には佛蘭西人に生れ變つて仕舞はなければならないことをさへも知らないのである。外國人の乳母や家庭教師をつけた所でこの幸福が得られるものではない、只々この道程の最初の驛を造るのみである、即ち露西亞人たることを歇めるのみである。おお、母親は、外國人の乳母を聘んでやつたりして、やつと二歳位から自分の子供を、如何なる毒を以て毒してゐるのかを知らないのである。不幸な子供たちの中には十歳になるかならないうらに始まつて、監督が足りない、青年の時から白痴や、いぢけた老人に生れ變らせるやうな恐るべき、肉體上の習癖があることは、どの母親でも、父親でも知つてゐる。卒直に言へば、外國人の乳母、即ち幼時からの、初めて片言を言ふ頃からの佛蘭西語は、精神上の意味に於て、肉體上の意味に於けるこの恐るべき習癖と同じことである。子供が生れながらに愚鈍であるか、柔順な低能兒であれば、まだ好い。それなら、彼は佛蘭西語でも、淺薄な思想や理髮屋位の知識を以て巫座戯ながら、一生を過ごすし、自分が生涯馬鹿であつたことには氣がつかずに死んで行くのである。けれど、若しこれが才能を有つた人間であり、頭に思想を有ち、胸に寛仁の衝動を有つた人間であるならば——果して幸福であり得るだらうか？自分の思想と自分の精神的要求の全部を組立てるに用ふべき材料を有たずに、生涯、死んだ、弱い、盗んで來た言語を有つてゐる許りで、自分の爲には開展しない、教はつた、力のない、そして粗雑な形式を持ち扱つて、彼は自己と自分の心との表現に、不斷に智的努力と精神上の勞苦を費して、永久に疲れて仕舞ふのである。（嗚呼、これが生氣のない、不自然な言語であることが、そんなに解り難いのだらうか！）彼も遂には、彼の思想が淺薄で、重味がなくて、シニツタなことに——自分の生涯を

吸込んで仕舞つた、下らない、つまらない形式に因つて自分が淺薄になるからシニツクなのである——自分でも氣が付くのである、仕舞ひには、自分の心で邪になつてゐることに氣が付くのである。墮落は憂鬱からも来る。おゝ、勿論、彼の出世には障りはない。生れながらに外國人の乳母が附いてゐるやうな人たちは自分たちの母親に依つて祖國の來るべき支柱に擬せられてゐる。そして彼等がなければ世が立たないやうに思ふ權利を有つてゐるのである。彼は立身し、命令を下し、そして「追ひこくる」のである。色々の制度を設けて、事を處理する力量があるやうになるのである——要するに、荐りと已れに満足するやうになるのである、殊に他國の思想と他國の言辭とを以て長い演説をする時には——而も、その中には、*plus de noblesse, que de sincerité* (佛蘭西語。天真よりも上品)があるのである。併しながら、彼が少しでも人間ならば、全體として不幸である。悪い習癖から年に似合はぬ消耗に悩む若い老人と同様に彼は何となく無力を感じて、常に懊惱するであらう。噫、されど、かういふ禍が佛蘭西語から、外國人の乳母から起るものであるといふ、私の言葉をどこの母親が信じやう、私の言ふことは誇張だと言ふ母親は一人や二人ではないだらうと思ふ、けれど、嚴密な意味で、私は些かの誇張もない眞實を語つてゐるのである。却つて、他國語で生活する方が好い、それだけ楽しい、氣輕に、愉快に世渡りが出来る、人生のかやうな問題や要求は避くべきものである。それを助けて呉れるのが佛蘭西語としてではなく、母國語の代りに會得した他國語としての佛蘭西語であると反駁するであらう。どうしてだらう？この若い、立派な人間が、この俱樂部の持つてゐるが、この警句家が不幸だとは？あのやうに装ひ、あのやうに梳り、あのやうに健かで、あのやうに華かな貴族らしい顔、あのやうに美しい薔薇を胸に飾してゐる彼が？母親は得意げな笑を

洩らしてゐる。然るに、それできなくとも(佛蘭西風の教育がなくとも)立派な智識ある露西亞人は、今でさへもう、その多くが、智的勞働者と選ぶ所なく、足もとに地がない、地盤も主義もない、歐羅巴の風のままに運ばれる、國際的の混成物に過ぎなくなつて仕舞つた。この、外國人の乳母や家庭教師の手を経た者は、よく行つて、何事かを思索し、何事かを感じるやうな者になつたとしても、その實、若干の佛蘭西語で書いた書物を呑み込んだ、生活の保障又は確實な若者に止まつて、その頭は永久の間をさ迷ひ、彼は祖國の柱石となるのだが、彼には荷が過ぎてゐるだらう、けれど、母親には満足なのである、只親にだけである！……

四 章

一、鑛泉では何が效くか、鑛泉だらうか、それとも好い行儀だらうか？

私はエムスの土地柄は書かない。それに、露西亞で詳細な記述が出来てゐる。例へば、ギルシゴルン博士の「エムスとその療養泉」といふ書物が彼街で發行されてゐる。それを見れば、鑛泉の醫學士から見た報告を初め、ホテルの生活や、衛生や、散歩や、エムスの位置や住民の事までも、一切が解るやうに書いてある。私にはそんなことは書けないが、既に家に歸つて來てゐる今、私に書いて見ると言ふならば、第一に想ひ出すのは鮮かな太陽と、エムスが横はつてゐるタウヌスの繪のやうな谿谷と、諸國から來てゐる

る澤山の、美々しい人たちの群と——この人たちの中に於ける私の深い、極めて深い寂寥である。併し、寂寥にも拘らず、私は、勿論、變な工合にはないが、かういふ群衆を愛する、その群衆の中に私一人の知つてゐる露西亞人を見出した、それが嘗て私との議論で戦争を主張し、戦争の中に、現代の社會には見出だせないやうな眞實と眞理とを見出した、あの僻論家である(四月號參照)。この男が極めて穩かな、文人肌の人間であることは、既に説明した。我々露西亞人は、否、我々彼得堡人は我々の親友を忘れる譯ではないが(彼得堡人が何事かを、或は何人かを忘れるやうなことがあるだらうか)誰とでも會ふと直ぐに事を共にするの、時には幾年も會はずにても平氣でゐるやうに自分の生活を作り上げて仕舞つたことは誰でも知つてゐることである。私の友人もエムスで何か飲んでゐた。彼の年は四十五六か、或はもつと少ないかだらう。

——君の言ふことはほんとだ——と彼は私に言つた——この人たちは好ましい、而もどこが好ましいのだから知らない。それにどこでも上流の綺羅美やかな人たちは人が好くものである。かういふ社會の誰ともつき合はないでもいい、けれど、一般に、今のところでは、もつと好いものは世の中に何にもありはしない。

——もう、止し給へ……

——僕は君と議論してゐるのではない、議論してゐるのではない——彼は直ぐに納得した——地上にもつと好い社會が到來して、人間が、謂はゞ、もつと賢く生きるやうになる時は、我々はこの、今の社會を眺めるのも厭にならうし、又口に出すのも厭にならう、世界中の歴史も中身は簡單だ。併し、現在に於て、

君は今の社會の代りに、もつと好い社會を想像することが出来るか？

——果してこの氣樂な衣食に困らない人たちの群よりも、かうして鑛泉にでもぶらぶらしてゐなければ、何をすべきか、どうして一日を送るべきかを知らないやうな人たちの群よりも好いものを、今でも想像することは出来ないだらうか。個々としての好い人物……この群衆にも見出だされやうが、全體としては全體としては些しも賞むべきところなく、些しも注意すべき價値のないものである。

——君は深刻な嫌惡家として言つてゐるのか、或は單なる流行からさう言ふのか？君は『何をすべきか、どうして一日を送るべきかを知らないやうな』と、言ふが……彼等は夫れ／＼に自分の仕事があるのだ、いや、それが爲には單に一日ではない、自分の一生を費したやうな仕事があるのだ。人生から極樂を作り得ないのは彼等の何人にも罪はない、それ故に苦しんでゐるのである。是等の苦惱者がここで笑つてゐるのを眺めるのが僕には愉快でならない。

——お體裁から笑ふのぢやないかね？

——彼等を惱まして、恐らくは、極樂ごつこの仲間入りをさせてゐる習慣から笑つてゐるのだとも謂へるだらう。彼は極樂を信じない、彼は専心になつて、この遊戯をやつてゐる、けれど、依然として遊戯をして、憂さ晴らしをやつてゐるのである。習慣といふものは英迦に力なるものである。此處には、この習慣を眞面目な事に思ひ込んでゐる者がゐる——彼等に取つてはその方が好いのである。屹度、彼等は既に現存の極樂にゐるのであらう。君が彼等を愛するとすれば(君は愛さなければならぬが)——彼等には、假令蜃氣樓の中であるとも、休息し、氣を紛らす可能があることを喜ぶべきである。——君は嗤つてゐる

のか？何故に僕は彼等を受さなければならぬのだ？

——これは人類ではないか、他のものはならないではないか、どうして人類が愛せないのだ。この十ヶ年が程は、人類を受さなくてはならないやうになつてゐるではないか。此處に非常に人類を愛してゐる露西亞の婦人がゐる。僕は少しも嗤つてゐるのではない。それに、この題目を續けるのは面倒だから、僕は直ぐに結論を加へるが、行儀の好い社會といふものは、そこらの綺麗美やかな群衆のやうなものは、或る種の肯定すべき權威を具へてゐるものである。例へば、綺麗美やかな社會は、よしんば滑稽に見えても、他の孰れの社會、例へば、その多くは、どこへ行つても、まるで不自然な生活を營んでゐる農民などよりも、遙かに多く自然と接觸してゐる所が、既に好いのである。僕はもう工場や、軍隊や、學校や、大學などのことは言はない、是等は何れも不自然を超越してゐる。是等は最も自由である、何故ならば、最も裕福であるから。従つて、少くとも、生きたいやうに生きられる。勿論、彼等は體裁と行儀とが許す範圍でのみ、自然と接觸してゐる。自然に面接して、我々罪あるものを紺青の空から、選り嫌ひなく照らして呉れる、この、黄金のやうな、太陽の光線に面接して身を寛げ、心を開放す——我々はそんなことをして善いものであるか否か。勿論、今我々兩人や或る詩人などが欲する程度では醜い。立派な行儀の、小さな鋼鐵の鏡前は依然として誰の心にも、誰の頭にも懸つてゐる。さりながら、立派な行儀が我々の世紀から現代を通じて自然と接觸の道を、たとひ僅かなりとも、進んだことには異議を挟むことは出来ない。僕が熟と觀する所、我々の世紀には先へ進めば進む程、自然との接觸はあらゆる進歩、科學、考察、健全な知識、趣味、勝れた能力の最後の言葉であることを解するやうになり、得心するやうになると結論するに躊躇し

ない。この群衆の中にはいつて、よく觀察して見給へ、彼等の顔には喜悅と愉快とが表れてゐるから、みんなが集り合つてゐる工合が如何にも淑かだ、莫迦に慇懃だ、みんな親切だ、みんな暢氣だ。あの群衆の中にはいつて、親しく觀察して見給へ、みんなの顔には喜悅と愉快とが表れてゐる。この、襟に薔薇を翳してゐる。瀟洒な若者の幸福はこの、五十になる、肥つた夫人を喜ばせることにあるのだ。實際には、何が彼を彼女の周圍にあつて心を勞させるのであるか？果して彼は眞心から彼女に幸福と愉快とを望んでゐるだらうか？そんなことはありつことがない？彼を勞させるのは、何か特別の、君や僕には用のない、餘りに個人的な理由かも知れない。併し、肝要なことは、別に個人的な理由などはなくて、只々立派な行儀丈けが彼を駈つてさうさせるのかも知れないといふことだ。これは非常に重大な結論である。これは、現代に於て、立派な行儀といふものがどの位まで或る若者の、或る粗野な天性すらも制御することが出来るものであるかを示すものである。詩は多くのバイロンを出してゐる、併し、コルサロフや、ガロリドフや、ラルなどは——まだ彼等の出現した時から間もないのに、是等の人物は立派な行儀の爲に悉く廢却され、最も悪い社會と認められ、吾がベチヨリン或はカフカスキイ・ブレンニツクは尙更酷い。是等は悪い行儀の間であつた。ほんの一つ時しか成功しない、彼得堡の官吏である。何故に廢却されたのであるか？何故なれば、是等の人物は眞から兇惡で、短慮で、大びらに自分のことばかりを計るから、随つて、誰でも萬人の爲に生き、萬人は個人の爲に生きてゐるやうな風を裝はなければならぬ、立派な行儀の調和を破るからである。見給へ、そこに花を持つて行く、これは婦人にやる花束である、襟にささせる爲に舞踏の相手にやる薔薇である。この薔薇がどんなに作られてゐるか、どんなに取合せてゐるか、どんなに霧を吹い

てあるかを見給へ！野良娘のは自分の愛する若者の爲に些しも身なりを整へるやうなことはしない。然るに、この薔薇は一つを五哥か六哥で賣りに持つて来たものである。そして、野良の娘は毫しも觸れなかつたものである。黄金時代はまだ、先のことで今は産業が盛である。併し、君にとつては同じことではないか、彼等は生れる、彼等は美しい、そして眞個に極樂のやうなものが出来てゐる。それに、「極樂」も「極樂のやうなもの」も同じことではなからうか？併し、どれ丈の趣味と、如何なる正しい思想があるかを吟味して見給へ。さあ、花を措いて、何が水を飲み、即ち全快する期待に向つて、健康に向つて走らせるのだらう？花——これは期待である。この思想にどれ丈の趣味があるだらう？『何を着るかに心を勞する勿れ、野の花を見よ、ソロモンも名を成したるの日、彼等の如く、況んや神の爾等に着せ給ふ如く美しくは装はざりき』と、いふ言葉を想ひ起して見給へ。正確には覚えてゐないが、何といふ立派な言葉だらう！この言葉には人生の詩が漲つてゐる、自然の眞實が溢れてゐる。けれど、今に自然の眞實が到来する、そして人々が心の眞率と愉悅の中に誠實なる人間の愛の花を以てお互を祝ひ合ふだらう——それを今では愛のない五哥で賣買してゐるのである。併し、くだいやうだが、君にとつては同じことではなからうか？僕に言はせれば、却つて都合が好い位である、何故といふにだ、或る愛からは逃げるやうにしてゐるぢやないか、それは餘りに多くの感謝を要求するからだ、こゝには一哥出せば、それで貸借が済んだ譯なのだ。それでも、眞個に黄金時代に類似したものが出来てゐる——それで、君が想像を持つてゐる人間ならば、君には満足ではないか。否、現代の富は、他人に關したことで、獎勵されることが出来るのである。その富は、この人類の残りの群衆がいつになつても僕に與へない贅澤と立派な行儀とを與へるだらう。此處

に僕は僕を愉快にさせて呉れる、華麗な景色を持つてゐる。人たちはいつも愉快に金を拂つてゐるのだ。愉快と喜悅とはいつても何よりも値段が高かつた。所が、僕のやうな、無一物の人間は、舌を鳴らす丈で、何にも拂はずに、普通の喜悅に參與することが出来るのだ。見給へ、音楽が響いてゐる、人たちが笑つてゐる、婦人達は、ソロモンの時代には誰も着なかつたやうな着物を着てゐる、こんなものは盛氣樓に過ぎないけれども、君にも僕にも愉快ではないか、それから、果して、僕は良心から潔白な人間であらうか？（僕は自分丈けのことを言つてゐるのだ）——併し、鑛泉のお蔭で、かうして僕は、謂はゞ最も上流の人たちと一緒にゐられるのだ。そして、今君は食ほるやうにして君の不味い獨逸珈琲を飲みに行くではないか！僕が好い社會の肯定すべき方面と名づけるのはこれである。

——それは君が嗤つてゐるのだ、而も極めて新しくない説だ。

——嗤つてゐるが、併し、鑛泉を飲みに此處へ来た時から君の食慾は良くなつたかね？

——おお、勿論、非常に良くなつた。

——して見ると、立派な行儀の肯定すべき方面は胃にも利く程に強い譯だね？

——御手柔かに願ひます、これは鑛泉の效で、立派な行儀の效ではない。

——いや、疑ひもなく立派な行儀の效だ。それだから、鑛泉では鑛泉と立派な行儀と、どつちが利くか？未だに不明である。此の地の醫者たちでさへも何れが勝れてゐるとすべきか、疑つてゐる。而も概して、我々の世紀に於て、醫學は如何に大なる進歩をしたか、言語に盡し難い、前は葉劑があつた許りなのに、今では醫學に思想さへも生れて来た。

二、現代の女によつて心根の美しくなつた男の一人

勿論、私はこの、舊式な人間との會話を残らず記述しやうとするのではない。但し、私は彼に取つて最も探つたい題目は女であることを見抜いてゐた。乃で、或る時、彼と女の話をした。彼は私が非常によく見てゐるといつた。

——僕は英吉利の女を注視してゐる、それも特別の目的があつてである。僕は此處へ來る途で見やうと思つてグラノフスキイの東方問題に關する本と、女に關する本とを持つて來た。女に關する本には立派な、圓熟した思想がある。けれど、一つの文句が僕の腑に落ちない所があつた——著者は意外にも次のやうなことを書いてゐる……

併し、英吉利の女がどんなものであるかは世界ぢうに知れ渡つてゐる。これは女性美と女性の品性との非常に高い型である。この型とは我が露西亞の女は較べものにならない……

どうしてか？僕はこの説に同意が出来ない。果して英吉利の女は、我が露西亞の女に較べて、そんなに高い型を構成してゐるか？僕はどうしてもこの説に同意が出来ない。

——本の著者は誰だね？

——僕は本の中で賞むべきところを賞めないのだから、自分が同意の出来ない、著者の唯一の文句を抽出したからとて、その名前は黙つてゐることにする。

——屹度、著者は獨身者で、まだ露西亞の女といふものの性質を知り盡さないのだらう。

——君の言ふことは悪罵からだ、露西亞の女の性質に就て眞實の言である。それに、露西亞人には自國の女を辭退するなんて譯に行かない。露西亞の女はどこがほかの女よりも低いのか？僕はタチャナを初め

——詩人たちの間に凝結した理想は——ツルゲニエフやレオ・トルストイの性は——一度藝術に於てかやうな美の理想が權化した上は、それはどこから取つたもので、無から作つたものではないが故に、一つの大きな證據であるが——それを舉げやうとはしない。随つて、かういふ女性性は現實の中にあるのである。又十二月黨デカブリストに屬する女や、ほかにも有名になつた幾千の例も語らない。露西亞の現實を知つてゐる我々が幾千の女に就て知らず、又、時には慘澹なる場所、暗い、恐ろしいあばら屋や路次で、邪惡と恐怖の中で行はれる人に知れない、誰にも見られない、彼女たちの數限りない義舉を知らずにどうしやう。要するに、僕は露西亞の女が歐羅巴の女性の間に高い位置を持つ權利を擁護しやうとはしない。けれど、只一言して置きたいことは、何れの男も自分の國民と民族の中で女を索め、女を愛さなければならぬといふ自然の法律が諸國民と諸民族の中に存在してゐる筈であると僕には思はれるが、間違つてゐるだらうかといふことである。若しも男が他國の女を自國の女の上に置くやうになり、主として他國の女にうつゝを抜かすやうになれば、その時その國民の解體とその民族の動搖が到來するのである。ほんとに、露西亞にはこの百年、即ち我々の國民との分裂に比例して、これに似た傾向が現れて來た。我々は波瀾の女や、佛蘭西

の女や、獨逸の女にうつゝを摸かして來た。それが今では英吉利の女を自國の女の上に置きたがつてゐる者があるのである。この兆候には何にも慰むべきものがないと思ふ。こゝには二つの點がある、民族との精神的分離か、或は單に閨門趣味かである。自國の女の許へ戻らなければ不可ない、自國の女を學ばなければ不可ない、若しも我々が彼女を理解することを忘れてゐたとすれば……

——僕はさういふ自然か民族かの法律が存在してゐるかどうか知らないけれども、凡てに於て快く君の説に同意を表するものである。併し、失禮な質問だが、何故に僕は著書が獨身者として、恐らく、露西亞の女の高尙な性質を知悉する機会を持たなかつたといふことを毒意を以てかの如くに言つたと思つたのか？そこには、僕自身が——僕は斷言することが出来る——露西亞の女によつて心根が善くなつたといふ一事に依つても、僕に言はせれば、微塵の毒意もないのだ。それに、僕がどんな男でも、君の眼にどんな男に見えても、僕自身も或る時は露西亞の女の婿だつたこともあるのだ。その娘は世間の位置から言へば僕よりも高かつた、彼女は多くの求縁者に取捲かれてゐたから、いくらでも選り出すことが出来たのだ、そして彼女は……

——それで君を選んだと言ふのかね？悪く取らないでね、僕は知らなかつた……

——いや、彼女は選ばなかつた、即ち僕を廢却した譯だ。だがそこに因縁があつたのだ！僕は打開けて言ふが、僕が婿にならないうちは、何にも文句はなかつた、僕はこの女御を殆ど毎日のやうに見ることが出来たことだけでも幸福だつた。序でだから、敢へて斷つて置くが、僕は、恐らく、全く悪い印象を與へしなかつたのだ。この娘は自分の家では何でも自由であつたことをも附け加へて置く。そこで、或る時、誠

に不思議な、何とも名狀の出来ない瞬間(かう言ふことが出来る)彼女は唐突に僕に約束するのだ——その時、僕にどんな事が起つたか、君も信じないだらう。そんなことは、勿論、我々の間には秘密であつた。けれど、僕が驚亂して、自分の宿へ歸つて來ると、俺はあのやうに光輝ある存在の所有者となり、配偶となるのだといふ考へが、分銅のやうに、矢鱈に僕を壓へつけた。僕は自分の家具に、凡ての見窄らしい、とはいへ、僕に取つては極めて必要な、自分の品物に眼を迂らした——所が僕は自分や、自分の地位や、自分の姿や、自分の髪の毛や、自分の品物や、自分の智慧や心の惨めなことが耻かしくて耻しくて堪らなくなつて、僕のやうな人間の糟があつたやうな、自分に釣合はない實を領有するのかと考へると、自分の運命を呪はずにはゐられないやうな氣がした。かういふことを君に言ふのは、結婚眞理の或る、可なりな解つてゐない方面——或は、婿となつた男の中でも感ずる者は極めて罕な感情と言つた方が好いかも知れない——即ち結婚するには、最も馬鹿らしい負惜しみを——眞個に、最も馬鹿らしい、最も鼻持のならない傲慢を多量に持たなければならぬといふことを言はんが爲である——そして、それが、デリケートな人間にはどうしてもできないやうな、嘔飯すべき態度に於てだ。されば、例へば一瞬時でも、かやうな貴族の娘といやうな存在と、かやうに優美な完成物と、教育から、髪の工合から、瓦斯の衣裝から、踊りから、清淨なことから始めて素朴ではあるが、それと同時に上品な理智と感情の美とをどうして自分と比較しやう？そして、それが僕の宿に這入つて來るのだと思はれやうか、僕は寢間着の儘であるかも知れない——君は可笑しいだらう？だが、これは怖ろしい考へだ！まだ問題がある——若しも君がかやうな完成物を怖れて、自分がそれに釣合はない者だと感ずるならば、醜女を貰ひ給へ(兎も角も、不道德な醜女を)と君に

言ふだらう。さうしたらどうだね、誰だつて腹を立てて承知しないし、又少しも譲るまいとするにきまつてゐる。要するに、僕は君に詳細を述べはしない、どこでもかうしたものだ。例へば、僕が絶望して力なく長椅子に横はると断つて置くが、糶賣で買った、パネの折れてゐる、世界中に又とない、やくざな長椅子だ。僕を、分けても、情ない考へが訪れた——『俺は結婚するはいいが、結局、今のやうに檻はなからぬのだ——紙つ片でペンでも拭ふのか。』とね。さあ、かういふ判断よりもありふれたものがあるだらうか？この判断にはどんなに恐ろしいことが含まれてゐるだらうか？この商量は、必ずや、唐突に、偶然に閃いたのだ。それは君が自分にも解るべき筈だ。何故ならば、人間の心には、その心が断頭臺に牽いて行かれるやうな時でさへ、どんな考へが閃くものであるか解らないからね。僕がかう考へたのは、多分、自分が鐵ペンを拭はないで置くことが神経の發作が起るほどに嫌ひだからかも知れない。だが、世間では誰でもそれをやつてゐる。それで、どうしたか？僕は、その瞬間、この考へを起した自分を詰責した。事件や對象がこんなに大きいから、ペンを拭く檻に就て妄想したりして、こんなに低い、ありふれた考への爲に時と場所を探すなど、——『そんなことをして手前は何の値打があるのだ？』とね。つまり、僕の生涯は僕のあらゆる考へと僕のあらゆる行ひと對して我と自らを責める中に過ぎて行くのだと感じたのだ。それから、數日後、彼女が顔に笑ひを泛べながら、彼女は鳥渡車座けて見たので、或る高官に嫁ぐのだと僕に聲明した時はどんなだつたらう、僕は、僕は……だが併し、僕はその場であまりの悲しさに、彼女自身すら驚愕して水のはいつたコップを取りに駆け出した程の驚愕と落膽を表示した。僕は心を取直した、けれど、僕の驚愕は僕に取つては益になつた、即ち、彼女は僕が彼女をどんなに愛してゐたか、そ

れから……どんなに評價してゐたか、どんなに高く評價してゐたかを諒解した……『妾は——と彼女は、その後、既に人妻となつてから僕に言つた——貴方は大變に見識の高い學者だから、妾を恐ろしく侮蔑するだらうと思つてましたの。その時から、僕は彼女の中に友を持つてゐる。茲に繰り返して言ふが、嘗て女によつて、或は露西亞の女によつてと言つた方がいい。心根を正しくされた者は……それは、勿論、僕であるが、僕はこれを決して忘れない。

——だから君はその夫人の友となつたといふのかね？

——さうだ、大いにさうだ、併し、二人が會ふことは罕だ、一年毎に罕になる。露西亞の友だちは、普通、五年に一度位しか會はない。それより多くなると大抵の者には我慢が出来ないのだ。初め、僕は、彼女の夫の地位は僕よりも高いので、彼等を訪ねることはしなかつた。所が今では、今では、彼女は、僕には辛くて見ることが出来ない程、不幸になつてゐる。第一、彼女の夫は六十二歳の老人で、結婚してから一年後に、裁判に掛からせなすつた。彼は官金の不足を補ふ爲に殆どありつただけの財産を投げ出さなければならなかつた、裁判中に兩足を失つて、今でも、僕が十日許り前に二人を見かけたクレイナツフでは安樂椅子で運ばれてゐる。安樂椅子を運ぶ時、彼女はいつも右側に附いて歩く、それを以て現代の女の高い義務を果たしてゐるのだ——年が年中、彼の毒々しい叱言を聞きながらだからね。僕は彼女を見るのが辛くてならなくなつたので、いや彼女許りではない彼等を、何故ならば、未だにどつちが餘計に可哀さうだか解らないから——直ぐに彼等を置いて、自分は此處へ歸つて来て仕舞つた。僕は彼女の姓を君に言はなくてよかつた。かて、加へて、その短かい間に、幸福と露西亞女の義務とに對する僕の見解を明らかに

彼女に傳へて、不幸にも彼女を怒らせて仕舞ふやうなことをしたからね。

——君はそれよりも都合のいゝ場合を探すことは出来なかつたに違ひない。

——君は批評してゐるのか？けれど、誰がこんなことを彼女に言ふものがあらう？僕にはいつも、最大の幸福とは、せめて、何故に不幸であるかを知ることであることのやうに思はれたのだ。言ひ出したことから御免を蒙るが、幸福と露西亞女の義務とに對する僕の見解を君にも述べさせて呉れ、クレイツナツフでは言ひ盡きなかつたから。

三、子供の秘密

けれど、私は茲で、一と先づ、停まることにする。只人物を引出して、それを前以て讀者に紹介する爲であるから。それに、私は話し家としての彼を引出したい許りで、彼の見解には毫しも賛成する譯ではない。彼が「僻論家」であることは、既に説明して置いた。「幸福と現代の女の義務」とに對する彼の見解も、殆ど或る憤恚を以て説いてゐるけれども、別に獨創が光つてゐる譯でもない。これは彼の最も痛い所と思へばいゝのである。單に彼の意見では、女は、幸福であり、その一切の義務を果たす爲には、どうしても人に嫁して、結婚の中に出來る丈け多くの子供を——二人や三人でなく、六人から十人と、へとくになつて衰弱するまで——生まなければならぬのである。『その時に於て始めて彼女は生きた生命と接觸し、それをあらゆる現れに於て知ることが出来るのである。』

——それならば、寢室から出る日はないね！

——反對だ、大反對だ！

私は凡ての反對を豫感して、皆まで聞かないでも解つてゐる。『曰く大學、曰く高等教育、曰く何々』を秤に掛けてみた。けれど、一萬人の中でたつた一人の男が學者になる許りだといふやうなことは言はずに、私はどうして大學は結婚と子供の出産とを妨げるかと眞面目に貴方がたに訊ねる。否、大學は凡ての女の爲に、將來の學者の爲に、又單に教養ある者の爲にどうしても到來しなければならぬ。けれど、その後、大學を出た後は——『結婚だ、そして子を生め』である。今日まで、世の中で子を生むつてことよりも賢いことは、まだ何にも考へ出されてゐない。随つて、これが爲に智識を用意することが多ければ多い程、よくなつて行く譯である。されば、こそチャイツキイかしらが……

……子供を持つには

誰に智慧が足りなかつた……

と宣明したのである。彼が宣明した以所は、彼自身が生涯他人の聲を藉りて歐羅巴教育に就て叫んで許りたるた、極めて教養のない莫斯科人であつたからである。それ故に、遺言さへも書き得ないで、見ず知らずの人に、「我が親友ソネチカハ」として自分の地所を残したことが、後になつて分つた。『誰に智慧が足りなかつた。』と、いふ警句は五十年も續いた、何故ならば、五十年の間、露西亞には教養のある者がなかつ